

愛知学院大学

教養部紀要

第70巻 第3号

論文

- 松井 真一：質的データを利用した授業改善の有効性
——計量テキスト分析を用いた探索的分析——…………… (1)
- 石川 雅健：シャーマンのロールシャッハ反応
——思考・言語カテゴリーの観点より——…………… (17)
- 上原 宏行：等価選択肢数を用いた教養共通テスト分析の一例…………… (29)
- 香ノ木 隆臣：ロバート・ペン・ウォーレンの想像力の展開とその現代における意義…………… (39)
- 菅原 研州：天桂派『伝法儀規』について
——附録・天桂派『伝法儀規』翻刻資料——…………… (80)

研究ノート

- 中村 綾：古典教育の題材としての日本近世文学の可能性
——ICT活用教育プログラム開発の研究報告より——…………… (55)

研究業績 (2022年1月～12月)…………… (81)

第70巻総目次…………… (91)

2023

愛知学院大学教養部

質的データを利用した授業改善の有効性

——計量テキスト分析を用いた探索的分析——

松 井 真 一

Abstract

本稿の目的は、授業改善において質的データ（自由記述）の利用が有効であるか否かを計量テキスト分析によって検討することである。通常の授業評価アンケートは回答を量的データとして収集するためその利用用途に制限が生じる。また授業評価が高い科目においては授業改善点が見いだせないという問題もある。授業改善点に関する自由記述の計量テキスト分析からは授業評価が高い科目においても複数の改善点を見いだすことができ、自由記述であっても妥当性、客観性を確保しながら授業改善に役立てることが可能であることが明らかになった。

キーワード：授業改善、質的データ、自由記述、計量テキスト分析

1 問題の所在

本稿の目的は、授業改善において質的データ（自由記述）の利用が有効であるか否かを計量テキスト分析によって検討することである。

大学審議会により答申された「21世紀の大学像と今後の改革方策について」以降、各大学で授業評価を目的としたアンケートの実施が一般化している¹⁾。細井（2000）によれば同答申の内容は、①「社会的要請」に対応した大学の「多様化・個性化」、②「出口管理」の観点からの大学教育の徹底と大学院の重視、及びそれらの柔構造化・弾力化、③効率的運営をめざした大学の管理・評価体制の確立、の3つに大別される。細井の整理による②にはファカルティ・デベロップメント²⁾（以下、FD）の努力義務が盛り込まれ、1999年には大学設置基準においてFD実施が努力義務として定められた。さらには2008年には大学設置基準においてFD

実施は義務化され今日では各大学で研修会、授業検討会、授業評価アンケートが実施されている。

FDによる各取り組みのうち授業評価アンケートは学生からの評価をもとに授業内容、取り組みを改善する手法であり、受講者から直接にフィードバックを得られるという点で他の取り組みとは異なる利点がある。この利点を活かすべく多くの大学で授業評価アンケートが実施されているが、その様式は事前に準備された複数の項目についてそれぞれあてはまる程度を回答させるものであり、回答を量的データとして収集する方法を採用している。しかしこのような方法を採用する授業評価アンケートは事前に想定された「よい授業」の各側面において教員がどこに位置づけられるかを示すにとどまり、必ずしも授業改善の機能を果たすことに繋がらない場合がある。例えば、上述の方法で実施されたアンケートで既に高評価を得ている授業の場合、授業改善点を見いだすことができないことは容易に想像できる。澤田（2010）は、このような教員の位置付けを示すような授業アンケートについて、田口（2007）が整理した授業評価の5つの機能、「1. 意識改革の起爆剤」、「2. 授業改善の指針」、「3. 学生と教員間、あるいは教員相互のコミュニケーション」、「4. 優れた教育者を評価する、あるいは教員が自身の教育業績を示すための証拠資料」、「5. 教育の質保証などのアカウントビリティのための根拠資料」を提示しながら、「4. 優れた教育者を評価する、あるいは教員が自身の教育業績を示すための証拠資料」、「5. 教育の質保証などのアカウントビリティのための根拠資料」に該当するものであり「2. 授業改善の指針」を与えるものとは目的が異なると区別している。また大山（2001）は、授業評価は測定尺度の観点からみると、「信頼性の問題」（測定時期、評価者の固有適応、評価者視点の誘目による評価の揺れ）と「妥当性の問題」（評価フォーム、情報縮約、学生の評価自体の妥当性に由来する測定すべきものが測定されているか）という2つの問題が存在していることを指摘している。さらに安岡（2007）は、授業評価アンケートに関する先行研究を整理するなかで、受講人数が少ないほど高評価になりやすいこと、教員の年齢が高いほど低評価になりやすいこと、学生の期待が高いほど高評価になりやすいことなどを示し、複数の要因が評価の高低に関連していることを指摘している。教員や受講者の属性によって授業評価アンケートの傾向が異なることは結果の解釈についても注意が必要であることを示唆するものである。

以上の事柄を統合すると、これまで多くの大学でFDの努力義務化、義務化の流れのなかで授業評価アンケートが取り入れられてきたが、回答を量的データとして収集する授業評価アンケートは「よい授業」に対する各教員の位置付けを測定するものになっていること、測定尺度の信頼性と妥当性の検討が不十分であること、またアンケートの回答は属性によって一定の傾向が見られるため、当初にFDが意図していた授業改善に資するものとしての機能を果たして

いるかどうかは慎重に見ていかねばならないことを指摘できる。

2 授業評価アンケート改善の試みと課題

それでは既存の授業評価アンケートに課題があることを認めただうえで、授業改善への利用を図る際にはどのような方法があるだろうか。1つは澤田（2010）が指摘するように、授業評価アンケートを授業評価そのものを表した実態と考えず、心理尺度とみなしたうえで利用する方法である。この際には、「満足度」のような単一の評価項目や評価項目の平均値を利用するのではなく、多次元の評価尺度から因子構造の解明に基づき各教員の特性や“くせ”を提示し、教員みずからが省察のうちに授業改善に努めることになる。この方法は想定された「よい授業」の中での位置づけを探るものではない点で既存の授業評価アンケートの課題を乗り越えるものである。一方で因子構造の解明から明らかにされる教員の特性や“くせ”自体は直接に授業改善に繋がるものではない、という課題も残る。この場合、授業改善は自らの特性や“くせ”を踏まえたうえで、学生との対話や他教員との議論のなかで改善点を見いだしていかなければならない。

別の方法としては、松本・塚本（2004）が実施した、CS（Customer Satisfaction：顧客満足度）分析の応用が考えられる。CS分析とは、消費者のニーズと商品やサービスの満足度を調査することで改善点を見だし経営戦略を決定する分析手法の総称である。この方法を授業評価に適用すれば、消費者＝学生、商品・サービス＝授業となる。また、そこから導き出された授業評価は、「よい授業」に対する教員の位置づけではなく、学生から見た授業の満足度となり、教員は常に学生が求める“満足”を充足させるために授業を行い改善することが求められる。一見するとCS分析の考えと方法は授業改善という点で学生、教員の双方にとって望ましいものに見える。しかし、この方法にも課題は残る。それは学生の満足度が高い授業が必ずしも良い授業とは言えない点である。松本・塚本（2004）もその論考のなかで、教員と学生の満足度が乖離する可能性、卒業後に役立った科目や自主的に学んだ科目などが「良い科目」と解釈できる可能性を示し、どのような科目が「良い科目」なのかについては注意を要することを指摘している。この指摘を踏まえれば、顧客満足度を高めることで自ずと授業改善が実現すると考えるのは危険である³⁾。以上のように、従来の授業評価アンケートは、そこで生じうる課題を認識していたとしても上述のような複数の課題を内包することが避けられない。この事態を回避するためにはアンケートの質問や選択肢を慎重に検討し改善していくことが考えられるがその実現には多くの時間を要する。特に今日FDの一貫として行われている授業評価アンケートは全学的な取り組みであるため、その質問や選択肢は、授業形式により多少の違いはあ

るものの、画一的に準備されておりその変更には年単位での時間が必要となる。

3 自由記述を利用した授業改善の可能性

このような状況のなか先の課題を克服するために比較的容易に実施できるのが自由記述の利用である。授業評価アンケートでは選択式の回答欄とは別に自由記述欄が設けられている場合が多く、受講学生は事前に設けられた質問にとらわれず自由にコメントを記すことができる。授業評価アンケートの自由記述欄は内容を限定せずに記入させるものが多く、その内容も授業内容に関する感想から教室設備への意見、カリキュラム全体への言及まで多岐にわたる。それ故に自由記述欄への回答は授業評価アンケートに含まれるものの、特定の基準から分析、解釈されずに教員が確認する程度に利用される場合が多い。しかし、自由記述はその目的を明らかにして適切に実施されれば、量的データの収集を中心とした授業評価アンケートよりも授業改善に資する可能性がある。

自由記述はその雑多性、言い換えるならば情報量の多さ故に分析が難しいと考えられてきた。観察者＝教員が意図しない回答や文脈への依存性が強いものが混じっているため内容の把握に苦勞するものもある⁴⁾。しかし、そのような解読にかかるコストを前提にしても自由記述で得られる質的データには量的データよりも優れている側面がある。それは観察者＝教員よりも回答者＝学生のほうが質問された項目について「よく知っている」ことである。筒井 (2021) は社会科学で扱う量的データはカテゴリカル・データ (性別、学歴、学歴構成など) が多く、それらは質的理解に依拠して回答されていることを指摘している。つまりカテゴリカル・データとして回答されるには、例えば性別が何を指し、どのような区分として理解されているのかという性別に関する概念理解がなければ回答することができず、これは計量的な計算の結果ではなく回答者の質的理解に依存しているということである。さらにはデータが実情をどの程度反映しているかという「解像度」においても基本的に質的データの方がきめ細かい (筒井 2021)。この指摘を踏まえれば、授業改善においても改善点を「よく知っている」受講学生にその指摘を任せてしまう方法、すなわち自由記述で回答を質的データとして収集する方法は、データの質の側面からみても授業改善に効果的であると考えられる。

人文科学、社会科学では古くから質的データを分析する手法として内容分析 (content analysis) が知られており、文章・音声・映像に関する分析で利用されてきた。内容分析の定義は時代や論者によって違いが見られるが、多くの者の共通認識としては「表明されたコミュニケーション内容を客観的、体系的、かつ数量的に記述する調査技術」(Berelson 1954) が挙げられるだろう。質的データに量的方法である内容分析を適用することで、自由記述を学生の

主観的な意見と軽視することなく、またその抽出においても教員の恣意的な選択の結果として疑うのではなく、妥当性・客観性を確保しながら扱うことが可能になる。既に社会調査法の分野では、内容分析の流れを汲み、自由記述をコンピュータを使って自動的にコーティングする方法が検討されている。さらに樋口（2020）は、分析中の一部分であるコーティングだけではなく、分析プロセス全体を対象として内容分析を行う「計量テキスト分析」⁵⁾を拡充させていくことを提案している。そこで本稿では、授業改善に関する自由記述を計量テキスト分析を用いて解析し、授業改善において自由記述の利用が有効であるか否かを検討する。

4 データと方法

4.1 分析対象者

分析に用いる調査データは2022年度愛知学院大学総合政策学部の開講科目「社会調査論Ⅱ（秋学期）」で実施された「社会調査論Ⅱ 2022_授業改善アンケート」（以下、授業改善アンケート）である。本科目は2年生以上を対象に実施され、調査票の作成、分析、調査報告書の執筆といった社会調査の基本的取り組みを実際に経験しながら学ぶ科目である。なお本科目は1年生で履修する「社会調査論Ⅰ」で社会調査実施にあたっての基本的知識を修得済みであることを前提として進められる。本調査は当該科目の最終講義日に Google Forms を利用して実施され、受講者数35名のうち30名の回答を得た⁶⁾。

回答者の性別は男性22名（73.3%）、女性7名（23.3%）、答えたくない1名（3.3%）。学年は2年生20名（66.7%）、3年生10名（33.3%）であった。

4.2 分析方法

本稿では自由記述の分析に共起ネットワークによる抽出語の図示と対応分析を用いた。共起ネットワークとは、テキストのなかで同時に登場する語句をネットワークとして図示する方法で、そこで描かれる円の大きさは抽出語の出現頻度を表し、円と円を結ぶ線の距離は関連性の程度を示す。本稿では共起ネットワークで示された語句をノード、円と円を結ぶ線をリンクと呼ぶ。共起は集合間の類似度を測る際に用いられる Jaccard 係数をテキスト間の関連尺度とみなして計測する。すなわちある語句を検索した際に当てはまる数を $n(X)$ としたとき、テキスト A およびテキスト B に含まれる単語の関係性の程度は次式の Jaccard 係数によって求められる。また抽出された語句はつながりの強さを基準としてサブグラフと呼ばれるグループに分けて描写される⁷⁾。共起ネットワークの図示を含め本稿で扱う計量テキスト分析には KH Coder.3.Beta.06d を利用した。

$$\text{jaccard}(A, B) = \frac{n(A \cap B)}{n(A \cup B)}$$

4.3 調査項目

「社会調査論Ⅱ 2022_授業改善アンケート」に含まれる調査項目は表1のとおりである。本稿ではこのうち⑦、⑨、⑫を利用する。

⑦授業改善点（選択式）は「グループメンバーの決め方」、「調査テーマ」、「調査対象者」、「座席」、「教員のアドバイス」、「グループの自主性」、「クロス表有意差検定」、「フリーライダー」、「特でない」の9つの項目の中から当てはまるものを最大2つまで尋ねている。

⑨授業満足度（選択式）は「あなたの授業の満足度を教えてください」という質問について「とても満足している」～「とても不満である」までの5段階で尋ねている。

⑫授業問題点・改善点（自由記述）は、「社会調査論Ⅱを受講して問題・改善の余地があると感じた事柄を具体例と共に教えてください（300～500字程度）」という質問への自由記述式回答である。

表1 「社会調査論Ⅱ 2022_授業改善アンケート」調査項目

調査項目	
① 性別（選択式）	⑧ 授業への熱意（選択式）
② 学年（選択式）	⑨ 授業満足度（選択式）
③ 最適グループ人数（選択式）	⑩ 受講理由（自由記述）
④ 予習・復習・課題時間（選択式）	⑪ 授業で印象に残っている事柄（自由記述）
⑤ 時間過大と思われる授業回（選択式）	⑫ 授業問題点・改善点（自由記述）
⑥ 時間過小と思われる授業回（選択式）	⑬ 改善アイデア（自由記述）
⑦ 授業改善点（選択式）	

5 分析結果

5.1 予備的分析

共起ネットワークによる分析の前に全学的に実施された2022年度秋学期「学生による授業評価アンケート」における「社会調査論Ⅱ」の結果を確認することで、従来のアンケートの課題を確認しておく⁸⁾。なお本アンケートの回答選択肢は全て5段階で尋ねられているが、①は「全て出席している」～「半分は出席の3分の1以下である」、②は「2時間以上した」～「予習も復習もしなかった」となっており他の質問とは文言が異なる。図中では視認性を考慮して出席、勉強時間ともに良好であるほど「そう思う」となるように読み替えて図示した。

質的データを利用した授業改善の有効性

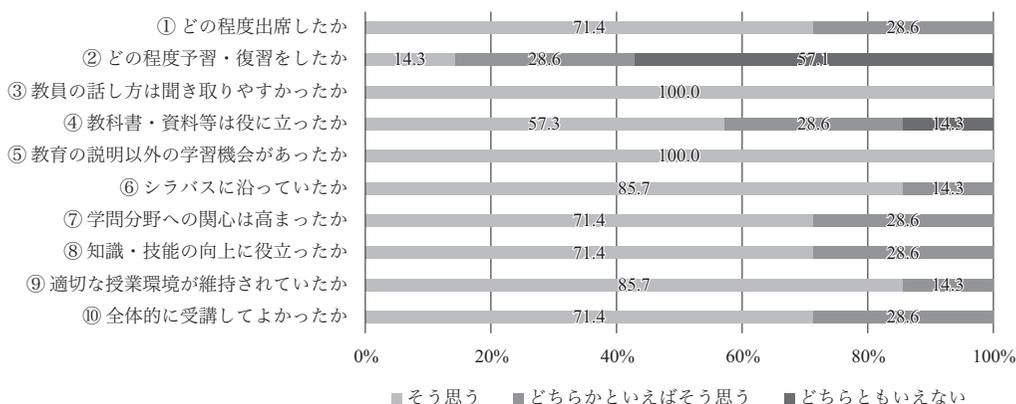


図1 2022年度授業評価アンケート「社会調査論（秋学期）」の結果

2022年度秋学期「学生による授業評価アンケート」は図1に示された調査項目および「その他、意見、感想、要望など」の自由記述から構成されている。図1からは良好な評価が読み取れる。とくに③～⑥の授業改善に役立つと思われる項目は、④を除いて、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」で占められており、直ちに授業改善を要する箇所は見当たらない。自由記述においても感謝の意を示すものが1つだけ記載されている状況であり授業改善の手かかりとなるものはなかった。

ただし、筆者が本アンケートとは別に行った、「授業改善アンケート」に記載されている自由記述の分析からは一定数の学生からはっきりと授業改善を求める箇所が示され、全学の授業評価アンケートとは異なる結果が示される。

「学生による授業評価アンケート」の結果が良好であったことは既に言及したように本アンケートが授業改善というよりも「よい授業」を前提とした教員の位置づけをあらわすことに主眼をおいた構成になっているためと考えられる。ここでは、聞き取りやすい、豊富な資料を用いる、一方通行の授業にならない、シラバスに適合している授業が「良い授業」と想定されており、それ以外の部分は捨象されてしまっている。もちろん上述の事柄を満たすことで学生の能力向上により寄与する授業になるであろうことは否定しないが、授業改善という点からは既にこれらの項目で高評価を得ている授業は得られるものが少ない。

5.2 共起ネットワークによる分析

次に「授業改善アンケート」の結果を確認する。図2は授業改善点（選択式）の結果である。

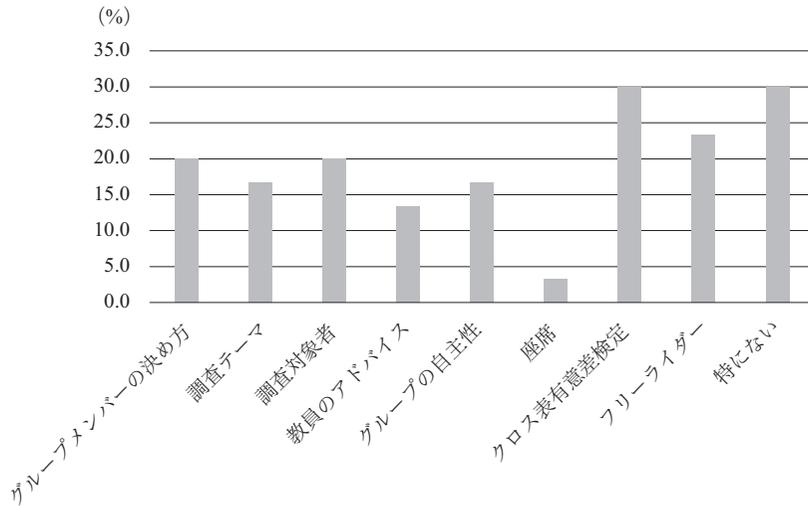


図2 授業改善点（選択式）の結果

図2をみれば、授業評価アンケートとは対照的に、本科目においてもいくつか改善を求める意見があることを確認できる。どれも同じ程度の改善希望が出されているがクロス表の有意差検定とフリーライダーがやや高い値になっている。本科目ではグループ別に調査を行うこと及び相関分析を必ず用いることを課していたため、グループ内でのフリーライダーに苦慮したこと及び相関分析ではなくクロス表の有意差検定を学びたかったという意見が反映されていると解釈できる。本稿では自由記述の検討を目的としているため選択式の結果についてはこれ以上言及しないが、全学アンケートとは異なる視点から設問を設けることで先のアンケートでは見いだされなかった改善点が指摘されていること、すなわち本科目にも授業改善の余地が存在することは確認しておく。

図3は授業改善点（自由記述）を用いて共起ネットワークを描いたものである。描写にあたってはネットワークの解釈を容易にするために、繋がりが維持される最小にまでリンクの数を減少した最小スパニング・ツリーを利用している。

図3からは6つのサブグラフが確認できる⁹⁾。①は「時間」、「もう少し」、「少ない」といった語句がノードとして観測される。抽出元の自由記述を確認すると「時間がもう少し欲しいです」、「もう少し時間を作った方が」といった話題が含まれることから①は「時間不足」に関するサブグラフと解釈できる。

②、③は、サブグラフ上では区別して図示されているが、「グループ内の不満」についてのサブグラフと解釈するのが良いだろう。②、③は自由記述では「授業時間内で終わらせる作業量に改善するべきだと考えます」、「フリーライダーな思考の人がいるとグループ内のモチベー

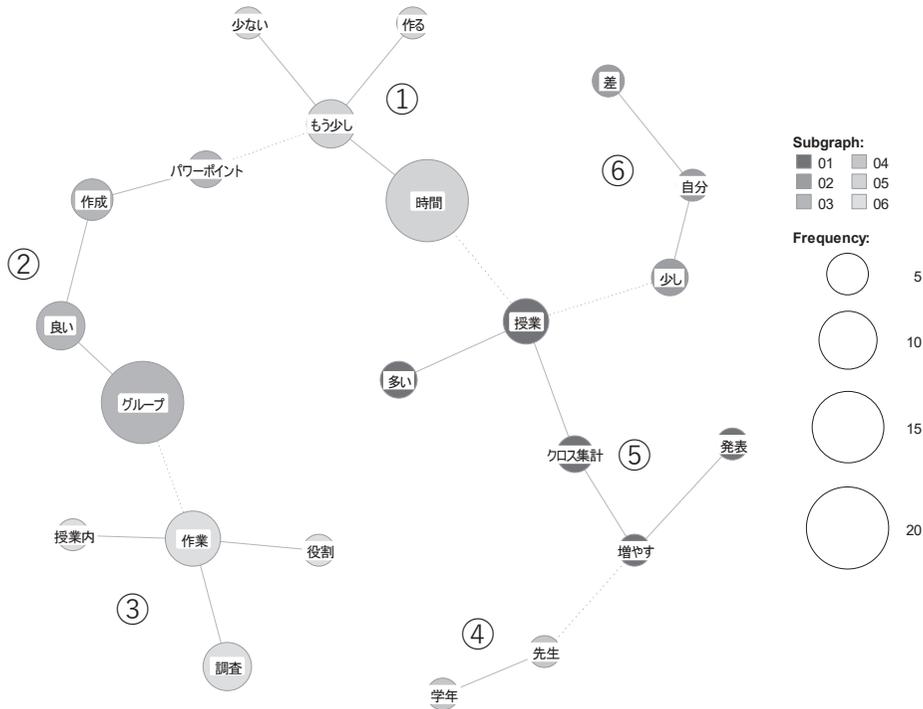


図3 授業改善点（自由記述）の共起ネットワーク

ションが下がる……、何かしらの作業でもやってくれたら」、「グループ内での時間が合わず、やる人とやらない人で差があった気がする」といった話題が記載されており、グループ活動で生じる取り組みの差への不満を示したサブグラフと解釈できる¹⁰⁾。

④は「教員の関わり方」を示したサブグラフと解釈できる。ここでは「上の学年の人の怠けに対して指摘できない……そこは先生が」、「やる気がある人に負担が偏ってしまう。改善として、先生側から全員に」、「先生に質問したい場面も多いので」といった話題が見られた。

⑤、⑥は「授業内容」に関するサブグラフと解釈できる。ここには「クロス集計が難しく時間がかかるし……授業の回数を増やしてもらいたいと思った」、「パワーポイントや報告書作成の時に少し大変な目があったので」、「発表前の時間を作ることでより精度の高いパワーポイントと原稿が作れるようになる」といった記述が見られた。いずれも授業の内容に関する話題であるため「授業内容」とした。

以上のように共起ネットワークによる分析からは「時間不足」、「グループ内の不満」、「教員の関わり方」、「授業内容」に改善が求められていることが明らかになった。

5.3 授業満足度別の授業改善点（自由記述）

次に授業満足度と授業改善点（自由記述）の関連について検討する。この検討により授業の満足度別にどのような授業改善点を挙げているのかを確認できる。図4は対応分析の結果から授業満足度別に授業改善点（自由記述）を示したものである¹¹⁾。

図4によると「とても満足している」、「やや満足している」は比較的近くに付置されているのに対して「どちらともいえない」は両者からやや離れている。ここからは「とても満足している」、「やや満足している」と回答した者は授業改善点の自由記述において特徴的な語が似ていることを確認できる。一方で「どちらともいえない」を選んだ者は授業改善点の自由記述において先の両者とは文章に含まれる特徴的な語が異なることがわかる。

それぞれの満足度別に特徴的な語を具体的に確認しよう。「とても満足している」では「作る」、「発表」、「パワーポイント」などが特徴的な語として挙げられる。自由記述では「作る」、「発表」は、「発表前の時間を作ることでより精度の高いパワーポイントと原稿が作れるようになる」、「発表資料作成の時間をもっと増やしてほしい」といった話題が挙げられている。これ

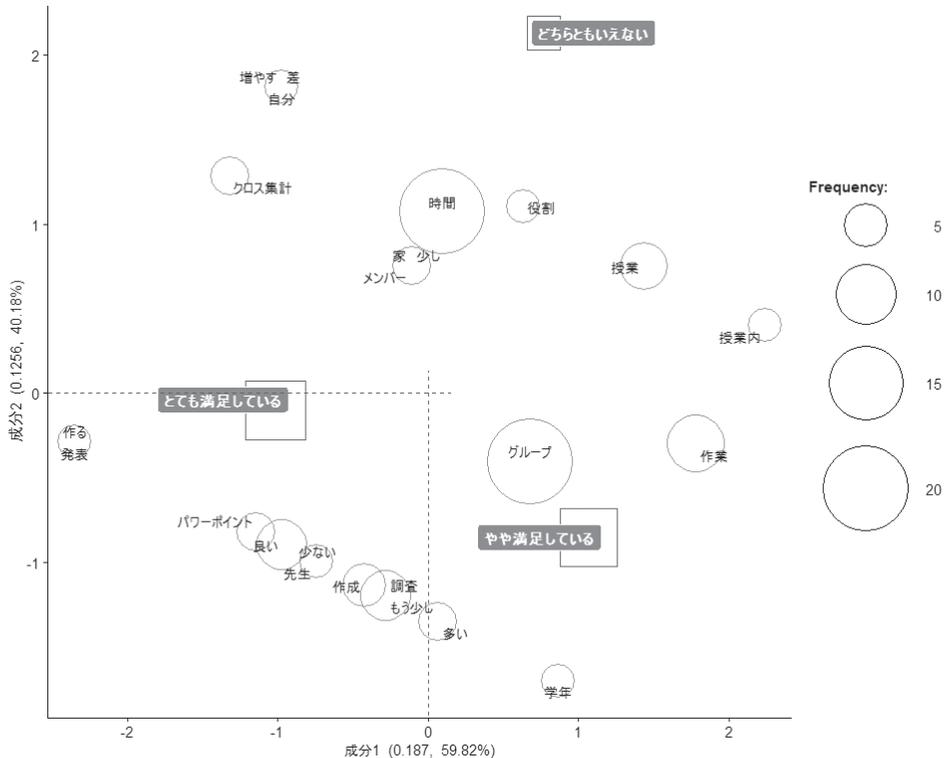


図4 授業満足度と授業改善点（自由記述）の対応分析結果

らの話題からは、授業の改善点を記述する箇所ではあるものの、授業の改善を通してより質の高いものを完成させたいという積極的な姿勢が読み取れる。

「やや満足している」と回答した者の特徴語としては「グループ」、「学年」、「作業」が挙げられる。「グループ」には、沢山の話題が含まれているが、前節で指摘したようにメンバー間の取り組み姿勢に関する話題が多い。また「学年」で話題にされる上級学年の取り組み姿勢や「作業」で話題にされるメンバー間での作業量の負担の違い、授業時間外での作業量の多さもよく見られる話題である。したがって本グループは「とても満足している」とした者の回答傾向と似ているが、他のメンバーの取り組みや作業量に不満を感じていた者たちと考えられるだろう。

「どちらともいえない」の特徴語は「時間」、「役割」、「授業」、「授業内」などである。自由記述では「授業内での時間では足りず」、「授業外の作業が多く」、「一人一人に役割を持たしたほうがいい」、「家だとできない」などが話題として挙がっている。「どちらともいえない」と回答した者は、課題の取り組みに時間がかかり授業時間内で終わられないこと、役割分担が上手くいかなかったことに不満を抱えていると考えられる。とくに「時間」への言及は頻出しており、クロス集計の難しさやメンバー間で役割分担が上手くなされず特定の人物に負担が偏ってしまうことへの不満が見られた。

6 結論と考察

本稿は、計量テキスト分析を用いて授業改善アンケートの自由記述を分析し、授業改善に対する有効性について検討した。その結果、授業改善における選択式アンケートの限界と自由記述の計量テキスト分析の有効性が確認された。

授業評価における回答選択式アンケートは多くの大学で実施されており、様々な科目に適用できる汎用性と回答者の負担軽減という点で優れている。しかし、回答が選択式である故に事前に「良い授業」の評価軸を定めておく必要があるが、「良い授業」とはどのような授業であるのかという評価軸に関する議論が本格的に行われることは少ない。また検討のうえ「良い授業」についての一定の合意が得られたとしてもそれらを適切に質問文に落とし込んだうえで回答肢を用意することはさらに困難な課題となる。また回答者の属性や授業人数によって回答傾向が異なることも明らかになっているため、回答選択式アンケートを授業改善目的で利用することは想定以上に難しい。利用の難しさは特に高評価を得ている授業で顕著である。

このような課題を克服する方法として自由記述の計量テキスト分析を試みた。計量テキスト分析の結果からは、授業に満足していると回答した者たちからも授業改善点を見いだすことが

できた。回答選択式アンケートでは事前に準備した評価軸が高評価の場合には授業改善点を見いだすことができないが、自由記述の場合には回答者自身に改善点を挙げさせるためそのような心配はない。また自由記述の場合には意見の採用において観察者＝教員の裁量が大きくなるため恣意性が疑われることもあるが、本稿で採用した計量テキスト分析を利用すれば、第三者にもその妥当性と客観性を示しながら特徴的な語句と話題を抽出することができることを確認した。

また授業満足度と授業改善点の対応分析からは、授業満足度の程度によってどのような授業改善を望んでいるのかについて違いがあることが明らかになった。高評価層（「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」に該当）はより授業内容を充実させる改善を希望しているのに対して、中間層（「どちらともいえない」に該当）では授業内で課題が終わらないことやグループ活動での分担に不満を抱えていることが示された。

このような発見は授業改善に役立てることができる。つまり、今後の授業の進め方としては、教員による個別指導の機会を増やしつつ、なるべく授業時間内で多くの作業時間を確保できるように努めることが望まれる。同時に余力がある学生には発展的な内容（今回の授業で言えばクロス表の有意差検定）を教えることも考えられるだろう。また指導の際には教員がグループ内の役割分担が上手く機能しているかをチェックすることも求められる¹²⁾。

以上のように自由記述を用いることで回答選択式アンケートでは発見できなかった授業改善点が見いだせることが明らかになった。授業評価アンケートの自由記述が確認程度にしか利用されていない現状を鑑みれば、自由記述を教員の裁量に頼らない方法で授業改善に役立てる方法が見いだされたことは大きな意義を持つ。また本稿では授業改善点に主眼を置いたが、受講理由や授業への取り組みの程度を利用した分析も可能である。これらを含めれば授業全体をより細かく把握することができるため、一部の受講生により効果的な指導方法を考えることも可能になる。

最後に授業改善を目的として計量テキスト分析を行う際の制約と課題を述べる。第一に自由記述は記述内容を定めて回答させる必要がある。本稿で示した全学で実施される「授業評価アンケート」にも自由記述欄は存在するが、当欄への記述はほとんどなくまた内容も授業改善には利用できないものであった。自由記述欄への回答と内容を任意にしまうと回答そのものが収集できないまたは内容がとても薄いものになってしまう恐れがある。

第二に内容分析や計量テキスト分析に関する一定程度の習熟が必要な点である。本稿で利用した KH Coder を利用すれば計量テキスト分析を行うこと自体はそれほど難しくない。しかし KH Coder で自動処理されている統計的手続きや方法を理解していないと解釈を誤る可能性がある。また KH Coder 作成者の樋口（2020）は質的データの計量的分析においては、「可能な

限り厳格な形で量的分析を行ったとしても、研究のさまざまな段階で、量的ではない質的な作業が必要になる」と指摘している。抽出された語句や話題をそのまま記載することで分析が完了するわけではないこと、抽出された語句を理解するためには自由記述の記載内容に立ち戻りながら理解に努めなければならないことには注意が必要である。

第三に回答選択式アンケートの利用可能性を軽視しないことである。本稿では回答選択式アンケートの課題と限界を指摘したが、その汎用性と簡便性は優れた点として評価できる。「良い授業」の想定やアンケート結果が何を示したものであるのかなどについては議論の余地があるものの、誰もが利用できその結果が一覧となって示されることの利益は大きい。従来の方法を完全に否定して排除するのではなく利点を認めつつ改善を図るのが効率的であろう。量的データと質的データは共に有用性が認められるため、どちらか一方に偏った利用とならないように注意を払わなければならない。

注

- 1) 読売新聞が2008年に国内の全大学を対象に行った調査によると、学生による授業評価アンケートを全学で実施している大学は96%である（読売新聞教育取材班 2010）。
- 2) 文科省の諮問機関である中央教育審議会はファカルティ・デベロップメントを「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。」と定義したうえで具体例として、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げている。
- 3) 松本・塚本（2004）では、「……、少なくとも『総合満足』の評価を高めることが授業改悪になるとは思われない。また授業改善として目指すべき幾つかのベクトルの一つであることも間違いのないと思われるので、……（松本・塚本 2004: 23）」として顧客満足度の考えを援用する際の注意点を認識しながら、幾つかのベクトルの一つとして慎重に利用している。
- 4) たとえば「楽しく学べました」というコメントも、教員の話し方（話術）、授業内での取り組み（作業、課題など）、友人と一緒にすることなど「楽しい」理由は様々な可能性がある。ここから「楽しい」理由を見いだすにはその語句と共に記述されている話題が何であるかを見いださなければならない。ただし、その場合にも「楽しい」の前後に理由と思われる話題が必ず記述されているとは限らないうえ、そもそも理由が記載されていない場合もある。
- 5) 樋口（2020）は、計量テキスト分析の定義を「計量的手法を用いてテキスト型データを整理または分析し内容分析（content analysis）を行う方法である。計量テキスト分析の実践においては、コンピュータの適切な利用が望ましい」としている。ここで言及される「分析」においてはこれまで、分析者自身が分類基準を作成する Dictionary-based アプローチとコンピュータに自動的に分類させる Correlational アプローチが併存してきた。計量テキスト分析では両者を統合した「統合アプローチ」が提案され、本稿で利用する KH Coder はこれを実現するソフトウェアとして設計されている（樋口 2004）。
- 6) KH Coder を利用した分析では、定量データを扱う一般的な社会調査と同様に、サンプルサイズは50～100件以上が望ましいとされている。本稿の利用データはこれを下回っているため分析の際には次のようにし

- た。共起ネットワークにおける語の最小出現回数は全体の一割となる3回としつつ、描画する共起ネットワークは50とすることで登場が極めて少ない語を用いて分析されることのないように配慮した。
- 7) 共起ネットワークの図示に至るまでの過程と図の解釈例については福井・阿部(2013)が詳しい。
- 8) 2022年度秋学期「学生による授業評価アンケート」における本科目の回答率は20.0% (全学平均回答率18%)である。そもその回答率が極めて低いことは授業改善に利用するにあたってさらなる困難を生じさせる。今回は回答率が低いことについては議論しないが授業改善に資するものとするためには回答率の向上が必要なことは別の問題として指摘できる。
- 9) 共起ネットワークの描画においては6つのサブグラフが確認できたが、共起ネットワークのサブグラフは必ずしも別の話題を扱っているわけではないため、共起関係にある語句の元の文書を確認しながらそれぞれのサブグラフを解釈した。
- 10) ここでは「良い」の語句も抽出されているが、元の文書で文脈を確認すれば「～したほうが良い」という意味で用いられており、その多くはグループ内での作業に偏りがないようにする方法を「～したほうが良い」と提案したものである。したがって、ここでは「グループ活動の良さ」ではなく「グループ内の不満」と解釈した。
- 11) 授業満足度は「とても満足している」～「とても不満である」の5段階でたずねられているが、回答は「とても満足している」15名(30%)、「やや満足している」12名(40%)、「どちらともいえない」3名(10%)となっているため、対応分析は上述の3つのカテゴリーだけが示されている。
- 12) 今回対象科目とした「社会調査論Ⅱ」については発表資料や報告書の作成時間を現在以上に確保することは難しい。このため授業の初期段階で授業時間外での課題となる旨を十分に周知して授業時間外での学習時間を見込んで個々のスケジュールを組ませることも不満低減に役立つと思われる。

[付記]

2022年度秋学期「学生による授業評価アンケート」は愛知学院大学教務部教務課の許可を得て使用した。

文献

- Berelson, B., 1954, *Content Analysis*, Cambridge, MA: Addison-Wesly. (稲葉三千男・金圭煥訳, 1957, 『内容分析』みすず書房.)
- 樋口耕一, 2004, 「テキスト型データの計量的分析——2つのアプローチの峻別と接合」『理論と方法』19(1): 101-115.
- , 2020, 『社会調査のための計量テキスト分析——内容分析の継承と発展を目指して 第2版』ナカニシヤ出版.
- 福井美弥・阿部浩和, 2013, 「異なる文体における共起ネットワーク図の図的解釈」『図学研究』47(4): 3-9.
- 細井克彦, 2000, 「大学審議会答申『21世紀の大学像』——その機能と構造」『日本教育政策学会年報』7: 88-95.
- 松本幸正・塚本弥八郎, 2004, 「CS分析の考え方を導入した授業評価アンケートの分析と授業改善ポイントの定量化」『京都大学高等教育研究』10: 21-32.
- 大山康宏, 2001, 「大学教育評価の課題と展望」『京都大学高等教育研究』7: 37-55.
- 澤田忠幸, 2010, 「学生による授業評価の課題と展望」『愛媛県立医療技術大学紀要』7(1): 13-19.

質的データを利用した授業改善の有効性

- 筒井淳也, 2021, 『社会学——『非サイエンス』的な知の居場所』岩波書店.
- 安岡高志, 2007, 「学生による授業評価の進展を探る」『京都大学高等教育研究』13: 73-88.
- 田口真奈, 2007, 「授業評価の諸機能」, 山地弘起編『授業評価活用ハンドブック』玉川大学出版部, 31-51.
- 読売新聞教育取材班, 2010, 『教育ルネサンス 大学の実力』中央公論新社.

シャーマンのロールシャッハ反応

——思考・言語カテゴリーの観点より——

石川 雅 健

キーワード：シャーマン、ユタ、ロールシャッハ、パーソナリティー、思考・言語カテゴリー

I. 問題と目的

沖縄本島のみならず周辺離島や宮古地方、八重山地方、かつては琉球王朝の城内にあった鹿兒島の奄美大島地方には「民間巫者」として「ユタ」が存在する。地域によっては「カミンチュ」「ムヌス（リ）」「ウグァンサー」「カンカカリヤー」などと呼ばれ、生き方や進む道など様々な案内役として個人の吉凶を見、中には霊と話す力を持ち、死者の口寄せ、先祖事、仏壇事などの霊的難に応じ、占い、お祓いを行う「相談役」としての役割を与えられ、「野のカウンセラー」として存在している。

一方、「公的巫者」としての「ノロ（祝女）」は「司」「カミンチュ（神人）」とも呼ばれ、先祖代々受け継がれる世襲制で、御嶽、土地神、拝所、神殿等の神声を聞き、祈り、豊穡、安全を願い、^{かななぎ}巫として神声を伝える「仲介役」「女司祭」の役割を与えられている。

いずれも、生まれながらにして神に仕える宿命を持った「ウマリングァ（生まれの子）」として認められ、「サーダカ」「サーダカウマリ（精高生まれ）」と沖縄では言われる。勘が鋭く見えない部分を見抜く力、洞察力があると考えられ、桜井（1988）は、両者とも沖縄民間信仰の底辺を貫流するシャーマニズムの根の上に立ち、沖縄の民間信仰を支える車の両輪といえると述べている。

本来、世襲制のノロに対してユタは、神に呼び出され使命を与えられる召命型であり、「カンダーリィ（ターリィ）（神垂れ、神障り）」と呼ばれる原因不明の体調不良（気持ちが落ち着か

ない、眠れない、夢心地、意識不明、独り言・唄い・踊る、頭痛、胸の圧迫、動悸、皮膚病、出血、食欲不振など）や巫病、夢の啓示などユタになるための通過体験としての成巫過程が存在し、そこにはいろいろな辛い体験や度重なる不幸が賦与されることが多い。また、ユタのなかにはノロの役割を担っている人もいて、池上（1992）は、その境界は希薄になってきており、ノロも血縁による一定の条件はあるもののカミダーリイを経て成巫する 경우가ほとんどであると指摘している。

大橋英寿（2000）は、社会心理学・精神医学の観点から、カミダーリイ¹⁾は「身体的不定愁訴」「祈祷精神病の錯乱昏迷状態」「人格変換状態」に相当するが、医学用語に翻訳できない沖縄独特の病気像である「文化結合症候群」とし、その治療法として「信仰治療」を「成巫過程」にみとることができるとしている。カミダーリイ現象について、精神科医である高江洲（1983）は、精神医学用語に置き換えるのではなく「カミダーリイ症候群」として把握するのが望ましいとしている。

これまで筆者は、こうした野のカウンセラーとも言われる沖縄の霊的職能者である「ユタ」と称される人々と従来の「ユタ」の概念では説明できない「ユタの境界を生きる人々」（平井芽阿里 2020）を対象に、その成巫過程やパーソナリティなどについて考察を重ねてきている（石川 2021, 2022）。

本稿では、日常は正常人（一般人）として生活しているシャーマン（ユタもしくはユタ的人物）は、非シャーマンである沖縄在住の一般人とどのようなパーソナリティの相違があるのか、という点について、名古屋大学式技法（名大法）ロールシャッハ・テストの思考言語カテゴリーから散見されるパーソナリティの比較を試みた。

II. シャーマンとは

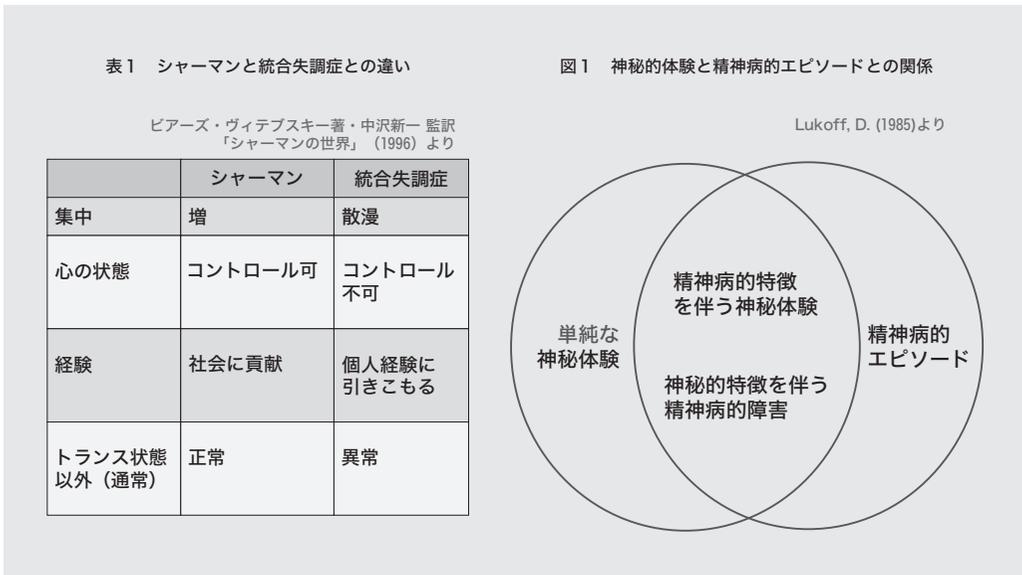
前述したように、沖縄本島およびその周辺離島・奄美諸島では、精神文化の担い手としてカウンセラーや精神科医と同様に「野のカウンセラー」として治療者的役割も果たしているシャーマンが存在する。

彼らは、ユタ、カミンチュ（神人）などと呼ばれているが、神として崇め立てられ地域の中で守られる一方で、1990年代頃までは祈祷精神病患者や憑依分裂病患者、ヒステリーや人格障害者などとして見なされ軽蔑され弾圧を受けてきた経緯もある。

その後、国内でも肯定的に受け止められ、2000年にアメリカ精神医学会が発表した DSM-IV-TR²⁾（精神障害の診断と統計の手引き）には、統合失調症³⁾とは別に「宗教または神の問題」のカテゴリーとして新たに分類され、単なる精神病とは異なった対応がなされてきている。

宗教人類学の観点からシャーマンは、「トランス状態に入って、超自然的存在（霊、神霊、聖霊、死霊など）と交信する現象を起こすとされる職能・人物」（佐々木 1973）、トランスパーソナル心理学の観点からは「知識と力を獲得し、他の人を救うために、意のままに変性意識状態に入り、日常的には隠されているリアリティに触れ、それを活用する人」（M. ハーナー 1980：高岡訳 1989）、「自らをトランス状態（忘我・恍惚）に導き、神・精霊・死者などの霊などと直接に交渉し、その力を借りて託宣・予言・治病などを行う宗教的職能者」（広辞苑 第5版 2005）と定義されている。

シャーマンに対する考え方も「真のシャーマンは全てが神経症的である」（ハルジン 1905）→「多くがヒステリー、半狂人もいる」（ボゴラズ 1910）→「精神的健康な者はシャーマンになれない」（ゼレニン 1935）→「病的で役立つ夢見がちなものから想像力あふれるアイデアマン」（ピアーズ・ヴィテブスキー 1996：中沢新一訳より）→1997年 多文化間精神医学会：ユタは地域の精神保健に貢献→2000年 DSM-IV-TR（精神障害の診断と統計の手引き）に「宗教またはスピリチュアルな問題」設定と変化して来ている。（表1 および図1 参照）



第5回多文化間精神医学会（1997/10/18 宜野湾）におけるシンポジウム「癒しと文化 — 土着から普遍へ—」（シンポジスト：上田紀行、大橋英寿、高江洲義英、北西憲二）では、沖縄土着の癒しの3つのキーワードの一つにユタの『判じ』を挙げ、ユタはある意味で地域の精神保健を担っていたという意見あり、専門家の間にもユタによって精神安定が得られ、それが沖縄人の長寿の一つとする見解さえある。（「カミンチュについて」より）

III. シャーマン（ユタ）のロールシャッハに関する先行研究

シャーマン（ユタ）を対象にロールシャッハ・テストを行った研究は数少ないが、ユタは、神、天地創造に関係した反応が多く（上江田 1969）、知覚様式は未分化・未熟で共感性や感受性はあまり豊かでなく、公共的な見方をすることも少ない。また、対人関係や社会適応はうまくいかない（松井、堀尾、大橋 1982）。

さらに、憑依患者を対象とした大宮司（1993）は、精神活動全体が脆弱で、自己の内面を統制する力に欠ける。その結果、現実吟味能力が低く、外界を見るよりも内的空想世界に閉じこもりやすい、と結論付けている。

加えて大橋（1982, 1998）は、個人差はあるが、大まかな把握から主観的イメージ展開へと進み、知覚様式は未分化で未熟な面を残す。共感性や感受性はあまり豊かとはいえず公共的な見方をすることも少ない。したがって対人関係や社会適応はうまくいかないと予想されるとしている。

近年では、青木（2007）が解離性障害者を対象として検査を実施し、対人関係面では他者との関係を築こうとするが時として現実離れしていると結論付け、統合失調者を対象とした沼、大貫、佐藤（2007）は、先行研究とスコア特徴に大差なしとしている。

このように、シャーマン（ユタ）を対象としたパーソナリティ研究はほとんどなく、否定的なものが多い印象である。また、上記の分析は反応内容からの解釈のみであるので、検査場面の言語表現や行動、より深層のパーソナリティを捉えるために名古屋大学式ロールシャッハの思考・言語カテゴリーを用いることで、より全人格的に分析が可能であると考えた。

IV. 名大式ロールシャッハ・テスト

ロールシャッハ・テストは1921年ヘルマン・ロールシャッハによって考案された投影法であり、インクの上を垂らし偶然に出来た模様の描かれた図版を被験者に1枚ずつ示し、何に見えるのかを自由に回答してもらうというものである。

ロールシャッハテストの他の投影法検査と異なる特徴としては、(1)性格特徴のみでなく、その時の心理状態、病理の特徴などをみることが可能、(2)本人が意識化できない心理特徴も把握可能である点であり、今回指標として用いる名大式ロールシャッハテストは、標準的なスコアリング・システムの他に「感情カテゴリー」と「思考・言語カテゴリー」を持っていることが特記すべき点である。

その中でも、今回分析に用いた思考言語カテゴリーは、Rapaport（1945）の deviant

verbalization (逸脱言語表現) → Thinking Disturbance (村松、村上 1958) → 「思考・言語カテゴリー」(植元 1974) → 村上、土川ら (1980) → 名古屋ロールシャッハ研究会 (1999) → 森田、高橋ら (2010) へと変遷、修正され、引き継がれてきており、検査場面の言語表現や行動をスコア化することによって、被験者の中で生じている心の動きをとらえようとするものである。換言すれば、検査場面の言語表現や行動をスコア化することによって、被験者の中で生じている心の動きをとらえようとするものであり (森田ら 2010)、思考・言語カテゴリーから見えてくるロールシャッハ反応の豊かな世界は、被験者の自我機能のありようを示してくれる (星野 1995) ものである。

V. 名大式「思考・言語カテゴリー」

森田ら (2018) によると、ロールシャッハ・テスト名古屋大学式技法における思考・言語カテゴリーは「ロールシャッハ法のプロトコルの中に広く分散してあらわれてくる思考・言語過程の様相を、質疑段階をも含めて被験者の言語表現 (verbalization) のすべてを分析対象とするものである」と記しており、以下の13カテゴリーから構成されている。

(1) 反応産出に伴う困難・萎縮的態度 (Constrictive Attitude)

例：「わかりません」(反応拒否)、「左右に人間」(対称性の描写) など

(2) 抽象的表現・カードの印象 (Abstraction and Card Impression)

例：「わあ、綺麗」「鋭い感じがする」「これは天の世界を連想する」など

(3) 防衛的な態度 (Defensive Attitude)

例：「～ですか」(質問)、「私には難しい」(弁明)、「犬、いや豚だ」など

(4) 強迫・些事拘泥の反応 (Obsessive and Circumstantial Response)

例：「右側が少し薄い」、「人間かな、怪獣かな。どちらにも見える」など

(5) 作話的反応 (Fabulization Response)

例：「可愛い女の子」、「アフリカ人」、「美しい鳥だけど心は汚い」など

(6) 連想の衰弱・不安定な意識状態 (Associative Debilitation and “Labile Bewußtseinslage”)

例：「何となく」(知覚理由の説明不可)、「蝶、そうじゃないでしょうか」(保証) など

(7) 反応の反復 (Repetition)

例：「これも蝶々」、「さっきのカードもこのカードも同じような滝に見える」など

(8) 恣意的思考 (Arbitrary Thinking)

例：「まさに沖繩アゲハです」(断定)、「右が虎で左が熊」(意味付け) など

(9)自閉的思考 (Autistic Thinking)

例：「花の上に海老がいる。変だね」(自己批判)、「ここが足だから猫」など

(10)個人的体験の引用と自我境界の障害 (Personal Response and Ego-boundary Disturbance)

例：「これ、家にあります」、「アニメに出てくるようなサタン」など

(11)表現の特異性 (Verbal Strangeness)

例：「今、私何て言った？」(健忘)、「祈って悟る『意乗り』」(新作言語) など

(12)連合弛緩 (Association-Looseness)

例：「雀みたいに仲良く…、爆弾…、バラバラ…」(支離滅裂傾向) など

(13)不適切な言動 (Inappropriate Behavior)

例：「人の顔、♪ば〜ばあばあ〜…」、手を合わせ拝む仕草、カードを裏表に回したり、斜めに持つ、水平に眺める、反応を自分の身体・行動で示す、など

VI. 方法

(1)対象：シャーマン (8名) (Case A~H)、非シャーマン (6名) (Case a~f)

(2)時期：A は2005年12月、B は2008年12月、C は2009年3月、D・E は2011年8月、F・G・a・c・d は2012年2月、H・b・e・f は2012年3月にロールシャッハテストを実施。

(3)方法：調査協力同意後、被検者の自宅や仕事場、閉店後のホテルレストランの一角等にて検査を実施。面接室検査と異なり検査構造は緩やかであり、厳密に統制された条件ではなかったが、検査協力者にとっては比較的日常的に近い慣れた場面での検査であり、不自由さ、緊張感などの問題は排除された。

(4)検査時間：依頼から終了までほぼ2〜3時間要した。

(5)分析：ロールシャッハ・テストは標準図版を用い、施行法及び分類は名大法に従った。

VII. 結果 (思考・言語カテゴリーの特徴)

ロールシャッハ・テストの主だった反応は以下の表2のとおりであった。

表2 ロールシャッハ反応結果

属性/反応	Tot.R	Add	Rej	T/Av	T/ach	T/c	Tur%	A%	F%	F+%	VIII XX /R%	P	M	FM
シャーマン	15.6	1.1	0.5	28.0	28.6	27.6	3.5	35.7	41.4	53.5	24.9	3.6	2.8	3.0
非シャーマン	24.3	1.8	0.3	11.8	11.6	11.9	1.3	51.6	53.8	58.9	26.1	2.8	1.8	2.8

† †

属性/反応	A 関連	H 関連	非現実	解剖	宗教	自然	植物	火・光	抽象
シャーマン	5.6	5.1	3.0	1.5	0.9	1.0	1.1	0.1	2.5
非シャーマン	11.3	5.2	0.7	1.2	0.5	0.2	1.5	0.2	1.8

†

† P < .10 傾向あり (カイ 2 乗 フィッシャーの直接確率検定)

(1) ロールシャッハ反応の群間比較と特徴

シャーマン群と非シャーマン群とのロールシャッハ反応の比較（形式分析）において、際立った大きな差はみられなかったが、(i)反応数が少なく、反応拒否、反応時間の遅延、A%が高いことから、防衛的・抑制的・萎縮的態度、知的能力の低さ、自分の能力以上のことをしようとする傾向がある。(ii)形態良好反応 (F+%) が低く、平凡反応 (P) の少なさからは、現実吟味が弱く協調性に欠けるように見受けられた。

(iii)外的統制に関しては、全体的に色彩反応が少なく、強い環境からの刺激に対して抑制される傾向がみられた、という特徴があり、前述した大橋 (1982, 1998) の結果と類似したものであった。シャーマンの溢れ出る言葉や知識、活動的で行動的なエネルギーに反して、知的レベルでは想像力の貧困、行動レベルでは反応しようとする欲求はあるものの過度の防衛が見受けられた。(表 2)

(2) 思考・言語カテゴリーからみた群間比較と特徴

結果としては、シャーマン群と非シャーマン群との間に差が見受けられた思考・言語カテゴリーは、13カテゴリー中6カテゴリー ((2)抽象的表現・カードの印象、(5)作話反応、(7)反応の反復、(8)恣意的思考、(10)個人的体験の引用と自我境界の障害、(13)不適切な言動) であった。(表 3)

これらのことから、(i)非シャーマン群は、芸術的センスや過敏性、想像力、合理化の対応に顕著である。(ii)シャーマン群には、自由な想像性・創造性の不足の反映、現実吟味にそれ程崩れはないものの、妄想をもち易い素地を有している。また、祈りの行動や一般的でない図版の処理の方法、検査を受けることへの猜疑心などが見受けられた。換言すれば、シャーマン群は、日常生活にカミが深く浸透し、ロールシャッハ・テストに対してイメージの想起だけでな

く何らかの意味を見出そうとする態度がみられた。具体的には、シャーマン群の反応の多くが幻想的・映像的であったこと、さらに、カードの全体或部分への反応以外にカードを超えた向こう側を語っているように感じられる反応が多かった。なお、こうした行動面の特異性については全て「(13)不適切な行動」にカテゴライズされたため、特異性や特徴を明確にするためにはさらなるカテゴリーの再編成が必要と思われた。

個別の反応に関しては、各事例の反応にばらつきが大きいとさらなる調査数が必要であろうが、シャーマン群の6事例中4事例に共通して見受けられた思考言語カテゴリーは、「(2)抽象的表現・カードの印象」「(3)防衛的な態度」、想像力の豊かさの反映として「(5)作話反応」、反応産出・決定の際の精神的エネルギーの持続困難を示す「(6)連想の衰弱および不安定な意識状態」、カードを透かしたり、立てたりするような「(13)不適切な言動」であった。これらのスコアが高いことは、知的レベルでは想像力の貧困、行動レベルでは反応しようとする欲求はあるものの過度の防衛として見受けられたが、一方でこれらの反応は現実との距離の取り方の問題や検査やテスターに対する何らかの感情を表出しているとも考えられた。(図2、表3参照)

なお、楠元(1974)によると、統合失調症者には(9)(11)(12)が多いとされたが、今回の調査ではシャーマン群・非シャーマン群に差はみられなかった。

しかし、各 case のばらつきが大きいと、今後はより多くの調査データを確保し検討することが必要であると考えられる。また、土川ら(2011)は、ロールシャッハを通してみられる思考過程の歪曲は自我機能の障害とみるべきであるとしているが、そこで散見される風変わりな独自反応や特殊化、了解不能な言語表現、非論理的な思考などシャーマン特有なものを再考する必要があると考えている。

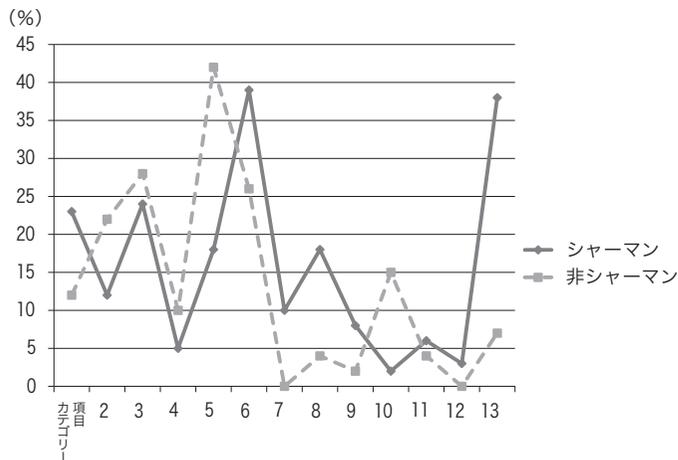


図2 思考言語カテゴリー反応結果

表3 思考言語カテゴリー反応比較

	シャーマン	非シャーマン	カイ2乗値	
(1)反応産出に伴う困難・萎縮的態度	23	12	0.30551	
(2)抽象的表現・カードの印象	12	22	0.01004	*
(3)防衛的な態度	24	28	0.10931	
(4)強迫・些事拘泥の反応	5	10	0.06241	†
(5)作話的反応	18	42	0.00002	*
(6)連想の衰弱・不安定な意識状態	39	26	0.64159	
(7)反応の反復	10	0	0.00617	*
(8)恣意的思考	18	4	0.01935	*
(9)自閉的思考	8	2	0.14413	
(10)個人的体験の引用と自我境界の障害	2	15	0.00016	*
(11)言語表現の特異性	6	4	0.85513	
(12)連想弛緩	3	0	0.13361	
(13)不適切な言動	38	7	0.00021	*

* P<0.05
† P<0.10

VIII. むすびにかえて

日本列島は、ほぼ温帯湿潤気候または冷帯湿潤気候に属するが、沖縄県は亜熱帯海洋性気候に属し、黒潮の関係で冬期でも年平均気温は22.4度（那覇市内を基準）、降雪・降霜はほとんどなく、年間降水量は2036mmである。比較的気温変化が小さく一年を通して穏やかに過ごすことが出来、そのことが人々をおおらかで人情に厚く、のんびりとした自由な性格に作り上げている。

また、地理的には、沖縄県は南北約400km、東西約1000km、面積40万 km²の大海原に点在する70余の島々で構成されており、一方の陸地は2千 km²余で、約200倍の面積の水に囲まれていることになる。海によって隔てられた島嶼であるが故に、独自の言語、音楽、舞踊、習俗などが生まれ、守られて来た。近年では、航海・航空の発達で人・モノ・情報の流れが安易かつ双方向になってきているものの、島から外に出ることがままならない一方で他人が島に入ったりすることも難しく、外敵から島（部落）を守り易かったとも考えられる。つまり、その分結団力が強まり、問題が生じ困窮した場合には、前述の性格上他人を巻き込まず、地域（シマ）の中の医者でありカウンセラーであり弁護士でもあるユタ（シャーマン）との関係だけで解決する傾向があったように思われる。

そもそも沖縄の歴史は、近代だけを捉えてみても波瀾万丈なものである。明治政府による中央集権化の一貫として、1871年（明治4年）廃藩置県が断行され、翌72年に琉球藩が設置、1879年（明治12年）藩が廃止され代わりに全国の他地域と同様県が置かれ沖縄県として日本の領土に属することとなった。そのことにより琉球は鹿児島＝薩摩藩の管理を離れて、明治政府の直轄に移ることになり外圧によってもたらされた琉球処分は完了した。1945年沖縄戦の終結に伴い沖縄は再び日本から切り離されて米国の統治下に置かれるようになり、1972年5月沖縄の施政権が日本に返還され県民は日本国憲法の適用が受けられるようになり、沖縄県民は法的に日本人になったのである。しかし、いつも心中は穏やかでなく、米軍基地問題をはじめとする内地（日本）との不平等感が根強く、支配と抑圧を受けて忍従を強いられることで、いつの世もアイデンティティを揺るがされる時代が続いている。また、経済状況も拍車をかけている。平成26年の都道府県別平均年収調査によると、沖縄県は47都道府県中最下位だった。

因みに、20代の平均年収は285万円であり、46位の宮崎県（312万円）よりも30万円ほど少ない。一方、出生率と離婚率および非正規雇用率は全国1位であり、消費者物価指数（平成27年10月分）は104.5で、全国平均（103.9）よりも高い。つまり、賃金の割に物価が高く、一人親が働きながら子供を育てているという家庭が多いと考えられる。現代でさえこのような状態であるので過去においてはさらに生活し難い時代が続いたと考えられる。経済的不安定が心理的不安や身体の不調を誘い、その結果としてユタを買う・ユタになるという図式も納得できるものである。

こうした不安定で安心できない歴史的背景や経済状況による心の揺らぎがシャーマンを希求する基盤となっている。しかし、かつてユタが一手に引き受けてきたと思われる呪術や儀式などは、特に復帰以降様々な近代医療（病院、医師、薬など）、内地式葬儀の在り方（寺院、葬儀屋など）、相談機関や電子機器（公的機関、医療連携体制、インターネットなど）が入り込み、急激に変化して来ている。そうした中においてもいつの時代でも人々が心の安寧を求めるのは変わりなく、そのことが肅々とユタがその形を何らかに変化させながらも生き続け、沖縄の精神文化を支えることに繋がっているように感じる。

注

- 1) 大橋英寿（2000）は、精神医学の観点では、カミダーリイは「身体的不定愁訴」「祈祷精神病の錯乱昏迷状態」「人格変換状態」に相当するが、医学用語に翻訳できない沖縄独特の病気像である「文化結合症候群」とし、その治療法として「信仰治療」を「成巫過程」にみてとることができるとしている。カミダーリイ現象について、精神科医である高江洲（1983）は、精神医学用語に置き換えるのではなく「カミダーリイ症候群」として把握するのが望ましいとしている。
- 2) DSM-IV-TR は2013年に DSM-V として改定・出版された。IVからVへの改定の眼目として、大日方は「類

似した各種疾患についての見方を症状の違いよりも程度（レベル）の違いという観点から連続体（スペクトラム）として捉えるという試みが前面に押し出されてきたことであろう。（中略）個人の精神状態について環境との関わり方つまり対処能力の面から見直すことにより、人間の精神について硬直した見方ではなく、より柔軟な見方をすることにより、各種の精神疾患についてより実際的で有効性のある対応をしていくことの重要性を強く打ち出したものと考えられる。」としている。なお、この改定により、「宗教または神の問題」は、「臨床的関与の対象となることのある他の状態」の中のサブカテゴリーである「他の心理社会的、個人的、環境的状况に関連する問題」に属する下位カテゴリー「宗教的または霊的問題」へ変更された。

- 3) 1996年発行時点での名称を記載した。なお、公益社団法人日本精神神経学会によると、1937年からschizophreniaの訳語として「精神分裂病」という病名で使われてきたが、2002年8月「統合失調症」に変更となった。変更の経緯・理由としては、1993年に全国精神障害者家族連合会から「精神分裂病は精神が分裂する病気と誤解され人格否定的である」として病名変更要望が日本精神神経学会にあり、同学会小委員会、理事会等で検討が重ねられ、「精神分裂病」という病名に刻まれた誤解と偏見、それによる不当な差別を解消する必要性を理由として変更決定となる。（公益社団法人日本精神神経学会 見解・提言・声明 呼称変更の経緯 https://www.jspn.or.jp/modules/advocacy/index.php?content_id=58（更新日時：2015年1月28日）より一部抜粋）

文献

- (1) 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ（2012）複線径路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例 立命館人間科学研究, 25, 95-107
- (2) Eliade, M. (1958) *Birth and Rebirth* Harper & Brothers, New York（堀一郎訳 1998 生と再生 東京大学出版会）
- (3) Eliade, M. (1968) *Le Chamanisme*（堀一郎訳 2004 シャーマニズム（上・下）筑摩書房）
- (4) 比嘉康雄（2017）日本人の魂の原郷 沖縄久高島 集英社
- (5) 平井芽阿里（2020）ユタの境界を生きる人々 アカデミア叢書
- (6) 外間守善（2016）沖縄の歴史と文化 中央公論新社
- (7) 星野和実（1995）老人のロールシャッハ・テスト ロールシャッハ研究 1995-10 37巻 93-108
- (8) 池上良正（1992）民俗宗教と救い 淡交社
- (9) 石川雅健（2020）沖縄の精神文化と超越 人間性心理学研究第37巻2号 日本人間性心理学会
- (10) 石川雅健（2021）現代社会におけるシャーマニズム 愛知学院大学 教養部紀要 第68巻第1, 2, 3 合併号
- (11) 伊藤雅之（2009）現代社会とスピリチュアリティ 溪水社
- (12) 河合隼雄（2000）心理療法とイニシエーション 岩波書店
- (13) 又吉正治（1993）琉球文化の精神分析①～③ 月刊沖縄社
- (14) 松井裕子、堀毛一也、大橋英寿（1982）沖縄のシャーマン〈ユタ〉のパーソナリティ特性 —11事例のロールシャッハ反応— ロールシャッハ研究 24 85-100
- (15) 森田美弥子、高橋靖恵、高橋昇、杉村和美、中原睦美（2010）実践ロールシャッハ法 —思考・言語カテゴリーの臨床的適用— ナカニシヤ出版
- (16) 森田美弥子、加藤淑子、高橋昇、高橋靖恵、坪井裕子、長瀬治之、島垣智恵、山田勝（2018）ロール

シャッハ法解説 名古屋大学式技法 金子書房

- (17) 名古屋ロールシャッハ研究会編 (2018) ロールシャッハ法解説 名古屋大学式技法 金子書房
- (18) 岡部隆志・斎藤英喜・津田博幸・武田比呂男 (2001) シャーマニズムの文化学 森話社
- (19) 岡本太郎 (2016) 沖縄文化論 中央公論新社
- (20) 沖縄観光コンベンションビューロー編 (2000) 美ら島 沖縄観光コンベンションビューロー
- (21) 大橋英寿 (1998) 沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究 弘文堂
- (22) 大橋英寿 (2000) 沖縄のシャーマンにみる癒し 心身医学 40-6 423-428
- (23) 大日方重利 リレーエッセイ「改訂された DSM 第5版 (DSM-5) について思うこと」 <https://www.ssu.ac.jp/relay-essay/20160201/> 静岡産業大学HP (閲覧日令和1年11月17日)
- (24) 桜井徳太郎 (1988) 桜井徳太郎著作集6 日本シャーマニズムの研究 下 一構造と機能一 吉川弘文館
- (25) Samara, T (2004) *Shaman's Wisdom* (奥野節子訳 2014 シャーマンの叡智 ナチュラルスピリット)
- (26) 佐々木宏幹 (1980) シャーマニズム～憑霊と文化 中公新書
- (27) 佐々木宏幹 (2001) 聖と呪力の人類学 講談社
- (28) Stepanoff, C・Zarcone, T (2011) *Chamanism* (遠藤ゆかり訳・中沢新一監修 2014 シャーマニズム 創元社)
- (29) 須藤義人 (2011) 久高オデッセイ 晃洋書房
- (30) 高江洲義英 (1983) 南島からみる精神医学と風土 (現代思想11-11 青土社 66-82)
- (31) 高橋三郎・大野裕監訳 (2014) DSM-5精神疾患の分類と診断の手引き 医学書院
- (32) 谷口貢 (2000) シャーマン (巫者) と成巫過程 (桜井徳太郎編 シャーマニズムとその周辺 第一書房 65-79)
- (33) 友寄隆静 (1981) なぜユタを信じるか 月間沖縄社
- (34) 土川隆史、加藤淑子、長瀬治之、森田美弥子 (2011) 増補改訂5版発行 ロールシャッハ法解説 一名古屋大学技法一
- (35) 湧上元雄・大城秀子 (2010) 沖縄の聖地 一拝所と御願一 むぎ社
- (36) Vitebsky, P (1995) *The shaman: voyages of the soul from the Arctic to the Amazon* (シャーマンの世界 ビアーズ・ヴィテブスキー 中沢新一監修 岩坂彰訳 1996 創元社)

等価選択肢数を用いた教養共通テスト分析の一例

上 原 宏 行

Abstract

情報理論で扱う情報エントロピーの応用例である等価選択肢数を用いて、教養共通テストの分析を行った。その結果、等価選択肢数－正答率図に等価選択肢数最大曲線と等価選択肢数最小曲線を加えることで、誤答の選択割合などが一目で確認できることが分かった。また、テスト全体の問題の難易度分布も容易に確認できる。これらの考え方を示すとともに、この方法の有用性について議論する。問題数が集まれば、問題再利用時にグループ毎に問題を選ぶことで、出題を最適化することができる。

キーワード：等価選択肢数、多肢選択問題、情報エントロピー

1. はじめに

愛知学院大学では、2023年度に文部科学大臣が認定する「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」に申請^[1]するため、2022年度から当プログラムが動き出した。教養部が担当する学部に対しては、教養教育科目である「情報科学Ⅰ・Ⅱ」と「教養セミナーⅢ・Ⅳ」¹⁾の4科目でプログラム内容をカバーするように担当範囲が振り分けられ、筆者も情報科学Ⅰ・Ⅱを担当している。

プログラムでカバーする内容やレベルなどの確認を行う手段としてBS放送の放送大学を活用することがある。そこには、当プログラムに該当する「数理・データサイエンス・AIリテラシー講座」や「データサイエンスの技術」など^[2]の関連講義が放送されており、その中に「情報理論とデジタル表現」という講義があった。その第6回の講義で情報理論におけるエン

トロピーの応用例として等価選択肢数^[3]が紹介されており、興味深い指標であると感じた。

通常、データのばらつき具合を表現する指標として、分散や標準偏差を使用することがある。これらは気温（°C）のような間隔尺度や質量のような比例尺度に対して用いることは可能であるが、高校生、大学生、社会人のような名義尺度や成績評価であるAA、A、B、Cのような順序尺度に対して用いることはできない。しかし、等価選択肢数は名義尺度や順序尺度において、データのばらつき具合を出現頻度に関する指標として求めることができる^[3]。

そこで、愛知学院大学キャリアセンターと教養部が共同で実施している教養共通テスト²⁾を題材として、その適用から得られる情報について調べた。このような多肢選択問題のテストがどの程度適切なレベル・問題難易度なのか、正答率だけ見ても分かりにくいので、この判断材料としての有用性についても検討した。

先行研究として、等価選択肢数をU-L指数（上位下位項目弁別指数）など他の指数と比較した論文^[4]はあるが、ここで行おうとする多肢選択問題の問題分析に関する論文は筆者が調べた限りでは見いだせていない。この論文では、多肢選択問題が抱えている問題点などについて議論するのではなく、等価選択肢数を用いることで、多肢選択問題の問題難易度や選択肢の特徴など、どのような情報が得られるのかを議論する。

2. 等価選択肢数

まず、この論文で中心的な役割を担う等価選択肢数について説明する。エントロピーは統計学において定義されているが、情報理論では式(1)により情報エントロピー H を定義している。ここでは、 n 個の選択肢から1つ解答を選ぶ場合、 i 番目の選択肢が選ばれる確率を p_i としている。

$$H = - \sum_{i=1}^n p_i \log_2 p_i \quad (1)$$

この情報エントロピー H を用いて、等価選択肢数 O を 2^H と定義している。なお、確率については

$$\sum_{i=1}^n p_i = 1$$

を満たす。

この関数 H は2択の場合、

$$H = -p_1 \log_2 p_1 - (1 - p_1) \log_2 (1 - p_1)$$

と表され、 $p_1=1/2$ のとき、 $H=1$ となり、 $p_1=0$ と1のとき、 $H=0$ となる³⁾。このように不確実性が最大の $p_1=1/2$ で最大となっており、統計力学におけるエントロピーの特徴と同じである。

次に、等価選択枝数のイメージを明らかにするため、いくつかの計算例を示す。

(ア) 選択枝数は4で、1つの選択枝だけが選ばれる ($p_1=1, p_2=p_3=p_4=0$) 場合³⁾

$$H = -1 \times \log_2 1 = 0$$

$$O = 2^0 = 1$$

等価選択枝数は1となる。

(イ) 選択枝数は4で、2つの選択枝が等確率で選ばれ、他の2つの選択枝は選択されない ($p_1=p_2=1/2, p_3=p_4=0$) 場合³⁾

$$H = -\frac{1}{2} \log_2 \frac{1}{2} - \frac{1}{2} \log_2 \frac{1}{2} = 1$$

$$O = 2^1 = 2$$

等価選択枝数は2となる。

(ウ) 選択枝数は4で、3つの選択枝が等確率で選ばれ、残り1つの選択枝は選択されない ($p_1=p_2=p_3=1/3, p_4=0$) 場合³⁾

$$H = -\frac{1}{3} \log_2 \frac{1}{3} - \frac{1}{3} \log_2 \frac{1}{3} - \frac{1}{3} \log_2 \frac{1}{3} = \log_2 3$$

$$O = 2^{\log_2 3} = 3$$

等価選択枝数は3となる。

(エ) 選択枝数は4で、全ての選択枝が等確率で選択される ($p_1=p_2=p_3=p_4=1/4$) 場合

$$H = -\frac{1}{4} \log_2 \frac{1}{4} - \frac{1}{4} \log_2 \frac{1}{4} - \frac{1}{4} \log_2 \frac{1}{4} - \frac{1}{4} \log_2 \frac{1}{4} = 2$$

$$O = 2^2 = 4$$

等価選択枝数は4となる。

(オ) 選択枝数は4で、各選択枝の選ばれる確率が $p_1=1/2, p_2=p_3=1/4, p_4=0$ の場合³⁾

$$H = -\frac{1}{2} \log_2 \frac{1}{2} - \frac{1}{4} \log_2 \frac{1}{4} - \frac{1}{4} \log_2 \frac{1}{4} = \frac{3}{2}$$

$$O = 2^{\frac{3}{2}} = 2\sqrt{2} \approx 2.83$$

等価選択枝数は約2.83となる。

このように、(ア)～(エ) では、等価選択枝数は実際に選択された選択枝数と一致している。

また、実際に選択された選択肢数が等しい場合でも、選択確率に偏りのある（オ）は選択確率の等しい（ウ）より等価選択肢数は小さくなる。このように、「選択肢の等価な数」を表していることが分かる。ただし、この指標は、正答率とは直接の関係がないことに注意しなければならない。

3. 正答率に対して取り得る等価選択肢数の範囲

容易に分かるのは等価選択肢数が1の場合と4の場合である。等価選択肢数が1の場合、単一の選択肢が選ばれたことを意味している。そして、選択された選択肢が正答の場合と誤答の場合の2通りがあり、それぞれの正答率は1と0である。一方、等価選択肢数が4の場合、（エ）の場合に対応しており、どの選択肢が正答でも正答率は0.25である。しかし、これ以外の場合、複雑になるので次の例を考える。

（カ） 選択肢数は4で、そのうち3つの選択肢は等確率で選ばれ、残り1つの選択肢もわずかな確率で選ばれる（ $p_1=p_2=p_3=0.33$ 、 $p_4=0.01$ ）場合、

$$H = -0.33 \log_2 0.33 - 0.33 \log_2 0.33 - 0.33 \log_2 0.33 - 0.01 \log_2 0.01 \approx 1.65$$

となり、等価選択肢数は $O \approx 2^{1.65} \approx 3.14$ となる。この場合、 p_4 が正答であるという稀なケースもありうる。

放送大学「情報理論とデジタル表現」では、選択肢の数は n 個の場合で説明されており、等価選択肢数が1の場合と、 n の場合の正答率を直線で結んだ線の間が、データが取り得る範囲の目安としている。したがって、それをもとにデータが存在する目安となる領域は等価選択肢数1と4での正答率を直線で結んだ2直線間の領域（図1）とすると、大体のイメージができる。ただし、（カ）の場合で、 p_4 が正答である場合には、この領域から外れることに注意が必要である。

等価選択肢数は「何個の選択肢の中から解答が選ばれたのか」を示す指標であるので、問題難易度の目安となる指標と考えることもできる。図1の（i）付近にデータがある場合、問題は容易であることを意味している。等価選択肢数が1に近く、正答率が1に近い場合、ほとんどの解答が正答であることを意味している。一方、図1の（ii）付近にデータがある場合、問題が難しすぎることを意味している。問題が分からず、4つの選択肢から、「サイコロを振るよう」にして解答した場合に例えることができる。（i）と（ii）の間の領域では、等価選択肢数は2～3であり、選択肢がある程度機能しており、正答率も適度に高い領域となるので、問題の難易度は中程度とみなせる。解答に迷うと正答率が下がり、等価選択肢数は増えることが考えられる。多数の問題からなるテストでは、等価選択肢数－正答率図にデータをプロットす

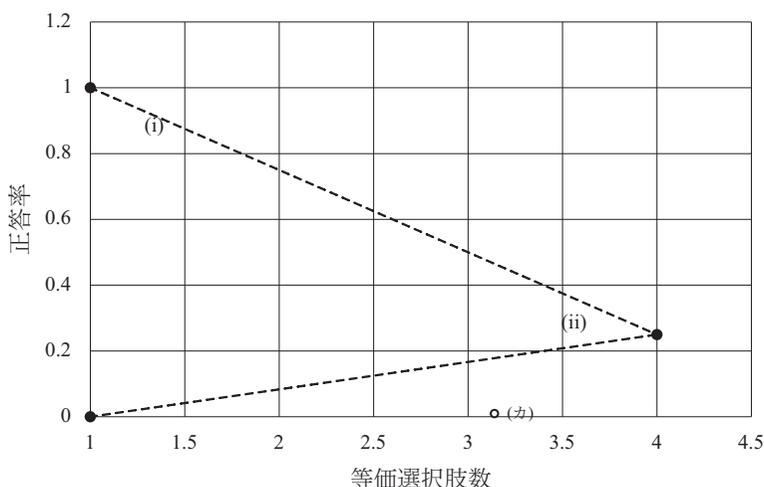


図1 等価選択肢数に対して取り得る正答率の範囲の目安

ることで、テストの難易度を概観することができる。

図1では目安を示したが、ここではより詳細な情報を読み取るため、選択肢数が4の場合について取り得る等価選択肢数の上限について検討する。数学的な証明は行わないが、この条件を満たすのは(ア)～(オ)からも推測できるように、正答以外の選択肢が等確率で選ばれる場合である。正答率 p_1 に対する等価選択肢数の最大値を $O_{max}(p_1)$ とすると、

$$O_{max}(p_1) = 2^{-[p_1 \log_2 p_1 + (1-p_1) \log_2 (\frac{1-p_1}{3})]} \quad (2)$$

と表せる。この式で表現される曲線を等価選択肢数最大曲線と呼ぶことにする。また、等価選択肢数が最小になるのは、2つの選択肢のみが選ばれる場合であり、正答率 p_1 に対するその値を $O_{min}(p_1)$ とすると、

$$O_{min}(p_1) = 2^{-[p_1 \log_2 p_1 + (1-p_1) \log_2 (1-p_1)]} \quad (3)$$

と表せる。この式で表現される曲線を等価選択肢数最小曲線と呼ぶことにする。これら式(2)、(3)を図2に示す。図2には上で求めた(ア)～(カ)の結果も合わせて示している。これらの結果は曲線上または2つの曲線間の領域に存在していることが確認できる。

実際のデータが等価選択肢数最大曲線に近い場合、誤答はほぼ等確率に選ばれており、データが等価選択肢数最小曲線に近い場合、誤答として確率の高い選択肢が存在することを意味している。

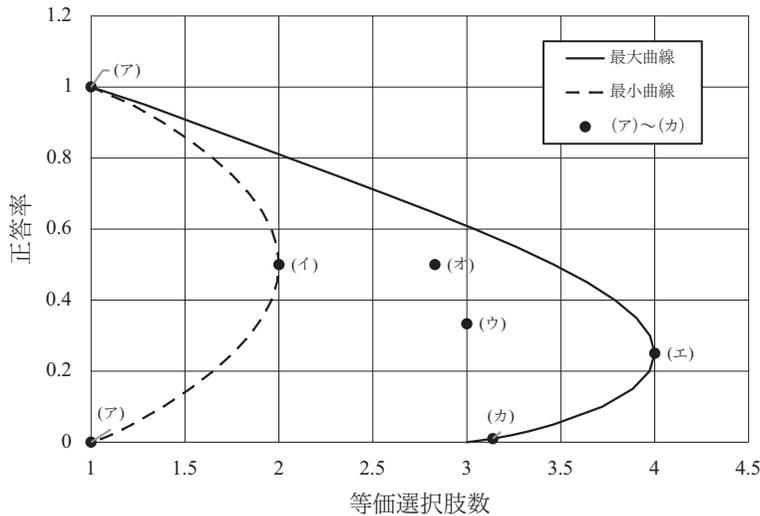


図2 選択肢数が4の場合の等価選択肢数最大曲線と等価選択肢数最小曲線。
 図中の●は上で求めた(ア)～(カ)の結果を示す。

4. 第1回教養共通テスト

愛知学院大学キャリアセンターと教養部が共同で実施している教養共通テストは、このテストをきっかけに教養教育科目の履修、就職活動に何か必要かを考える機会としての活用〔資料1〕が期待されており、教養教育科目と数的推理の分野から出題される4択問題である。この論文では令和3年に実施された第1回の結果を使用した。表1の問題番号はオリジナルの番号を踏襲しており、選択確率に直し、情報エントロピー H と等価選択肢数 O を求めた。これらをもとに等価選択肢数-正答率図に等価選択肢数最大曲線と等価選択肢数最小曲線を合わせて図3に示す。各問題ともに最も高い選択確率の選択肢が正答であり、多くは等価選択肢数最大曲線の内側近傍に分布していることが分かる。また、等価選択肢数は1.37から3.75と広範囲に広がっていることから、様々なレベルの問題が混在していることが分かる。ただし、ヒストグラム(図4)で等価選択肢数の出現頻度を調べると、等価選択肢数が3.5以上の問題が多く存在していることも分かる。この点に問題があるかどうかは出題意図により解釈が異なるので、この点について言及はしないことにする。等価選択肢数最大曲線に内接している問題は誤答がほぼ等確率になっているケースであり、この最大曲線から最小曲線側に大きく左側に移動している問題は、比較的高い選択確率の誤答が存在していることを意味している。例えば、問題10では正答率0.492に対して、誤答の中に選択確率0.447が存在している。残り2つの選択確率

表1 教養共通テストの問題ごとの正答率、選択確率と等価選択肢数

問題番号	正答率	選択確率				H	等価選択肢数
		a	b	c	d		
3	0.842	0.136	0.007	0.015	0.842	0.741	1.67
4	0.452	0.198	0.452	0.221	0.129	1.843	3.59
5	0.339	0.337	0.203	0.339	0.122	1.895	3.72
6	0.685	0.018	0.685	0.275	0.022	1.114	2.16
7	0.369	0.334	0.188	0.369	0.108	1.860	3.63
8	0.435	0.218	0.132	0.435	0.215	1.864	3.64
9	0.659	0.659	0.196	0.053	0.092	1.398	2.64
10	0.492	0.042	0.019	0.492	0.447	1.325	2.50
11	0.404	0.178	0.243	0.175	0.404	1.907	3.75
12	0.778	0.055	0.071	0.096	0.778	1.108	2.16
13	0.888	0.888	0.078	0.025	0.009	0.634	1.55
14	0.538	0.193	0.095	0.173	0.538	1.701	3.25
15	0.932	0.012	0.025	0.031	0.932	0.459	1.37
16	0.699	0.089	0.699	0.179	0.034	1.280	2.43
17	0.565	0.040	0.086	0.310	0.565	1.478	2.79
18	0.523	0.079	0.523	0.241	0.158	1.694	3.23
19	0.677	0.677	0.141	0.120	0.063	1.397	2.63

が小さいことから、(イ)に近い状態になっている。また、問題12では正答率0.778に対して、誤答の選択確率は0.055、0.071、0.096と均等に近い分布をしているので、等価選択肢数最大曲線に内接している。このように等価選択肢数最大曲線と等価選択肢数最小曲線を基準にすると、誤答の特徴についても一目で理解することができる。また、図示することで全体のバランスも一目で分かるなど利用価値は高い。当然ではあるが、正答率を全て加えることで、期待値である正答数平均が10.3問であることも分かる。つまり、問題再利用時にこの期待値を基準にすれば、前回の受験者との得点差について議論することも可能である。

資料1 教養部長から学生に対して送信された案内

学生の皆さんへ

教養部長 佐々木真

教養共通テストの案内

教養部とキャリアセンターが共同して教養共通テストを作成しました。学生の皆さんが愛知学院で何を学んでほしいか、なぜ学ぶのかを記しています。本テストの結果は各科目の成績評価とは関係ありませんが、これが皆さんの学びのきっかけとなってさまざまな教養科目を履修したり、就職活動に際して、何が必要になるかを考える機会としてもらえればと思います。このテストは春と秋に問題を変えて実施します。皆さんの学びの軌跡として活用してください。

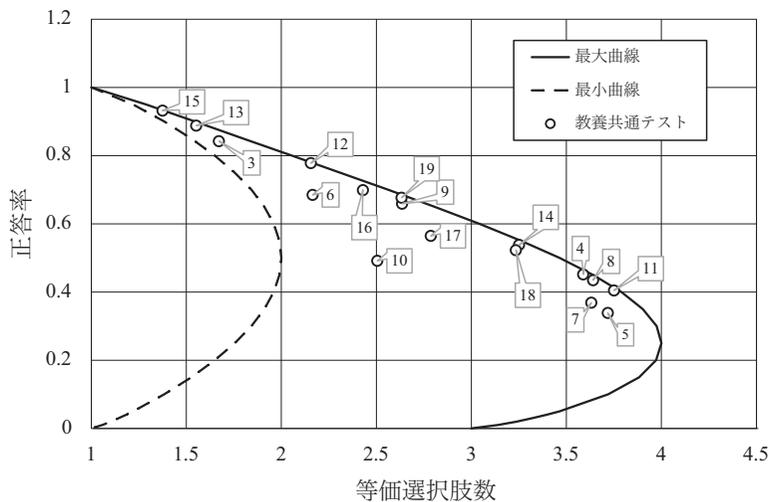


図3 第1回教養共通テストの結果。番号は問題番号である。

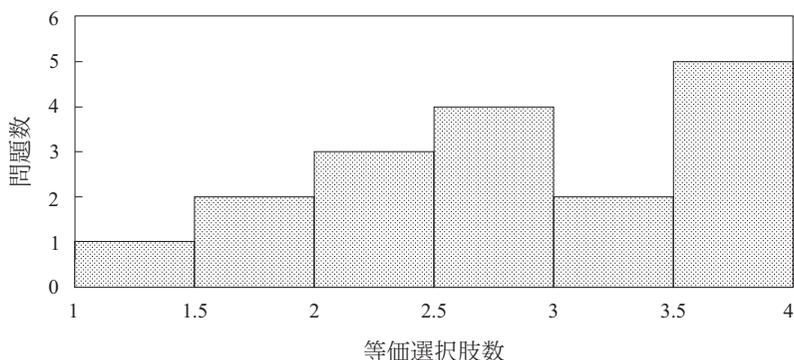


図4 第1回教養共通テストにおける等価選択肢数と問題数の関係

5. まとめ

等価選択肢数—正答率図に等価選択肢数最大曲線と等価選択肢数最小曲線を合わせることで、問題の難易度以外にも誤答の特徴などが容易に理解できることが分かった。最大曲線近傍にあるデータの場合、誤答はいずれもほぼ等確率で選ばれている。それに対して、最小曲線側に大きく左側に移動しているデータは誤答の中に比較的高い確率の選択肢が含まれていることを示している。このように正答率以外に誤答に関する情報も含んでいるので、テスト全体の特徴を理解するのに有用である。また、問題を再利用する場合には、分野・難易度ごとにグループ分けができれば、その中から問題を選ぶことで目的に応じた出題も可能となる。

注

- 1) 2023年度からは「教養セミナーⅢ・Ⅳ」を「情報科学Ⅲ・Ⅳ」に変更して開講する予定である。これにより「情報科学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」で当プログラムの内容をカバーする。
- 2) データの2次利用に関しては実施主体である愛知学院大学キャリアセンター部長と教養部長の許可を得ている。
- 3) 対数関数の定義域には0は含まれていないので正確には不定となるが、極限をとって $H=0$ としている。

参考文献

- [1] 愛知学院大学. “データサイエンス教育プログラム”. https://www.agu.ac.jp/life/data_science/ (参照2023-01-16).
- [2] 放送大学. “放送大学 データサイエンス”. <https://mds.ouj.ac.jp/> (参照2023-01-16).
- [3] 加藤浩, 浅井紀久夫. 放送大学教材「情報理論とデジタル表現」. 放送大学教育振興会, 2019.
- [4] 齋藤昇. 数学教育における創造性に関する態度尺度の開発. 全国数学教育学会誌 数学教育学研究, 1999, vol. 5, pp. 35-46.

ロバート・ペン・ウォーレンの想像力の展開と その現代における意義

香ノ木 隆 臣

キーワード：ロバート・ペン・ウォーレン、創作の内的過程、記憶

序論

詩・小説・批評のいずれの分野でも卓越した業績を残したロバート・ペン・ウォーレンは、1905年に生まれ1989年に生涯を閉じた。もちろん人は生まれる年を選ぶことはできないが、彼は20世紀全体の歩みと共に人生を過ごしたことになる。最晩年のインタビューで、15歳の頃には自分の生まれた年と20世紀とが同期していることを意識したと、彼は述懐している(Watkins 399)。ウォーレンといえば作品と時代を切断して解釈するニュークリティックの旗手とみなされることが多いかもしれないが、実際には、彼は鋭敏に時代の動きを反映する作品や評論を次々に世に問い続けたのである。

ウォーレンの作品と、彼が生きた時代とのかかわりは深い。20世紀前半の英米文学に多大なる影響を与えた詩人・批評家の T. S. エリオットによる『荒地』に深く感化されたウォーレンは、最初に詩作を手掛け、そこから小説と批評(ニュークリティシズム)に活躍の場を広げていくが、本質的には詩人であり続けたといえる。その根底にあるのは、過去の現在性を個人の記憶と社会の動向とを並行して詩に象徴的に描き出す特異な想像力であり、過去をないがしろにする未来志向のアメリカ社会に対し、常に反省を迫り続けた危機意識がその源泉であった。本稿では、彼の生涯と多岐にわたる活動を概観した後、代表的な作品群の主題を個人と社会の連関を記憶と想起を軸にして探り、ウォーレンの作品が現代に投げかける意義を考えることとしたい。

ウォーレンは多作であることで知られ、長篇小説は全部で11作、詩集は14作、それ以外にも短篇小説、評論、歴史論などを世に問うている。代表作としてわが国で知られているのは、政治的混乱をめぐる出来事を経験し内的成長を遂げる語り手を主人公とする長篇ビルドゥングスロマン『すべて王の臣』(1946)で、刊行直後から世評は高く、ピューリツァー賞を受賞した。詩集では、『約束』(1957)と『現在と過去』(1978)の2作でそれぞれピューリツァー賞を受けている。現在まで、小説と詩の双方でこの賞に輝いたのは、ウォーレンだけである。また、批評の分野では、作品の外在的要素を排し、作品自体の自律的構造に注目したニュークリティシズムの方法論を広め、学生がある一定のレベルにまで文学作品を客観的に分析する能力を養う教育的方法論を確立し、第二次世界大戦後の文学教育で全米を席卷した。それは我が国の高等教育の場だけでなく、初等・中等教育の国語の教育の現場にも、少なからぬ影響を与えた。その教科書『詩の理解』(1938)『小説の理解』(1943)を、盟友クリアンス・ブルックスと共に著した。さらに、最晩年の1986年には最初の合衆国桂冠詩人に任ぜられ、ウォーレンはまさにアメリカを代表する文人となった。

第1章 自己確立への苦闘、周縁性、「歴史的感覚」

その輝かしい経歴にもかかわらず、現在では、批評界でのウォーレンの評判は決して高いとは言えないというのが、正直なところだろう。ニュークリティシズム(彼自身はその名称を嫌っていたのだが)を推し進めて確立したとされるキャンノンの文学史は、典型的に白人男性作家を中心とするものであり、現実にはきわめて政治的な作用をもってマイノリティを排除する結果を招いた、といった趣旨の批判がその典型である。とはいえ、彼の人生と作品の構成を検討すれば、その本質は、意外にも、周縁的な存在への関心にあったということがわかる。『詩の理解』と『小説の理解』は、改版するたびに扱う作品を増やし、マイナーな作家も積極的に分析の対象としている。また、1950年代半ば以降に公民権運動に火がついた時期には、『分離』(1956)や『黒人を弁護するのは誰か』(1965)といったルポルタージュや評論を刊行する。この準備のための取材で、ウォーレンは、アフリカ系アメリカ人の知識人たちに対するインタビューを数多く行っている¹⁾。アフリカ系アメリカ人の多く暮らす地域へ出かけて人々の苦境を描き出しながら、白人中心的価値観で動くアメリカ社会に反省を迫る態度を彼は明らかにした。アメリカ社会の周縁的な存在への並々ならぬ関心を、彼は決して隠そうとはしなかったのである。

周縁性を強調する態度がはぐくまれたのは、ウォーレンが生まれ育った地理的環境条件が大きく影響したのではないかと思われる。彼が生まれたケンタッキー州ガスリーは、現在ではごく

小さな町であるが、当時は地方における鉄道の拠点となる、さまざまな人々が行き交うそれなりに存在感のある町であった。この町は、テネシー州との州境に位置し、南北戦争当時は北部と南部との境界にあたる場でもあった点が、彼の自己形成に大きな意味をもつ。ケンタッキー州では、家族や親戚が、北軍と南軍に分かれて従軍しお互いに戦うという、現代の政治的思想的状況にも通底する悲劇的分断を経験したと伝えられている。

ウォーレンは周縁的な環境に育ち、かつては文学を志望し挫折した父親との精神的葛藤にも悩みつつ、自己確立に苦しんだ。また、幼かったころの不幸な事故で片目を失明したことによる強い精神的衝撃も、彼の内面に大きな影響を及ぼした。兄弟で外の庭で遊んでいた際、弟が投げた石が偶然にウォーレンの右目にあたった。その治療結果は芳しからざるものであり、右目を摘出せざるを得なくなる。彼は後に海軍将校を目指すのだが、この視力の問題でその夢をあきらめて、16歳でヴァンダービルト大学に入学することになる。当初は理系の学部で在籍していたが、英作文のクラスを担当した教師ジョン・クロウ・ランサムにその文才を見出され、文学専攻にコースを変更したのである。外因による挫折は大なり小なり誰にでもあることなのだろうが、彼の場合、自らの意思で進路を選ぶことができなかつたという一種の負い目ゆえに、自分の将来に不安が常につきまとったようである。彼は大学入学後しばらくして自殺未遂を起こしているからである。

1921年、ヴァンダービルト大学に入学してまもなく、ウォーレンはクロロフォルムを浸した布で自分の顔を覆い意識不明になっているところを友人らに見えされる。「自分は詩人になれない」という内容の書置きがあったと伝わる。重要なのは、多くのインタビューに応じてきた彼が、この当時の事情や初期の詩に関しては、ほとんど何も語ってこなかつた事実である。あえてコメントを避けるその態度は、この時期が実は自己形成にとってたいへんに重大な意味をもっていたことを、逆説的に物語っているといえよう。彼の初期の詩作は、死をめぐる思考が展開する、暗鬱な内容のもので占められており、彼の内面がいかに死に傾斜していたかを容易にうかがい知ることができる。

しかし、その後しばらく、詩をほとんど書かない時期を過ぎ、南部農本主義に加わるなどの社会性の強い作風へ彼は変貌したのである。ここで注意しておくべきは、この時期のウォーレンの苦悩が、心理学者アンリ・エランペルジェが「創造の病」(creative illness)と定義した、創作という世界に生きる者が重大な精神的危機を経て作風を大きく変える一連の経緯に、見事に合致する点である。この「創造の病」とは、1. 集中して知的な苦勞の後に出現することが多く、2. 本人はその作業に心身ともに没入し、3. この「病」が終わるのは単なる回復ではなく、精神的な回心を遂げ、4. その後、終生にわたり変革した人格が継続する、という特徴をもつ (Ellenberger 25-41)。

こうした一種の死の体験を経て、エリオットが“Tradition and the Individual Talent”「伝統と個人の才能」で指摘した、過去の作品と現在のそれとを同時に知覚する能力「歴史的感覚」(“the historical sense”)を、ウォーレンは身につけたのではないだろうか。

Tradition is a matter of much wider significance. It cannot be inherited, and if you want it you must obtain it by great labour. It involves, in the first place, the historical sense, which we may call nearly indispensable to any one who would continue to be a poet beyond his twenty-fifth year; and the historical sense involves a perception, not only of the pastness of the past, but of its presence; the historical sense compels a man to write not merely with his own generation in his bones, but with a feeling that the whole of the literature of Europe from Homer and within it the whole of the literature of his own country has a simultaneous existence and composes a simultaneous order.

(Eliot 14) (下線部は引用者による。)

初期の詩で詩をめぐる苦悩を吐露する創作の過程で、死を核とする他者との連関に、彼は思いを致したと考えられる。社会的評論を手掛けるようになっただけでなく、死が出発点となって周囲の人間関係の意味に気づくという趣旨の小説や詩を、この後のウォーレンは数多く発表していくからである。この、死を媒介とする他者との連関というヴィジョンについては、精神医学者渡辺哲夫が『死者の発見』で述べた、「死者の発見とは、それゆえ、死者を“顔”として見出すこと、そして、その“顔”が無量無数の死者たちの群れの“顔”にほかならないことを思い出すことなのである。(中略) 発見された死者たちは、“顔”として、言葉として、われわれを主体、歴史的に構造化された存在にしてくれる」(渡辺 239-40)という、個人の死を具体的に認識することで生ける者の相互連関が達成されるという内容の発言にその意義がうかがわれるし、精神病理学者木村敏は、「私を個別的自己ならしめている私の歴史性は、私が死すべき存在、死へ向かっての存在であることと深くかかわっている。(中略) 死が私の存在の歴史性と関わっているのは、なによりもまず、終末の定めのないところには歴史が成立しえないからだといってよいだろう」と自己の死がもつ意味を語る(木村 113)。さらに付言すれば、死とは自己にとっては未来の出来事である一方で、“join the majority”という表現がある通り、過去には無数の死者が存在する。ウォーレンも、自己の死の一步手前の体験を経て、過去の死者たちとの精神的交感を果たし歴史的感覚を認識したと推測できるのである。

現在において過去を同時に知覚する能力である歴史的感覚が胚胎する下地になっていたのは、南北戦争に従軍した祖父から聞いた戦場の物語が、幼いウォーレンには不思議な現実性を持ち、過去と現在が不可分に存在する感覚にとらわれた心的現実である。祖父から南北戦争の

話を聞いていた彼は、過去と現実の境界があいまいに感じられるようになった。

A different feeling toward the present event and the past event somehow overlap in what was like a double-exposure photograph almost.... “The sense of the past and the sense of present are somehow intertwined constantly. This was a cultural factor in the south; the telling of tales was part of it.”

(Watkins 124)

膨大な死者を出した南北戦争も、ウォーレンにとっては、死を契機とする自己認識を深める下地という、実に重要な意味をもっていたのである。

第2章 南部農本主義への参加と訣別

南部農本主義とは、南北戦争後にアメリカを席卷した商工業イデオロギーという北部中心の価値観を真っ向から否定し、本来のアメリカの建国の理念である大地に密着した農業中心の価値観を復活させようという、いわば過去を現在に取り戻そうとする、敗者からの勝負を度外視した絶望的戦闘というべき思想運動である。ヴァンダービルト大学でウォーレンが師事したジョン・クロウ・ランサムは、この南部農本主義運動の中心人物に他ならない。彼らの宣言集『わが立場』(1930)に、ウォーレンは「黒いちごの茂み」という論文を寄稿する。

The relation of the two will not immediately escape friction and difference, but there is no reason to despair of their fate. The chief problem for all alike is the restoration of society at large to a balance and security which the industrial régime is far from promising to achieve.

(*I'll Take My Stand* 264)

ここで彼はアフリカ系アメリカ人の立場を擁護する主張をするのだが、そこで人種の隔離という手段を提示した故に厳しい批判を受ける。ここで重要なのは、弱冠25歳の彼が人種差別というデリケートな問題に正面から取り組むという、同時代のアメリカが抱える闇に正面から対峙しようとする態度を明らかにしていたことである。

当時のウォーレンの現実社会へのいささか過剰にも思われるコミットメントの背後には、20世紀初頭における、ヨーロッパとアメリカにおける思想史の大転換が、本人が意識していたか否かにかかわらず、大きな影響を与えつつ存在していたことは、否定しがたい事実だろう。アメリカにおいては、資本主義の急速な進行に一役買った適者生存のソーシャル・ダーウィニズ

ムに代表される直線的進歩史観への対抗としての南部農本主義という、過去の農業国家アメリカの理想化があった半面、西欧思想史のより広い文脈で考えれば、ニーチェの思想に集約される、事物の本質性や価値あるものへの拘泥が徹底的に否定されるという、形而上的思考の無力化があった。これらの互いに衝突する思想的状況の挟間という陥穽にウォーレンは落ち込んでいたと言っても過言ではない。彼は、文人としての経歴の開始点から、現在と過去、アメリカとヨーロッパという二重の思想的分裂のさなかにあって、両義的な周縁の場に立たされていた運命にあったのである。

死を媒介とした過去と現在の併存、自己と他者の一体感というリアリティ感覚を表現したのが、長篇小説の代表作『すべて王の臣』における、蜘蛛の巣の比喻で語られる存在の連鎖の感覚である。1946年に刊行の、ウォーレンの代表的長篇小説は、デマゴグの政治家ヒューイ・ロングをモデルとした、支配者の独善とそれを許した民衆への冷静な批判を、その人物の秘書を務めた青年ジャック・バーデンを語り手に起用して、彼の内的成長と重ね合わせて展開している複雑な形式のビルドゥングスromanである。いくつかの暴力的な死の現場に立ち会う事態を経て、語り手はひとつの回心に達する。なお、冒頭のキャス・マスターンとは、語り手が研究の対象にしていた南北戦争中の架空の人物である。

Cass Mastern lived for a few years and in that time he learned that the world is all of one piece. He learned that the world is like an enormous spider web and if you touch it, however lightly, at any point, the vibration ripples to the remotest perimeter and the drowsy spider feels the tingle and is drowsy no more but springs out to fling the gossamer coils about you who have touched the web and then inject the black, numbing poison under your hide. It does not matter whether or not you meant to brush the web of things. Your happy foot or your gay wing may have brushed it ever so lightly, but what happens always happens and there is the spider, bearded black and with his great faceted eyes glittering like mirrors in the sun, or like God's eye, and fangs dripping.

(*All the King's Men* 200)

個人が社会全体に及ぼす影響という責任の存在が、ここで端的に述べられている。そして、ヘンリー・ジェイムズが「小説の技術」で、作家の感性を蜘蛛の巣の比喻で述べていたように、ウォーレンにとっての世界の認識とは、クロノロジカルに連なった出来事の線状の連続体ではなく、面上に出来事が配置されて、意識という蜘蛛がその上を自由に行き来することができるという、自身のなかで絶えず組み替えられる動的な性質をもつものであることも表されている。この毒蜘蛛は死を明示する存在であり、古典的比喻でいえば相容れない領域を結びつける

トリックスターにほかならない。この文脈では、ばらばらに存在する複数の他者が自身にとって意味ある連関をもっていたことを、死という強制的分断で存在の連鎖が生じる逆説を感得した、成熟した秩序の感覚を物語る。この流れで、この作品の最後で、“...and soon now we shall go out of the house and go into the convulsion of the world, out of history into history and the awful responsibility of Time.” (*All the King's Men* 464) と、「世界の激動」が同格で「歴史の積み重ねが大文字の時間となる」という説明と並置され、混乱に満ちた現実のなかで生きる我々には、歴史という過去を繰り返し問い直す「畏怖すべき責任」があるというウォーレンの認識が示されているのである。

このように、死者の現前性や内面化が現実の認識に不可欠であるという、彼の文人としてのキャリアを通しての執拗なまでの主張は、現在を過去と直接に切り結び合わせようとする手法に、容易にうかがい知ることができる。アメリカ社会が過去を忘却する思考形態をもつことを、いささか強迫気味に彼が強く憂えるのは、個々人の記憶こそが、民主的な社会にむかうための決定的要素と考えるようになった危機意識が彼を突き動かしていたからである。

ウォーレンが社会的関心を強く示すようになった理由のひとつには、1930年代から40年代の世界がファシズムを経験したこと、続く第二次世界大戦後に旧ソ連に代表される共産主義イデオロギーの膨張という、民主主義を支える個人の尊厳を根本から脅かす世界情勢があっただろう。彼は「パクス・アメリカーナ」と称された繁栄の1950年代から早くも多様性への関心を見せ、それを具体的な行動に移すようになる。この頃に書いたフォークナー論で述べた、「支配的な世界の外側の流れにある人々」を彼は作品に取り上げるようになるのである。

When it is said, as it is sometimes said, that Faulkner is “backward-looking,” the answer lies, I think, in the notion expressed above. The “truth” is neither of the past nor of the future. Or rather, it is of both. The constant ethical center of Faulkner’s work is to be found in the glorification of human effort and human endurance, which are not confined to any one time. It is true that Faulkner’s work contains a savage attack on modernity, but the values he admires are found in our time. The point is that they are found most often in people who are outside the stream of the dominant world, the “loud world,” as it is called in *The Sound and the Fury*.

(*New and Selected Essays*, 204)

周縁に存在するものが中心的人物を圧倒する逆転の構図を最も端的にうかがうことができるのが、第二次世界大戦後の覇権争いのさなかの1953年に発表された、アメリカの建国の父祖のひとりで第3代大統領であったトマス・ジェファソンを正面から批判の対象とする長篇物語詩

『龍の兄弟』(1953; 1979)である。この長篇詩は、否定的事実を記憶化するための想起のプロセスを詩化した稀有な事例と考えてよい。ジェファソンの甥が犯した殺人事件という史実を題材とし、ここで彼が訴えかけるのは、事実の羅列としての歴史ではなく、個々の読者の感性により内的に再構築される、情動の作用の結果として内面化される主体的な歴史認識の重要性にほかならない。言い換えれば、個人の責任を重んじる共和主義の伝統に立つ現代アメリカの民主主義を支える、個々人の内面における能動的な記憶のプロセスを、彼は詩化したのである。

第3章 アメリカ社会における個人の運命に対する関心

ウォーレンはアメリカ社会の楽観主義や例外主義を鋭く批判し続けたが、その対象が社会全般という広いものから、次第に個人というレベルでその意識の変容を繰り返し説くようになった。この理由は、先に述べたように、デモクラティックな社会を構成する個人の相互批判こそが、そうした社会を支えると確信していたからに他ならない。それを反映するのが、『龍の兄弟』におけるジェファソンと語り手 R.P.W. やその他の人物との激しい言葉の応酬である。

ジェファソニアン・デモクラシーを成立させる基盤は、ルイジアナ購入に象徴されるように、土地所有者による自給自足の農民であり、商取引とは無縁であることが条件であった。しかし、その土地とは現実にはネイティヴ・アメリカンから不当に収奪した、帝国主義的イデオロギーの産物というべきものであり、この矛盾を根底から批判するウォーレンの姿勢が明らかになる。ネイティヴ・アメリカンの招魂の儀式であるゴースト・ダンスが、この詩におけるジェファソンを回心させたことに集約されるように、大統領ジェファソンに代表される白人側の歴史観の一面性を際立たせ、被害者側の存在とその歴史が並置される。多様な歴史解釈への手がかりとして、個人の想起が基盤となる役割を果たす点をこの長篇詩は強調している。

南北戦争から100年が過ぎた1960年代の混乱を経た後、1970年代半ば、今度は建国200年という節目を、ウォーレンは相当程度、意識していたに違いない。この時期に先に述べた『龍の兄弟』の改訂を進めて、1979年に新版を世に問うている。結末の部分で、作者の明らかなペルソナ R.P.W. が語り手として、視点が個人に絞られて述べられるという変更がなされる。1953年の初版から四半世紀以上後で全面的に改稿を施した1979年の新版で、ウォーレンは視点を“*We*”から“*I*”へと絞り込んで、個人という存在を際立たせようとする。

We have yearned in the heart for some identification
 With the glory of the human effort. We have devised
 Evil in the heart, and pondered the nature of virtue.

We have stumbled into the act of justice, and caught,
Only from the tail of the eye, the flicker
Of joy, like a wing-flash in thicket.

And so I stood on the headland and stared at the river
In the last light of December's, and the day's, declension.
I thought of the many dead and the places where they lay.
I looked at the shrunken ruin, and the trees leafless.
The winter makes things small. All things draw in.

It is strange how that shift of scale may excite the heart. (*Brother to Dragons* 131)

『龍の兄弟』の改訂を進めていたのとはほぼ同じ時期、つまり建国200年前後に、ウォーレンは次々に長篇小説、詩集、評論を世に送り出す。そのなかで、ハーヴァード大学での講演を基にした評論『民主主義と詩』（1975）の主張も見逃すことはできない。

As both Rilke and Yeats have put it, the making of a work represents a plunge into the “abyss of the self.” And once the work is made, the reader, insofar as he gives himself to it, takes such a plunge, too—the plunge to explore the possibilities of his own “abyss.” In the complexity of this whole situation we find, then, echo upon echo, or mirror facing mirror. But in the end, as Henri Bergson once said, the work returns us—the readers, the spectators—“into our own presence.” It wakes us up to our own life. (*Democracy and Poetry* 71)

ウォーレンは、民主主義の根幹を構成する個人としての責任の自覚を問うている。彼が押し進めたニュークリティシズムがイデオロギー的に統一された主義主張をせず、あくまでも作品の解釈の多様性のみ読者の自覚をうながすのにとどまったのは、個人を重視して民主的価値観の維持と発展を期す戦略的な姿勢であったといえよう。そして、エリオットの「歴史的感覚」の基礎となったバルクソンの「純粹持続」への言及があるように、「個人の深淵」つまり過去は現在と不可分であるという、変わらぬ信念がここに披歴されている。

1977年の講演「過去の効用」は、民主主義の社会を支える個人が過去を絶えず再解釈する責任をもつと主張する。

And yet, in a way, it[the past] “gives” us nothing. We must *earn* what we get there. The past must be studied, worked at—in short, created. For the past, like the present, is fluid. History, the articulated past—all kinds, even our personal histories—is forever being rethought, refelt, rewritten, not merely as rigor or luck turns up new facts but as new patterns emerge, as new understandings develop, and as we experience new needs and new questions. There is no absolute, positive past available to us, no matter how rigorously we strive to determine it—as strive we must. Inevitably, the past, so far as we know it, is an inference, a creation, and this, without being paradoxical, can be said to be its chief value for us. In creating the image of the past, we create ourselves, and without the task of creating the past we might be said scarcely exist. Without it, we sink to the level of a protoplasmic swarm. (New and Selected Essays 50–51)

『すべて王の臣』の蜘蛛の巣の比喩による認識作用が、30年以上が過ぎて、過去を再解釈し意味を見出す個人の責任として敷衍されているのである。

1978年の詩集『現在と過去』は、彼の文学作品群のなかで後期の始まりを告げる詩集として位置づけられ、彼は老境にある自分自身に正面から向き合う姿勢を明確に打ち出している。ウォーレンに三度目のピューリツァー賞をもたらしたこの詩集は、過去の出来事を回想する自伝性の濃い詩から成る“Nostalgic”と、抽象的な思索が現在において展開する“Speculative”のふたつのセクションに分かれている。まず始めのセクションで現在から過去の出来事の意義が再解釈され、その認識が次のセクションで“Time”をめぐる思考として展開する。この詩集で彼は、記憶という認識作用に関する常識的理解を問い直し、現在という時点に存在している立場から遠い過去の出来事を回想して、自伝的記憶が現在の自分にいかなる意味をもっているかを考えている。Now and Then というタイトルから連想されるのは、現在と過去とを併置して表現する思考であろう。ここでのウォーレンは、過去を単純に重層化するのではなく、過去をひとつの平面と規定して、現在と過去とは並び立つものであるという認識を打ち出す。この詩集で扱われている過去の記憶は、現在の自分のもつ意識のすぐ直下に位置すると強調される。師と仰いだランサム の1974年の死、そして長年の盟友アレン・テイトは病気に苦しみ、この詩集の翌年1979年に亡くなる。1989年に生涯を閉じることになるとはいえ、終わりに近づく自分を十二分に意識した詩人は、最終的には個人の消滅という死、つまり自分が過去のなかへと向かう時間の流れのなかにある事実を受け容れながらも、個体としての死を乗り越えて、超越的かつ抽象的な「時間」という、普遍性を模索する方向へ創作活動のエネルギーを注いでいる。

ウォーレンは現実の場に「時間」を求めても得られることはないと言断する。この詩集のな

かに収められた「アイデンティティと祈りへの議論」で、語り手は帰るつもりがなかった場を、再び訪れる。現在の場には、過去の同じ場は決して存在しない。それを語り手は、現実という具体的な場には「時間」を求めることの不可能性を、「時間」をウロボロスの的に提示して浮かび上がらせる。

For that old *I* is not I any more, though
A ghost somewhat different from that of
The truly perished companion, for the *I* here now
Is not dead, only what
I have now turned into. This
Is the joke you must live with. Have you ever
Seen serpentine Time at the instant it swallowed its tail? (*Collected Poems* 373)

ウォーレンが重視しているのは、実際の死者ではなく、概念としての死者を意識して、自分の生が死者に支えられていると実感し、ふたたび日常へと回帰していく円環状の意識作用である。この認識の構図は、これらの作品が書かれていたのと並行して改訂が進められていた『龍の兄弟』のテーマでもある。また、主体性の回復という論点は、この当時の批評の一大潮流、ディコンストラクションが唱えた、自律した主体性への懐疑に対する暗黙の批判であるかもしれない。

過去への探究は、1985年刊行の最後の詩集『高さところと広がるところ』においてその頂点に達する。抽象性を追求するテーマを内包する「妄想？ 違う！」では、自身が到達した高揚した感情を直接に言葉にしている。この作品は、詩集全体に展開した詩人の思考を総括するきわめて重要な作品である。

In atmosphere almost too heavenly
Pure for nourishment of earthbound
Bone, or bone-borne flesh, I stood,
At last past sweat and swink, at crag-edge. Felt
My head swell like the sky that knew
No distance, and knew no sensation but blueness.

In that divine osmosis I stood

And felt each discrete and distinct stroke

Of the heart as it downward fled—

(*Collected Poems* 581)

この詩集の他の作品で、詩人は自身の頭蓋骨について繰り返し言及していたが、最終的に、この頭蓋骨はすべてを包摂する大空と形容される。そして、「翼のように両手を広げ」上空から見渡すと、自分を支えるすべての力を知るに至る。ここで、個人の死が他者との連関に直結しているという認識が示されているのである。こうした抽象的な思考を見せながらも、“as it downward fled” とあるように、意識は常に、天上ではなく下界、私たちが現実には生きている世界に向いている点も見逃してはならない。

最後のセクションIXは、「山の夜明けの神話」という詩のみで成り立っている。こうした特異な設定、そして詩集の最後に配される作品であるゆえ、この詩にはいっそうの意味深い内容が与えられていると考えられる。この謎めいた内容の詩は、最後に蜘蛛の巣のイメージが現れる。

How soon will the spiderweb, dew-dappled, gleam

In Pompeian glory! Think of a girl-shape, birch-white sapling, rising now

From ankle-deep brook-stones head back-flung, eyes closed in first beam,

While hair—long, water-roped, past curve, coign, sway that no geometries know—

Spreads end-thin, to define fruit-swell of haunches, tingle of hand-hold.

The sun blazes over the peak. That will be the old tale told.

(*Collected Poems* 584)

「蜘蛛の巣がポンペイのような栄光に光る」のを、詩人が待ち焦がれるのはなぜだろうか。蜘蛛の巣とは、『すべて王の臣』でそうであったように、存在の有機的連鎖の象徴であり、さらには詩人の鋭敏な感受性の比喩でもある。ここの未来形が、その後に続くポンペイの火山の爆発の犠牲者を石膏で型をとって現われた姿と並置され、生命力に満ちた若い女性が復活するという幻想が、過去から現在へのよみがえり、そして未来という流れをひとつのものとしている。最後に、「これは語られる昔話となるだろう」という、一般化を志向する詩人の自信を示唆する宣言で閉じられる。こうして、死者に集約される過去を絶え間なく想起することで未来がつくられるというウォーレンの信念が詩化され、この詩集のみならず、かれの創作活動の総体を総括する荘嚴なヴィジョンが立ち現れている。ヴェスヴィオ火山の突然の噴火により封印された日常生活が後世になって発掘されたことで、その当時の市井の人々が現在によみがえったひとつの啓示的体験は、死を媒介とした過去の記憶の復活を終生にわたって模索した詩人

ウォーレンにとって、自身の集大成である最後の詩集の最後を飾るにふさわしいモチーフとなった。ポンペイとは、死者の招魂であるばかりでなく、平凡な日常生活が後世に集合的歴史の記憶を物語るようになるという、個人的記憶が普遍性をもつに至るプロセスの具体化である。過去を忘却から救出するだけでなく、将来へと継続させる想起という積極的な意識の認識作用を詩化するうえで、ポンペイという舞台は不可欠だったのである。

結論

ウォーレンが死という概念を執拗に追究したのは、死によって生が区切られ過去が生じるという、単純であるが見落とせぬ事実ゆえである。個々の人間は死によって強制的にこの世界と分断されることによって、現在から過去へと移行し死者として歴史性を獲得する。いわば死によって固有性を与えられた、他者との代替が不可能な自己という独立した物語となる。後世の人間が死者の人生を積極的に読み解き、その物語が社会的に共有されることで、個人の過去は現在の社会に復活するに至る。それゆえに、過去すなわち死者とは、私たちが有機的に結び合わせる鍵にほかならないと、彼は確信していたに違いない。ニュークリティシズムの指導者としての彼の信念も、過去の作品という死者からの贈与物を、純粹に作品そのものとして現在において再解釈し、個人とその集合体である社会の成長に寄与せしめるものであったといえよう。つまり、文学を解釈する行為とは、死者の復活を意味するのである。

ウォーレンの文学作品の総体は、死により裏打ちされた想起という認識作用により編み上げられた、ひとつの大いなる蜘蛛の巣である。ウォーレンにとって、記憶を想起することにより出現する内的世界は蜘蛛の巣のごとく一つの面をなし、過去の出来事は平面上にちりばめられた要素となっている。T. S. エリオットが「伝統と個人の才能」で語った、過去を過去のものとして片づけるのではなく、現在のなかに過去が同時に（言い換えれば平面的に）存在していることを認識できる感性である「歴史的感覚」の概念は、ウォーレンの文人としての遍歴に終生にわたり影響を与え続けたといってよい。この認識が、晩年の詩集における、自伝的過去と公的記憶との併置により、個人の記憶が普遍性を備えているというヴィジョンへと展開する。最晩年のエッセイ「詩はひとつの自伝」（1985）では、自身の詩集の内容は自伝に他ならないと彼は宣言するに至るほどである。

最近の研究のトレンドのひとつに、記憶をめぐる、哲学・歴史学・心理学・社会科学を横断する、分野を超えた方法論が模索されている。そのなかで共通する認識は、過去をめぐる想起は政治的なものであり、伝統とは所与のものではなく絶えず作り直されるという大前提である。現在、過去の解釈の多様性がこれまでになく重要になってきており、ごく最近の、互いに

排他的なイデオロギー対立に起因する多くの国際問題が、その動きを加速させている。少し前ならば冷戦やヴェトナム戦争が容易に思い出されるが、それらは現在、どこまで検証されているだろうか。国際紛争や人種差別問題や銃規制問題といった重大な論点が繰り返しニュースに取り上げられる事実も、過去に学びそれを未来に生かすことが実に難しい証拠だといえるだろう。ソーシャルメディアの普及でかえって個人や小集団が排他的になるアイロニックな現象も、新たな伝統や共通の価値観の創造の困難さを物語る好例となるかもしれない。こうした状況にあって、『龍の兄弟』の序文の結びの一節、“Historical sense and poetic sense should not, in the end, be contradictory, for if poetry is the little myth we make, history is the big myth we live, and in our living, constantly remake.” (BD, xiii)において、“live”が“remake”と言い換えられていることからわかるように、彼にとって生きるとは、歴史を常に読み直すことであつたのである。ウォーレンの作品群を貫く中心主題である、多様性と和解が共存する過去を絶えず再解釈する重要性は、民主主義の危機のみならず、世界規模で社会の秩序構築が改めて模索され始めたいま現在も、まったく失われていないというべきだろう。

謝辞

本稿は、2022年11月25日開催の愛知学院大学語学研究所第37回研究発表会における口頭発表原稿を基に、加筆修正を行ったものである。また、本稿の一部は、2021年4月24日に開催された日本アメリカ文学会中部支部第37回大会でのシンポジウム「アメリカ文学における民主主義へのまなざし」で発表した内容と重複するが、論じる文脈は異なっている。

註

- 1) これらの取材記録は、ヴァンダービルト大学図書館アーカイブのウェブサイトで、インタビュー音声とそのトランスクリプトが一般に公開されている。

参考文献

- Blotner, Joseph. *Robert Penn Warren: A Biography*. Random, 1997.
- Burt, John, ed. *The Collected Poems of Robert Penn Warren*. Louisiana State UP, 1998.
- Corrigan, Lesa Carnes Corrigan. *Poems of Pure Imagination: Robert Penn Warren and the Romantic Tradition*. Louisiana State UP, 1999.
- Ellenberger, Henri. “La Notion de Maladie Créatrice.” *Dialogue: Canadian Philosophical Review*, vol. 1, 1964, pp. 25–41.
- Eliot, T. S. “Tradition and the Individual Talent” in *Selected Essays*. Faber and Faber, 1932.
- Justus, James H. *The Achievement of Robert Penn Warren*. Louisiana State UP, 1981.
- Koppelman, Robert S. *Robert Penn Warren’s Modernist Spirituality*. U of Missouri P. 1995.

- Runyon, Randolph Paul. *The Braided Dream: Robert Penn Warren's Late Poetry*. UP of Kentucky, 1990.
- Strandberg, Victor H. *The Poetic Vision of Robert Penn Warren*. UP of Kentucky, 1977.
- Twelve Southerners, *I'll Take My Stand: The South and the Agrarian Tradition*. 1931; Louisiana State UP, 1977.
- Warren, Robert Penn. *Brother to Dragons*. 1953; Louisiana State UP, 1979.
- . *New and Selected Essays*. Random, 1989.
- . *Democracy and Poetry*. Harvard UP, 1975.
- . “The Use of the Past” in *New and Selected Essays*.
- Watkins, Floyd T. *Then & Now: The Personal Past in the Poetry of Robert Penn Warren*. UP of Kentucky, 1982.
- Watkins, Floyd T. and John T. Hiers, eds. *Robert Penn Warren Talking*. U of Georgia P, 1990.

- アライダ・アスマン著、安川晴基訳、『想起の空間 文化的記憶の形態と変遷』（水声社、2007年）
- 木村敏、『関係としての自己』（みすず書房、2005年）
- 中井久夫、『徴候・記憶・外傷』（みすず書房、2004年）
- 野家啓一、『物語の哲学』（岩波現代文庫、2005年）
- ポール・リクール著、久米博訳、『記憶・歴史・忘却』上下巻（新曜社、2004年）
- 渡辺哲夫、『死と狂気』（ちくま学芸文庫、2002年）
- 『思想』（「ヘイドン・ホワイトの問題と歴史学」）、（第1036号、岩波書店、2010年8月）

古典教育の題材としての日本近世文学の可能性

—— ICT 活用教育プログラム開発の研究報告より ——

中 村 綾

キーワード：ICT 活用、古典教育、国文学研究資料館歴史的典籍 NW 事業、木曾路双六、
典拠の利用

はじめに

近年、ICT 教育がさかんに提唱されている¹⁾。また、昨今では古典の授業が敬遠されがちであることから、国文学の研究方面では古典に親しむ授業題材の開発に取り組むプログラムが多数立ち上げられている。これらの現状を受け、筆者は人間文化研究機構国文学研究資料館の歴史的典籍 NW 事業共同研究の一環である「古典籍画像に基づく ICT 活用教育プログラムの開発」に携わってきた。

国文学研究資料館では「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」（略称：歴史的典籍 NW 事業）²⁾（本稿では以下「NW 事業」とする）と称される学術フロンティア促進事業が展開されており、国文学研究資料館が国内外の様々な大学等と連携して「日本語の歴史的典籍」に関する国際共同研究ネットワークを構築している。この共同研究も NW 事業の一つとして立ち上げられたものである。

NW 事業では「日本語の歴史的典籍」約三十万点を画像データ化し、既存の書誌情報データベースと統合させた「新日本古典籍総合データベース」という研究基盤が作成されており³⁾、このデータベースを資源に様々な共同研究が進められているのであるが、筆者が関わっている「古典籍画像に基づく ICT 活用教育プログラムの開発」も上記データベースに掲載されている作品を ICT 教育のための教材として活用することを目指したものである。詳しくは第一節で

ことわざ絵合わせは資料2に提示したように鋏形蕙斎『諺画苑』に基づいてカルタ形式の教材を作成していくものである。

資料2



これらは児童・生徒がネット上で自主的に遊びながら古典に親しむ手段として、また、小学校・中学校の授業教材としても活用できる手段として開発を目指しているところにこの共同研究の特徴がある。

本節では、まず主に取り組んできた「木曾路双六」について具体的に説明する。

木曾路双六は資料1のように京都から江戸までの木曾路(中山道)六十七次の宿場町を辿っていく双六シートを作成し、web上で双六遊びができるようにしたものである。カーソルを合わせると自分が滞在する宿場の名前が出るようになっている。また、途中には木曾路から派生した日光街道、善光寺道も用意されており、双六としての楽しみも味わえるよう、ルートが多数設定されている。そして、比較的大きな宿場町を大コマ、中コマとし、そこには古典を題材としたクイズを用意した。例えば軽井沢では「軽井沢にほど近い、『伊勢物語』にも登場する火山の名前は?」という問題が仕掛けられており、解答できれば「三マス進む」、できなければ「一回休み」となっている。

そして、この軽井沢の問題には資料3、4のような解答、解説を作成した。

資料3

正解：浅間山 あさまやま



浅間山の図（文化九年（1812）刊『日本名山図会』より）
国文学研究資料館蔵、DOI:10.20730/200017002
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200017002/viewer/10>

『伊勢物語』第八段挿絵
（万治二年（1659）刊本より 原本所蔵：関西大学図書館）
DOI:10.20730/100271179
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100271179/viewer/13>

信濃国（現長野県北佐久郡）と上野国（現群馬県吾妻郡）との国境にある活火山。古くは『日本書紀』（養老四年（七二〇）成立）に噴火の記録が見える。『伊勢物語』（平安時代前期成立）第八段に「信濃なる浅間の嶽に立つ煙をちこち人の見やはとがめぬ」とあるなど、歌枕として和歌にしばしば詠まれた。活火山であり、噴煙を上げることから、燃え上がる恋心に例えられることが多い。



現在の浅間山

『伊勢物語』
第八段本文を読む

すごろくに戻る

資料4

『伊勢物語』第八段本文（『新編日本古典文学全集』12巻より）

むかし、男ありけり。京やすみ愛⁽⁵⁾かりけむ、あづまの方^(かた)にゆきて、すみ所もとむとて、友とする人、ひとりふたりしてゆきけり。信濃^(しなの)の国、浅間^(あさま)の嶽^(たけ)に煙^(けぶり)の立つを見て、

信濃^(しなの)なるあさまのたけに立つけぶりをちこち人の見やはとがめぬ

【現代語訳】昔、男がいた。京に住みづらかったのだからか、東国の方に行って、住む場所をさがそうとして、友人、一、二人とともにいった。途中、信濃の国の、浅間の山に噴煙が立ちのぼるのを見て、歌を詠む。

信濃の国にある浅間山に立ちのぼる煙、遠近^(とちん)の人々はこれを見て怪しまないだろうか。さぞ奇異なものだと訝^(いぶ)ることだろう

【参考：浅間山を詠んだ和歌】

いつとてかわが恋やまむちはやぶる浅間の嶽の煙絶ゆとも（『拾遺和歌集』恋一、読人不知）
あさましや浅間の山に立つ煙絶えぬ思ひを知る人もなし（『拾遺愚草』、藤原定家）

すごろくに戻る

資料3には正解が浅間山である旨と日本近世期の名所図会（ガイドブック）の一つである『日本名山図会』（文化9（1812）年刊）及び近世期の『伊勢物語』の刊本（万治2（1659）年）の挿絵から該当箇所である第八段の挿絵を掲載した。資料4には『伊勢物語』第八段の本文、現代語訳、『伊勢物語』以外に浅間山を詠んだ和歌を掲載した。資料3の解説を読んだ後、『伊勢物語』の原文を味わいたい際には、『伊勢物語』第八段を読む、すごろく遊びに戻りたい際には「すごろくに戻る」を選んでクリックできるようになっている。

また、本共同研究は国文学研究資料館のNW事業の一つであることは「はじめに」で述べ

だが、資料3に掲載した『日本名山図会』と万治年間刊の『伊勢物語』はどちらも国文学研究資料館のNW事業である「新日本古典籍総合データベース」によって所蔵元の刊本のデジタル画像を取り込んだものであり、URLにその記載がある。

このようなクイズは他に川中島宿に「川中島で戦った戦国大名は誰と誰?」、垂井宿に「垂井にある古典作品の舞台ともなった滝の名前は?」といった問題が仕掛けられている。

また、クイズとは別に資料5のように大コマの宿場町についての副読本を作成した。

資料5

〈トリビア情報〉三井寺の鐘は近江八景の一つ「三井の晩鐘」で有名だが、この鐘は依藤太秀郷が百足退治をして龍神から授かった鐘である。また、その後、弁慶が山門との争いで比叡山に引き摺上げたことでも有名。

大津

おおつ




【参考文献】
秋里鹿島「木曾路名所図会（文化十年刊）」
上田秋成「雨月物語」一「夢応の鯉魚」

【概要・歴史的情報】かつて天智天皇が飛鳥岡本京から大津に都を移した。大津京はわずか五年で別の地に遷都されたが、以来、古い歴史を有する。大津には多くの寺社仏閣が現存しており、平安時代には多くの貴族たちが遊山と信仰を兼ねて参詣に訪れた。江戸時代には町人が高い経済力を誇り、町人文化が開花した。大津祭にその名残が見られる。

【文学史的情報】平安時代には石山寺や唐崎神社には多くの貴族が参詣に訪れた。また、江戸時代には大きな宿場街として栄えた。紫式部が石山寺で源氏物語を起草したことは有名である。また、志賀浦、長等山、唐崎、打出浜、瀬田橋など多くの地が歌枕として和歌に詠われる。江戸時代、上田秋成「雨月物語」の一編「夢応の鯉魚」では、魚になって琵琶湖を遊泳していた僧侶が後に「まず長等の山おろし、立ちあがる浪に身をのせて、志賀の大湾の汀に遊べば、かち人の姿のすそぬらすゆきかひに驚されて、比良の高山影うつる、深き水底」に潜くとすれど、かくれ堅田の漁火によるぞうつつき。（中略）；矢橋の渡りする人の水なれ棹をのがれては、瀬田の橋守にいそたひか追はれぬ。日あたたかなれば浮かび、風あらしときは千尋の底に遊ぶ。」と語る。この琵琶湖の名所を巡る道行文は後世、三島由紀夫に絶賛にされた。

この副読本は、高校で習う古典教材を主に取り挙げて作成してあるが、学校教員が解説を施す際に使用することや生涯教育の題材に用いることも視野にいられているため、解説文は比較的大人向けの内容となっている。そして、かつて古典の名勝地であったその地が今どきになっているのか、という観光とのつながりは、古典教育には大変重要と思われるため、「トリ

ピア情報」として現在の観光情報などを盛り込んだ。資料5の天津宿のトリビア情報には依藤太秀郷の百足退治や弁景の引き摺り鐘など数々の伝承を持つ三井寺の鐘についての案内が掲載されている。

他にも木曾路には木曾義仲ゆかりの宿場町が数多くあるが、例えば宮ノ越宿の副読本では、「文学史的情報」として現地にある義仲館や巴淵を、トリビア情報として「道の駅日義木曾駒高原」を紹介している。

このように、本共同研究で考案した木曾路双六は、児童・生徒が双六を楽しみつつ古典教材に親しむこと、教員が古典教育を広める際に教材を取り扱い易くすることの両方を目指したもののなのである。

二 日本近世文学作品の古典教材としての可能性

ここまで本共同研究で考案中の木曾路双六の内容と目的について述べてきた。その中で説明したクイズの解説ページや副読本には『木曾路名所図会』、『日本名山図会』、万治年間刊の『伊勢物語』刊本など多くの日本近世期の刊本の挿絵が使用されていた。それ以外にも資料5の天津宿の副読本には近世期の読み物である『雨月物語』が紹介されている。

このように近世期の資料を多く採用するには複数の理由がある。まず京都から江戸までの木曾路(中山道)六十七次が街道として整備されたのは江戸時代になってからであること、江戸期には町人が高い経済力を持ち、一般庶民の紀行も盛んになったため、様々な名所図会が紀行案内ものとして出版されたことが理由として挙げられる。そのため、この木曾路双六は近世期の観光案内書である『木曾路名所図会』(秋里籬島編、文化2(1805)年刊をベースに作成した。また、経済活動が盛んになり、商業としての出版活動もめざましく発展した結果、多くの書物が出版という商業活動を通して刊本として人々に読まれるようになったのである。そのため、前掲の『伊勢物語』の挿絵には万治年間に刊行された刊本を使用した。

このように木曾路双六は江戸時代に整備された木曾街道の双六であるため、日本近世期の資料を多く扱うのは必然的になる側面もあるのであるが、他にも資料5の天津宿の副読本の解説には上田秋成の『雨月物語』「夢応の鯉魚」本文が引用されている。木曾路双六自体は共同研究員三名の合作であり、どの担当者にも近世期の題材を多く扱う必要性が生じてくるのは前述の通りであるが、この『雨月物語』「夢応の鯉魚」を解説に盛り込んだのは筆者であるため、筆者自身が教材作成に当たる上で窺われてきた日本近世文学作品を古典教育の題材として用いることの有用性について私見を述べていきたい。

まず天津宿副読本を見ていく。副読本の「文学史的情報」本文は次の通りである。

平安時代には石山寺や唐崎神社には多くの貴族が参詣に訪れた。また、江戸時代には大きな宿場街として栄えた。紫式部が石山寺で源氏物語を起筆したことは有名である。また、志賀浦、長等山、唐崎、打出浜、瀬田橋など多くの地が歌枕として和歌に詠われる。江戸時代、上田秋成『雨月物語』の一編「夢応の鯉魚」では、魚になって琵琶湖を遊泳していた僧侶が後に「まず長等の山おろし、立ちゐる浪に身をのせて、志賀の大湾の汀に遊ばば、かち人の裳のすそぬらすゆきかひに驚かれて、比良の高山影うつる、深き水底）に潜くとすれど、かくれ堅田の漁火によるぞうつなき。(中略) …矢橋の渡りする人の水なれ棹をのがれては、瀬田の橋守にいくそたびか追はれぬ。日あたたかなれば浮かび、風あらきときは千尋の底に遊ぶ。」と語る。この琵琶湖の名所を巡る道行文は後世、三島由紀夫に絶賛にされた。

大津宿が置かれた近江国は言わずと知れた雄大な琵琶湖が広がる地でもある。この琵琶湖には古くから近江八景と呼ばれる名勝地や多くの歌枕が誕生してきた。大津宿にちなむ古典の題材には古歌、中古・中世期の物語や説話など枚挙にいとまがないのであるが、ここに『雨月物語』「夢応の鯉魚」本文を引用して大津宿の文学史を解説したことには理由がある。まずその点について言及していく。

『雨月物語』「夢応の鯉魚」は次のような話である。

昔、三井寺に興義という僧侶がいた。興義は絵の名手として名高かった。いつも魚が生き生きと遊び泳ぐ様を描いていた。時には心を凝らし、思い詰める余りにうとうとして、夢の中で水中に入って大小様々の魚たちと遊び、目覚めると夢に見たままを描いて壁の貼り付け「夢応の鯉魚」と呼んでいた。

ある時、興義は病気で寝込み、七日後に息が絶えてしまった。しかし、胸のあたりにほんの少し暖かみが残っていたので、もしや生き返りはせぬかと枕元のあたりで弟子や友人が見守っていたところ、三日後に蘇生した。

蘇生した興義は使いの者に檀家の一人である平の助の館に行き、宴を中断して寺に来るよう伝えるように命じた。使いの者が先方の館に赴くと、興義が言った通りに酒宴が取り行われてることを奇怪に思いながら、興義のことづけを伝えた。

やがて平の助が供を連れて寺にやって来ると、興義は平の助の館での酒宴で三尺余りの大魚を鱠にしたところであったことを言い当てた。興義が詳細に酒宴の様子を述べたことを周りの者たちがいぶかしく思っていると、興義は自分が病で寝ついている間、夢の中で鯉になって琵琶湖を逍遙していたことを話して聞かせた。長等山、三井寺、志賀の入り江、比良山、堅田、竹生島と琵琶湖を周遊していたところ、にわかにはひもじくなって漁師文四

の釣り糸の餌に食らい付いてしまい、捕らえられてしまったこと、そして平の助の館に持って行かれ、そこでまな板にのせられ包丁で切られようとしたその時に興義は夢から目覚めたことを語った。聞いていた人たちは大いに感じ入り、従者を家に走らせて残った鱈を湖に捨てさせた。

興義は病が癒えてからずっと後年になって天寿を全うして亡くなった。その臨終の時にはそれまでに描いた魚の絵数枚を湖に散らして捨てた。その際には描かれた魚が紙絹から脱け出して水中を遊泳したという。そのため興義の絵は現在伝わっていない。その弟子の成光という人が興義の妙筆を伝授して当時は有名であったが、この成光が閑院の御殿の襖に鶏の絵を描いたところ、生きた鶏がこの絵を見て蹴ったという話が古い物語に載っている。

木曾路双六大津宿の副読本で引用した「夢応の鯉魚」のくだりは、鯉になった興義が「尾を振鱗を動かして心のまゝに逍遙」した様子を描写した箇所であり、前述のように後世、三島由紀夫に絶賛された道行文としても有名なところである。

この道行文に詠み込まれた数々の地に解説を施していくと次のような古歌、掛詞を紹介することができる⁶⁾。

○しがの浦やしぼし時雨の雲ながら雲になりゆく山風の風

※「雲ながら」に「長等山」をかけている (『続拾遺集』巻六・慈鎮)

○楽浪の志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも (『万葉集』巻一・柿本人麻呂)

○かち人の汀の水ふみならしわたれどぬれぬ志賀の大わだ (『続古今集』巻六・寂蓮)

○志賀の浦の浪の花こそ影うつす比良の高嶺の桜なりけれ (『新葉集』・光任)

○さよふけて夜中の瀉におぼほしく呼びし舟人はてにけむかも (『万葉集』巻七)

○磯の崎漕ぎたみゆけば近江の海八十の湊に鶺鴒はにに鳴く

(『万葉集』巻三・高市黒人)

○くもりなき月もますみの鏡山名に顕れてみゆる夜半かな

(『新続古今集』巻四・山階入道前左大臣)

○めにたてて誰か見ざらん竹生島波にうつらふあけの玉垣

(『松葉集』)

○かくとだにえやは伊吹のさしも草さしもしらじな燃ゆるおもひを

※この歌の伊吹は下野国。修辭的に利用したわけである

(『後拾遺集』巻十一・実方朝臣)

○おぼつかな伊吹おろしの風さきに朝妻船はあひやしぬらむ

(『山家集』西行)

○にほてるや矢橋の渡りする舟をいくそたび見つ瀬田の橋守

(『松葉集』)

これら以外に「かくれがたし」と「堅田」の掛詞、「ぬば玉」という枕詞などもこの道行文から知ることができる。

先述のように琵琶湖は多くの歌枕や物語、説話を有する地でもあり、大津宿近辺にも多くの古跡が存在する。『木曾路名所図会』に掲載される「大津」の項には、三井寺、志賀浦、長等山、石山寺、粟津原などが取り上げられ、これらの地にまつわる多くの文学作品が紹介されている。ここに掲載された和歌に注釈を付けたりすることも国文学を専攻する者にとっては大いに有効な題材であると思われるが、高校生までもを対象に、特に子ども向けに古典への興味を引き出すことを目的としている本共同研究の木曾路双六では、古典の基礎となる有名作品を知識として有していくことが重要となってくる。その際に『雨月物語』『夢応の鯉魚』に描かれる琵琶湖逍遙の道行文を教材として用いると、日本近世期から見てもすでに古典となった中世期までの様々な和歌集、物語、説話を知識として吸収していくことができるのである。現在まだ着手していないが、大津宿副読本の引用した「夢応の鯉魚」の原文のみならず、これらにまつわる古歌、歌枕、掛詞などの解説をこちらで用意することも検討したい。

ここまでは木曾路双六副読本大津宿の解説内容に引用した『雨月物語』『夢応の鯉魚』を古典教材として用いることの有用性について述べてきた。「夢応の鯉魚」は一部の高校の古典の教科書に採録が見られる作品であり⁷⁾、比較的よく知られている作品かと思われる。しかし、近世文学作品は古典教材としては決してメジャーであるとは言えないであろう。

けれども、近世文学作品を古典教育の題材とすることに有用性があるのは『雨月物語』の「夢応の鯉魚」に限ったことではないのである。

日本近世文学作品の特徴としてパロディなどといった典拠の利用という技法が挙げられる。国文学の世界では古くから本歌取りなどのように典拠を利用した技巧は当然用いられてきたのであるが、近世文学では『源氏物語』のパロディである『好色一代男』、『伊勢物語』のパロディである『仁勢物語』など諧謔性を狙った多くのパロディ作品、また、仮名草子、読本作品のように中国小説を典拠とした翻案小説が多く生み出されてきた。江戸期にはすでに古典となっていた題材や異国中国から流入された題材などを当世人が好む物語に作り替え、下敷きになった典拠との違いを見出すことは江戸の人々が楽しんできた文学の享受方法の一つであった。『雨月物語』『夢応の鯉魚』の琵琶湖逍遙の描写にも、当時から見た教養としての古典の知識が数多く盛り込まれているのである。

このような性格を持つ近世文学作品全般において、その注釈を読んだり聞いたりすることは、日本近世期の古典作品を味わうと同時に、それ以前の古典の知識をも知ることができる学

びの機会となり得ると思われるのである。

日本近世期の作品は、時代の違いから高校までに習う古典文法に乗っ取っていないこともあるという側面があり、高校までの古典教材として使用される機会はこの時代の作品と比べて決して多くない。しかし、古典文法を学ぶことだけが古典学習ではないのであり、文学史の知識、物語の有名な段や有名な古歌、また和歌の歌枕や掛詞といった技巧などを吸収しながら、実際の文章の美しさに触れて古典の文章に親しんでいくことが古典学習には重要になるのではないだろうか。

このような狙いを持って古典教育を進めるのであれば、日本近世期の作品は古典教材として非常に優れた一面を有していると思われる。

三 「夢応の鯉魚」に見られる古典教材としての要素

本稿は木曾路双六という古典教育のための題材の開発と日本近世文学作品全般の古典教材としての可能性について言及するものであるが、この『雨月物語』「夢応の鯉魚」は木曾路双六の副読本作成のために引用した道行文以外にも古典を教える上で格好の要素を多数持っていることを蛇足ながら述べておきたい。

「夢応の鯉魚」の梗概は第二節で述べた通りであるが、この結びは興義の妙筆を伝授する弟子として有名であった成光が、閑院の御殿の襖に描いた鶏の絵の話が古い物語に載っている、として締めくくられているのである。

この興義と成光については『古今著聞集』（橘成季著、建長6（1254）年）成）の巻十一第十六に見られる人物とのつながりが指摘されている。そのことを確かめるために『雨月物語』「夢応の鯉魚」と『古今著聞集』の本文を以下に示す。

『雨月物語』「夢応の鯉魚」

興義これより病愈て杳の後天年をもて死ける。其終焉に臨みて画く所の鯉魚数枚をとりて湖に散せば。画ける魚紙繭をはなれて水に遊戯す。こゝをもて興義が絵世に傳はず。其弟子成光なるもの。興義が神妙をつたへて時に名あり。閑院の殿の障子に鶏を画しに。生る鶏この絵を見て蹴たるよしを。古き物がたりに戴たり。

『古今著聞集』巻十一第十六 「成光閑院の障子に鶏を画く事」

成光、閑院の障子に鶏をかきたりけるを、実の鶏みて蹴けるとなん。此成光は、三井寺僧興義が弟子になん侍る。

『雨月物語』「夢応の鯉魚」では興義は臨終の際に描いた鯉の絵を皆湖に放ってしまい、その絵は紙絹を離れて遊泳していつってしまった、そのため興義の絵は伝わっていないのである、としている。また、興義の妙筆を伝える弟子の成光が閑院の障子に鶏を描いたところ、生きている鶏がこれを蹴った逸話が古き物語に載っている、として話を結んでいる。これらの記述は前掲の『古今著聞集』巻十一第十六に見られる説話に従っていることは数ある『雨月物語』の注釈では通説とされていることであり、例えば『雨月物語』（長島弘明校注、岩波文庫）では解説に「…主人公を『古今著聞集』に拠って、三井寺の僧侶にして画の名人である興義とした。『古今著聞集』には、名人成光の師匠がこの三井寺の興義だったという以外のことは書かれておらず、興義の事跡は不明である。この興義には、実在のモデルがいる。秋成と同時代の大阪の画家で、鯉の画の達人として「鯉翁」と呼ばれた蛇玉（葛子明、一七三五～八〇）である。」と記載がある。

『雨月物語』「夢応の鯉魚」で興義の絵は現在伝わっていない、としたのは、詳細不明な「興義」という名の僧侶のモデルは別に実在していたことを受けてのものであろう。そして「夢応の鯉魚」の最後を「古き物がたりに戴たり」として典拠があることを匂わせているのである。

尚、興義の言い伝えの原拠が『古今著聞集』に拠っていることについては、古く後藤丹治が「この話興義の話を宇治拾遺の一条としてゐるのは誤謬である。」と述べ、同じく『雨月物語』「貧福論」でも秋成は『古今著聞集』を原拠としていること、『雨月物語』を著した後年、秋成は『春雨物語』でも『古今著聞集』を原拠に利用していることを指摘している⁸⁾。

この興義と成光についての結びのくだりもまた、『古今著聞集』、『宇治拾遺物語』、『十訓抄』といった説話文学の解説に用いることができるであろう。

他にも読本というジャンルが文学史上どのように形成されたのかを学ぶにあたって、『雨月物語』「夢応の鯉魚」は唐代伝奇「魚服記」と白話短編小説集『醒世恒言』の「薛録事魚服證仙」を詳細に、丁寧に翻案し、日本人好みの作品に仕上げたものであることを原文を味わいながら知ることができるであろう。『雨月物語』は当時中国の口語体（白話）で書かれた小説が日本で大流行したことを受けて生まれた翻案小説なのである。中国小説をベースとした「翻案」をテーマにするのであれば、現代国語で広く学習教材となっている中島敦の「人虎伝」や、幼い頃に読んだ経験を持つ者も多いであろう芥川龍之介の「杜子春」にも話をつなげていくことができる。

このように、『雨月物語』に限らず近世期の作品には古典の様々な知識や技巧、或いは当時の流行が多様に取り込まれていることを再認識すると、古典教育として適した題材が多くあることに気付くであろう。

おわりに

以上、本稿では筆者が携わってきた共同研究「古典籍画像に基づく ICT 活用教育プログラムの開発」と、その共同研究を進める中で行った第7回日本語の歴史的典籍国際研究集会での発表「古典と地域を結ぶ ICT 活用教育の可能性—楽しみながら学ぶ「木曽路双六」・「ことわざ絵合わせ」—」（於国文学研究資料館、2021年11月）の研究報告を行った。また、そこから見出された日本近世期の作品を古典教育の題材とすることの可能性、有用性にも言及した。

本共同研究で開発した教材が木曽路双六という地誌と古典とを結びつける特性をもつものであることから、この双六に付随させる資料には近世期の紀行案内書、近世期の刊本など多くの近世期の題材を用いてきたわけであるが、そこからは近世期の作品には典拠を巧みにアレンジするパロディや翻案といった技巧が顕著に見られること、これを生かして古典教材とすることのできる可能性が大いにあり得ることが見出された。

この視点を踏まえ、今後も木曽路双六をはじめとする本共同研究の今後の展望について考えていきたい。

注

- 1) 文科省ホームページ「国語科の指導における ICT の活用について」
https://www.mext.go.jp/content/20200911-mxt_jogai01-000009772_01.pdf
文科省ホームページ「GIGA スクール構想の実現について」
https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.htm
- 2) 国文学研究資料館ホームページ「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画（略称：歴史的典籍 NW 事業）」<https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/plans.html>
- 3) 国文学研究資料館ホームページ「新日本古典籍総合データベース」<https://kotenseki.nijl.ac.jp/>
- 4) この研究集会の動画は国文学研究資料館ホームページで公開されている。
<https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/sympo2021.html>
- 5) 共同研究者：速水香織（信州大学）、宮本祐規子（白百合女子大学）。作業協力者：時田紗緒里（苫小牧工業高等専門学校）、岡島由佳（青山学院大学）。
- 6) ここに掲げる和歌等の引用は『上田秋成 雨月物語』（高田衛・稲田篤信校注、ちくま学芸文庫、1997年刊）、『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』（『新編日本古典文学全集』、中村幸彦・高田衛・中村博保校注、小学館、1995年刊）の注釈に従った。
- 7) 大修館書店『精選 古典 B 改訂版』、三省堂国語教科書クロニクル『高等学校 古典 I（古文編）』などに採録されている。
- 8) 後藤丹治「雨月物語典拠新考—中世の作品三種について—」『論究日本文学』立命館大学日本文学会、1954-7。

付記

本稿は、第7回日本語の歴史的典籍国際研究集会（於オンライン、2021年11月11日）での発表に基づき加筆修正したものである。また本稿は、人間文化研究機構国文学研究資料館歴史的典籍NW事業共同研究の成果の一部である。

天桂派『伝法儀規』について

— 附録・天桂派『伝法儀規』翻刻資料 —

菅原 研州

キーワード：近世 曹洞宗 伝法 天桂伝尊

一、はじめに

本論は、江戸時代の曹洞宗の学僧・天桂伝尊（一六四八～一七三五、以下、天桂）に係る『傳法儀規』（以下、『伝法儀規』と表記）について検討結果を報告するものである。天桂は、江戸元禄期に行われた「宗統復古運動」の帰結や、その推進者となった卍山道白（一六三六～一七一五）に対し、舌鋒鋭く批判したが、その結果、ある種の異端扱いを受けることもあった。しかし、現在では、その思想が研究対象となり、評価もされるようになってきた。

今回は天桂に因む『伝法儀規』を採り上げるが、これは広く、宗門における伝法・嗣法に関わるものである。天桂の伝法・嗣法

天桂派『伝法儀規』について

観については、主なものとして以下に掲げる研究成果を挙げておきたい。

・鏡島元隆「天桂伝尊の思想」「天桂派下の思想」、ともに『道元禅師とその門流』所収

・黒丸寛之「(一) 嗣法論の展開」、曹洞宗宗学研究所『道元思想のあゆみ(三)』「一 近世における道元禅の展開」所収

・志部憲一『天桂伝尊の研究』「H第六章 嗣法論」

なお、天桂派の『伝法儀規』を扱うけれども、従来の研究では、天桂が卍山系統による儀規を重視した嗣法観を批判したことは多く指摘されているが、その天桂に『伝法儀規』があったことを前提に論を進める場合は見られない。よって、今回は天桂派『伝法儀規』を紹介しつつ、それが天桂の思想の内に位置付けることが可能かどうかを検討することとしたい。

二、天桂派『伝法儀規』解題

今回紹介する天桂派『伝法儀規』は、筆者が令和四年夏頃に入手した、鳥取県洞禅寺旧蔵資料群に含まれていたものである。

概要は以下の通りである。

一、部数 一部

一、料紙 楮紙

一、大きさ 縦17cm×横20.2cm

一、装丁 卷子本

一、題目 傳法儀規

内容 傳法儀規

傳法内指南

- 一、行字数 毎行一二字
- 一、書写年 不明
- 一、筆記者 不明
- 一、所藏者 旧藏・洞禪寺

現在・菅原研州

全体として、非常に小さな卷子状となっており、実際の儀規を行う上では、師資で袖中に持参することも可能であったことだろう。なお、当資料が天桂派の作法だと判断した理由は、『伝法儀規』本文の末尾の奥書に、以下の一節が見られるためである。

右者曩祖正傳心印面授之正軌也祖々

相傳來聯綿不断享保九年甲辰四月

八日桂老和尚在于大日本國畿内接州

豊島郡吉田邑退藏峰室中面授

直指之式如是而傳

授者として天桂を示す「桂老和尚」という名前が見え、退藏峰（陽松庵、現在の地名で大阪府池田市吉田町に所在）の室中で面授された式であると理解出来る。また、当資料には返り点・送り仮名などは付されていないものの、「面授直指之式」を「直指に面授するの式」と読んで、天桂から法嗣である直指玄端（？）一七七六）に付属された作法と判断した。なお、直指玄端は、他に残された資料でも、「直指」をもって署名する場合が見られるこ^①

とも付記しておきたい。

従来、直指の嗣法の時期は不明とされてきたが、当資料によれば享保九年（一七二四）、天桂七七歳の年、四月八日の釈尊降誕会に合わせて実施された様子が分かる。直指は天桂没後に『天桂和尚年譜（以下、『年譜』と略記）』を編むなど門弟の中でも重きを置かれていたと考えられるが、享保九年は退藏峰の天桂の下にいて、同六年（一七二一）以来任されていた、退藏峰の院事を務めていたと思われる。更に、享保九年の『年譜』には以下のようにある。

九年甲辰 師七十七歳仲夏。因事出京師官衙。寓止北野慈眼寺。其主大顛禪師待遇敦焉。秋初得公明回。^③

天桂は、享保九年五月（仲夏）から京都の官衙に赴いたとある。よって、四月はまだ退藏峰にいたと考えてよからう。つまり、奥書の記載には、大きな矛盾はないことになる。なお、五月以降の官衙に赴いた一件について、志部氏は『海水一滴』刊行の是非を廻る問題であった可能性^④を指摘されている。現在の筆者には、この問題について詳細を論じる知見を得ておらず、志部氏の見解を承けておきたい。

三、『伝法儀規』について

『伝法儀規』であるが、作法の次第（差定）としては、以下のようになる（なお、各項目の名称は筆者が仮に付した）。

・準備（受者の威儀整正、道場の荘厳含む）

- ・受者による諸堂礼拝
- ・伝法道場への入室

- ・本師請拝

- ・縦継拝

- ・洒水

- ・血脈授与

- ・嗣書授与

- ・嗣書披見

- ・大事授与

- ・室内伝授物授与

- ・新祖位の登椅

- ・師資礼拝

- ・退室

- ・無住拝

以上の内容から、当作法はいわゆる『伝法室内式』⁽⁵⁾を原型に作られたものだと理解できるが、少しく『仏祖正伝菩薩戒作法』も意識されている。師資の礼拝について、「縦継拝（奇拝）」は行われているが、「横継拝（超宗越格拝）」は行われない。また、『血脈』の授与も『伝法室内式』には入っていないが、当作法では条件付きで行われる。『血脈』授与に合わせ、口訣には「吾此佛戒従如来嫡々相承来到于吾々今傳（某甲）汝能護持」とあるため、具体的な戒本を挙げてはいないが、仏戒相承を行っている。ただし、「伝戒式」に対する指示が以下のように見える。

傳戒之儀規前夜行之或今夜行之則廣畧之弁事可抛本師之指揮
道場莊嚴稍在別宜委悉于彼儀焉

ここでいう、広略とは、伝戒式の有無であろう。

前行傳戒儀則略此一件

つまり、伝戒式を正式に行ずるのであれば、『血脈』及び仏戒の授与は行わないのである。そして、その時は、『嗣書』『大事』のみ伝授されたと思われる。また、『大事』をそれとして授けることは『伝法室内式』とは異なっている。『伝法室内式』には『大事』とは表現されず、「秘書」となる。

それから、各種伝授物の授与後に、新祖位を得たとして、資を椅子に登らせる。これは『仏祖正伝菩薩戒作法』の影響を受けていると思われるが、『梵網経』「衆生受仏戒」偈の読誦は無い。

そして、『伝法室内式』同様に、式後に無住拝を行じている。

以上から、『伝法室内式』を原型に、「三物授与」を主たる目的とした『伝法儀規』として編まれたことが理解出来るよう。

四、『伝法内指南』について

『伝法内指南』は、『室内三物（嗣書・大事・血脈）』等の書写に関する口訣である。残念ながら、筆者は未だ、この口訣通りに記入された、『三物』を拝覧する機会を得ていないため、あくまでも、この指南を紹介するのみに留めたい。

当指南からは、『三物』の筆写のために、絹または梅華地の綾を弁備するべきだという。更に、『三物』を包むタトウについて

の指示もあるが、ここでは「大奉書五枚」を挙げています。そうすると、五本の伝授物があったと考えられるが、本書で指示されているのは『三物』と『伝法儀規』等とあり、残る一本の書写物は不明である。

実際に伝法式・伝戒式を行ってみれば分かることだが、当指南は実践的に「使える」ように設計されている。例えば、師から資が『三物』を借り出す段で、「別調可謄写之艸本与之為好」とあるが、要するに祖師などの名前が書かれた別の「草本（下書き）」を用意しておくとして良いとしている。師の『三物』を汚さずに済むといえる。

そして、末尾には『三物』の二々、裁断するべき絹の面積を示しており、『嗣書』は大きいのが、『血脉』『大事』と徐々に小さくなる。なお、この『嗣書』の大きさは、永平寺所蔵・伝道元将来『嗣書』の大きさとほぼ一致しない。可能であれば、この大きさに基づく天桂派『三物』が同派下で伝承されているか、確認する機会を得たいと願っている。

また、「報恩儀」として、本師・侍者などへ御礼をするように示しているが、これは他の法系の様子を見ても、不自然ではない。

五、天桂伝尊の思想との関連

本章では、天桂派『伝法儀規』と天桂伝尊の嗣法観との関係性について検討したいと思う。

その前に、今回検討している『伝法儀規』は、享保九年の実施となっている。そうすると、天桂の主著と評される『正法眼蔵弁註（以下、『弁註』と記載）』は、正徳二年（一七一二）天桂六五歳の時から『正法眼蔵』本文の校訂を願い、享保十一年（一七二六）天桂七九歳の時に『正法眼蔵』本文を註弁することを思い立ち、同一四年の天桂八二歳の時に『弁註』が成立したとされるため、直指への嗣法の時には『弁註』はまだ成立していない。

ただし、先行研究によれば、『弁註』成立以前から天桂自身の立場が確立されていた印象を得るし、また、後述する『報恩編』などでも、『正法眼蔵』各巻への言及が見られるため、影響を排除する必要はない。

本論では、その見解が発せられた時期にも注意しつつ、天桂の嗣法観、特に儀規の位置付けを確認したいが、先んじて先行研究を概観しておきたい。

①寺院伽藍の開山法を重視し、因院易師や伽藍二物の相承を批判⁶⁾

②一師印証は不易⁷⁾

③師資相承は自己・自心の究明⁸⁾

これらは、天桂自身の伝記的問題や、天桂自身も巻き込まれた訴訟の結果などと相即しており、まず生涯の主張として見て良いと思われるが、先行研究での論述には『弁註』も広く引用されているため、本論では『弁註』より前の文献での検討を行ってみたい。

そこで、注目すべきは、享保九年以前の成立と認められる『報恩編』『海水一滴』であろう。

特に、『報恩編』は「天桂による卍山の嗣法観批判」⁽⁹⁾と評され、また、『海水一滴』は『六祖壇経』への註釈だが、六祖慧能自身の嗣法や授戒の様子なども含まれる。よって、天桂自身の儀規への態度を確認可能だが、そもそも、天桂は宗統復古運動に対して以下のような評価をしたことが知られる。

(元禄)十六年癸未 師、五十六歳(中略)秋八月、台命有りて、一たび嗣すれば改換すること無しの條約降る。両本山三僧司、領じて海内に宣布せしむ(蓋し梅・卍二師憂訴の靈に因む也と云う)、師、固より、自ら守りて流弊に墮せずと雖も、毎に滔滔として天下皆、易嗣の乱統の弊に陥るを憂えること久しし。故に以て感戴慶幸止むこと無し。然るに此の時に当たりて、或いは宗門の師学、一師面受の宗旨を錯会する者、還た少なからずや。⁽¹⁰⁾

天桂はこの時、阿波丈六寺にあって、しかも、末寺との訴訟に巻き込まれていたことが知られるが、本人は「一師印証」の條約が定まったことを素直に喜びつつ、その内容について錯会するものがある可能性を憂慮している。

一方で、その二年後となる宝永元年(天桂五七歳)の時には、裁判が一段落したようで、「師、元禄の新條に攀て、伽藍二物を重授し、以て牌を十四世として上る」⁽¹¹⁾とある。これは、丈六寺での話だが、天桂は本師からの一師印証を、宗統復古運動決着前か

天桂派『伝法儀規』について

ら堅持していた。つまり、宗統復古運動決着前であれば、転住に因んで従来の嗣法を捨てて、新たに伽藍相統に因む易師が行われていたが、天桂はそれを否定し、丈六寺についても、当初は「借住」であったことが知られる。しかし、宗統復古運動の結果、最初の本師からの嗣法を維持しつつ、転住の際には、「伽藍二物(血脈・大事)」を受ければ良くなったため、その方法に従った。そして、丈六寺の「十四世」として住持牌を置いたことを意味している。つまり、この段階で、天桂は新たな伝法の制度に従っていたこととなる。⁽¹²⁾

また、『報恩編』巻上に収録される『参同契毒鼓』では、「東西密相附」への提唱において、本論の問題意識に関連する事項を採り上げている。まずは、儀規の内容についての論点が見られるので、検討してみたい。

三鼓入室圍室重重、袈裟を以て椅を覆い、人をして見せしめず。曹溪の青原に付するも亦復、是の如し。嫡嫡相承して今に至るまで断ぜざるなり。重重圍室、袈裟を以て椅を覆い、人をして見せしめざるの語、壇経に就いて言ふのみ。諸伝灯を閲するに、終に之を見ず。曹溪、青原に付するも亦復、是の如しとは、抛有るも、凡そ壇経には訛誤多く、此の一二に止まらず。後人の妄添、間又之れ有り。老僧、之を嫌むこと茲年有り。諸本を校讐するに、未だ好本を得ず。假使、人をして見せしめざるも、蓋し是れ其の要と爲する所に非ず。⁽¹³⁾

これは、いわゆる「伝法儀規」の内容に関する説示だと言え

る。ここでは五祖弘忍が六祖に対して付法する際に、六祖を招き入れてから、五祖は自らの袈裟をもって覆い、その付法の実態を他人に見せなかったというが、これについて、天桂はそもそも『六祖壇經』の本文自体に、信用できない部分もあるとし、この一事は他の「伝灯（いわゆる禅宗史伝）」で確認できないとした。ただし一方で、覆って隠していたとしても、それはこの一事の要点とはしないと判じているのである。なお、天桂は『六祖壇經』の良本を得て、同書の校訂をしたいと願っていたようだが、『海水一滴』ではこの一事を示す「三鼓に室に入れしめ、祖、袈裟を以て遮圍して人をして見せしめず」の一節に対し、以下のよう提唱している。

祖師、袈裟を以て遮圍して人をして見せしめざる者は、但、斯れ害を避くるの一端なるのみ。無慮、徒衆の機嫌を守が故に、是の如し。誠に人の爲めにすることなり。⁽¹⁴⁾

袈裟で覆う一事については、五祖が害を避けようとしたためだとし、全ては他の大衆の機嫌を守るためであると評した。そのためであろうか、今回紹介している天桂派『伝法儀規』でも、「道場之莊嚴先四壁掛紅纒」と四方の壁には「紅纒」が掛けられているのである。ただし、とりわけ秘事としての扱いをしているわけでもない。この儀規と秘事の關係について、天桂が『參同契毒鼓』で用いた「人天面前」の語句に注目したい。

或は曰く、若し人天知らざるが故に密と曰と言ときは、則ち理密、稍や義有るに似たり。如し祇だ、人天面前直下相付と

言ときは、則ち事豈に密なることを得んやと。是れ則ち多子塔前を事密と爲し、拈華微笑を理密と爲に似り。⁽¹⁵⁾

議論として、釈尊―摩訶迦葉の伝法として「多子塔前」と「拈華微笑」の二話について、天桂は圓悟克勤の「二重公案⁽¹⁶⁾」を引いて、それぞれを事理として検討を続けるが、そこで、これらの儀礼における「人天面前」と「秘密（秘事）」とが主題化されるのである。なお、天桂はその際、道元『正法眼蔵』『密語』巻を引いて、「密」は秘密ではなく「親密」の意味で把握している。そのため、儀規についても、その秘匿性については疑問視していたと思われる。

或は曰く、若し事、密ならざるときは、則ち理事矛盾して而も一如ならずや。必せり。而も師資相承も亦何ぞ曾て一如ならん。然るときは則ち授受の間舛誤無きこと能わざるなり。知らず、歴代一千七百の宗師の嗣法、人天面前直下相付して曾て覆藏せざるは、咸な授受の間舛誤有るや、此の義、若何。（『報恩編』巻上・九丁表）

そこで、事が密ではないときは、理事矛盾するというのが、ここでは、禅宗一千七百の宗師の嗣法が、人天面前して直下相付するもので、覆藏していないという見解を用い、以下の結論に到っている。

世尊、昔日、若し理事を分て以て兩重に付せば、則ち事と理と自ら是れ隔別す。然も拈華會上・多子塔前、共に八萬衆前現成底の事、借問す事理秘密何れに在らんか。⁽¹⁷⁾

結局は、釈尊―摩訶迦葉の伝法について、ともに八万の衆生が現成していたのであれば、事理秘密といった区分がどこに発生しているのか、と問い糺している。つまり、伝法儀規の秘匿性については、批判的だったと見て良いだろう。

また、もう一点、儀規という点からは、『正法眼蔵』「嗣書」巻への評価が参照される。

因みに、咨嗟の正法眼蔵嗣書篇に合血の事有り。決して後人の妄添なることを。古佛、豈に恁麼の怪説有らんや。縦ひ古佛の眞筆なるも、老僧、全く肯わず。況んや轉寫し來れるものをや。⁽¹⁸⁾

これは、『正法眼蔵』「嗣書」巻における『嗣書』調忍法に関わる「合血」について、天桂が完全否定した一節として知られる。なお、道元の眞筆であったとしても、肯わないという徹底ぶりなのだが、これを受けたものか『伝法内指南』では「合血」を入れない。『報恩編』では、更に以下の主張が見られる。

或が言く、天童淨老の所付の嗣書及び明全和尚所傳の血脈、現今永平室内に鎮して從來の法寶と爲と。固より夫永平古佛淨翁の室に入て授受底の標式有る、皆是表信の化儀にして、而も眼横鼻直を認得するに至る者は、入室已前も亦只是の如し。入室已後も亦只是の如し。一絲の寸毫移易有ること無し。⁽¹⁹⁾

既に先行研究⁽²⁰⁾において指摘されているように、この「或が言く」は卍山道白『洞門衣衲集』の文を指しているが、天桂は天童

如淨や仏樹房明全が道元に授けたとされる、『嗣書』や『血脈』の授受を「表信の化儀」としている。なお、この天桂の見解は、後に午庵道鏞によって訴えられており、その際、天桂が道元の家訓に違反したと指摘されたのだが、今回、天桂派『伝法儀規』が存在したことを思うと、やはり天桂派がいうように縦しんば卍山の見解への批判はしていたとしても、『嗣書』『血脈』の否定はされていなかったというべきなのだろう。

その点を踏まえると、以下の一節も、また別様に見えてくる。然も亦正法眼蔵の中、或は嗣書或は傳衣、之を尊重し之を珍敬する苦口丁寧の慈誨有るは、是れ不信根の人の爲に且く啼を止めるの黄葉にして而も佛法正傳の由て來る所、有ること知らしめるのみ。其の中句句言言、祖師の活眼睛有り。宜しく遊魂を招て其に之を照鑒すべし。⁽²¹⁾

こちらもまた、『正法眼蔵』の中の「嗣書」「伝衣」両巻について、止啼の方便であるかのように捉えられてしまうところ、「佛法正傳の由て來る所、有ることを知らしめるのみ」とあり、また、「其の中句句言言、祖師の活眼睛有り」ともあるため、安直な理解をすることを諫めているように見える。しかも、自らの弟子に対しては伝法儀規を実施しており、その際に三物を伝与していたとすれば、単純な方便とのみ評価し、切り捨てるような理解は出来ないのである。天桂自身が考える、「仏祖正伝」という表現を、現代でこそ、正確に理解する必要があると思われるのである。例えば、天桂派『伝法儀規』の巻末には、「右者曩祖正傳心

印面授之正軌也祖々相傳來聯綿不斷」という字句が見られる。ここからは、儀規そのものをも面授してきたという評価が明らかに見て取れる。

つまり、従来のような嗣法論の論じ方について、儀規中心か、内容中心か、といったような、分かりやすい区分を元に、祖師の思想を評する状況ではないといえるのである。

六、結論

本論は、天桂派に相伝されていた『伝法儀規』作法書の内容を踏まえ、改めて天桂の伝法観や儀規観について検討した。もちろん、向後の課題は複数存在している。

まずは、『伝法儀規』作法書の類書の発見が必要である。今回は、直指玄端門下の相伝資料を用いて研究したが、直指自身は三人存在したとされる天桂の法嗣の、一五番目の弟子である。⁽²²⁾ 後年は明らかに天桂の膝下にあつて、その薫陶を受けており、だからこそ、『天桂和尚年譜』まで編んだ重要な弟子ではあるが、特に伝法作法という点では、他の弟子にも同様に行われていなくて、話として通じない。よって、天桂派の他の系統における『伝法儀規』の発見、研究を要する。

また、『伝法儀規』自体の評価についても、今回の研究のみで決するものではないと思われる。特に、本論でも採り上げた先行研究が示す通り、天桂はその見解や刊行物が裁判の対象となっている。それは、伝法作法への評価までも含む。それを思う時、天

桂自身を守るために、法孫が自分達も儀規を実施していることを示すための、作法書が作成された可能性が残る。

今回、少なくとも『天桂和尚年譜』『報恩編』『海水一滴』の検討を通して、天桂自身に伝法儀規の伝承があったとしても、矛盾ではないことを示したが、これを確定させるには、まだ検討すべき課題があるため、今後の解明を期したい。

註

- (1) 志部二〇二〇、七五頁参照
- (2) 志部二〇二〇、七四頁
- (3) 『年譜』、『僧伝集成』六〇一頁
- (4) 志部二〇二〇、二八頁
- (5) 『伝法室内式』『仏祖正伝菩薩戒作法』『教授戒文』の三書については、『洞上室内儀軌』(全三冊)を参照した。
- (6) 志部二〇二〇、四六四〜四七四頁
- (7) 志部二〇二〇、四七一頁
- (8) 志部二〇二〇、五〇六頁
- (9) 志部二〇二〇、五一〇頁
- (10) 『年譜』、『僧伝集成』五九七頁下段〜五九八頁上段
- (11) 『年譜』、『僧伝集成』五九八頁上段
- (12) 志部二〇二〇、四六八〜四七〇頁も参照した。志部氏は陽松庵に所蔵されていた関係文書の解析によって、この一件の詳細を論じている。最終的な帰結は、『年譜』と同じである。
- (13) 『報恩編』巻上・五丁裏〜六丁表、原典に従って訓読(以下、同様)

- (14) 『海水一滴』巻一・三〇丁裏〜三一丁表
- (15) 『報恩編』巻上・七丁表
- (16) 典拠は『圓悟録』巻一六(『大正藏』巻四七・七八六c) または『圓悟心要』(『卍統藏』巻六九・四五七b) か。
- (17) 『報恩編』巻上・九丁表〜裏
- (18) 『報恩編』巻上・一一丁表
- (19) 『報恩編』巻上・一二丁表〜裏
- (20) 志部二〇二〇、五五〇〜五五一頁
- (21) 『報恩編』巻上・一二丁裏
- (22) 『退藏峯天桂禪師石墳碑文』、『僧伝集成』六〇五頁下段

参考資料

◎一次資料

- ・天桂伝尊『報恩編』全三巻、浅野彌兵衛等・享保六年(一七二二)
- ・天桂伝尊『海水一滴』全五巻、具足屋八右衛門・享保一〇年(一七二五)
- ・天桂派『伝法儀規』全一巻、写本
- ・曹洞宗務院蔵版『洞上室内儀軌』(全三冊) 発行年次不明ではあるが、『曹洞宗僧侶傳法令』成立後の大正一四年(一九二五)以降と推定される。
- ・『大正新修大藏經』を引用した。引用時は『大正藏』と略記し、巻数・頁数・段名のみで略記した。
- ・『大日本統藏經』を引用した。引用時は『卍統藏』と略記し、巻数・頁数・段名のみで略記した。
- ・曹洞宗出版部編『曹洞宗近世僧伝集成』曹洞宗宗務庁・一九八六年、引

用時は『僧伝集成』と略記した。

◎二次資料

- ・鏡島元隆『道元禪師とその門流』誠信書房・一九六一年
- ・曹洞宗宗学研究所編『道元思想のあゆみ(三)』吉川弘文館・一九九三年
- ・志部憲一『天桂伝尊の研究』大蔵出版・二〇二〇年

天桂派『伝法儀規』について

附録・天桂派『伝法儀規』翻刻資料

※凡例

- ・当資料は、筆者所持の写本・天桂派『伝法儀規』を翻刻したものである。解題は本論を参照されたい。
- ・全体は一巻の卷子状である。
- ・翻刻時の行数・字数などは原典に従った。へくは割注である。
- ・漢字の字体は概ね原典に従った。
- ・踊り字は原文の通りに反映させた。

傳法儀規

大都傳法之人當日預沐浴清
 淨著新淨衣是尊重大法之表
 準也當日放參前燒香侍者蒙
 堂頭和尚之尊命就于室中可
 莊嚴道場（傳戒之儀規前夜行之或今夜行之則廣客之弁事可拋本師
 之指揮道場莊嚴稍在別宜委悉于彼儀焉）道場之莊嚴先
 四壁掛紅纓當堂粵之正中設
 高椅（椅向南也）裝法被椅上蓋寶蓋
 椅子前設高卓一隻此卓蓋覆
 子桌上龍邊立花瓶蒼挿松枝
 （是用根松也）右邊燈燭中央置法脉（三物同堂
 置小袱子）洒淨器（洒淨枝用松枝）香爐續松

（續松數九本長九寸大如綠豆大）設展拜席前卓之東
 邊橫設小卓一隻覆卓衣卓上
 置取傳法衣白拂法鉢莊嚴最
 可愍鄭重已打調畢散香洒
 水可淨道場是侍者之用心也
 傳法之夜初更後資具威儀到
 侍者寮聽密示退梢埃三鼓時
 至三更初侍者啓和尚打鼓三
 下資即燒香禮拜于諸堂謂佛
 殿祠堂齊堂山門經藏乃至祖
 堂等也此際本師先入室中暫
 依椅侍者報來師乃出室迎
 揖引師入室侍者遙止于室外
 師即上椅子結跏趺坐資進前
 到正面兩手拈香爇寶炉退一
 两步深問訊展坐具（大展也）
 九拜師合掌受拜拜了收具進
 一步曲躬叉手曰（某甲）伏望拜
 請佛祖命脉欲得新祖位和尚
 大慈大悲哀愍聽許（如是三唱或一唱）師
 時良久默許乃下椅立時資右
 轉身轉位拜席之西邊面東師
 龍轉身從卓東邊轉位拜席之

東邊面西師資相揖共展坐具

上端相交重展（市坐具上資坐具下）資即三

拜師低頭受不答拜々了具上

長跪師取洒水器薰香仰龙掌

安之以洒淨枝先灌自頂三返

次灌資頂三返次灌右邊次灌

龙邊（洒淨之法有口傳）資合掌低頭受

灌頂畢三拜長跪本師時取血

脉拈曰

吾此佛戒從如來嫡々相兼来

到于吾々今傳（某甲）汝能護持

尽来未除莫令断絶即度與資

々受之取胸襟而三拜師合掌

而受（前行傳戒儀則略此一件）次取嗣書薰香

當面拈出囑曰吾有正法眼藏

涅槃妙心從如來嫡々相兼来

到吾々今付汝弟子（某甲）汝能

護持尽未来際莫令佛祖種子

断絶即開展嗣書師之龙臂上

右手燃續松學之令資見師資

相饗禮一拜合掌曲身見之即

師滅松燭了移嗣書令荷擔資

之龙臂上（開展授與法有口傳）少龙轉身

收疊而藏胸襟而三拜師合掌

受也次拈大事曰唯此大事諸

佛諸祖單傳微妙之法門也吾

今付（某甲）汝能護持尽未来際

莫令断絶資受之取胸襟三拜

師受之次拈法衣法鉢白拂授

與之資一々頂戴（室之西北隅預設小卓受子可安之）

畢三拜師末后答一拜共取坐

具立時師示曰既登新祖位畢

須着椅子次龙轉身到椅前向

椅問訊右轉身向師問訊即上

椅端坐師進正面焼香展具三

拜（市拜資有口訣）此時資合掌而受師

拜然後下椅子轉身右邊趣拜

席之西邊師右轉身立拜席東

邊師資相向揖出室資隨師後

上方丈礼謝三拜次翌日早晨

上方丈行無住拜（無住拜者無數量拜也）受師

命則住取具問訊而退

右者曩祖正傳心印面授之正軌也祖々

相傳來聯綿不断享保九年甲辰四月

八日桂老和尚在于大日本國畿内接州

豊島郡吉田邑退藏峰室中面授

直指之式如是而傳

傳法内指南

傳法之人得本師密許則須辨絹（或嗣書地也用

梅花綾可任小師之意）一丈二尺五寸大奉書五枚（三脉之包紙也）

名香數片朱墨等之物色而後沐浴清

淨具威儀上方丈拜請本師之三物（別調可謄

写之艸本与之為好）傳法儀軌等（別有傳戒儀軌同時行廣儀則可拜

写随略時則異日拜写亦可也）可拜写之如三物子長

短尺數宜受師命裁截焉書写之法

須具威儀挿綬香於卓上如法整嚴

而進傍觀莫訛一時莫略一劃書體朱引

要得其屬既如本書打調了應啓侍者

而上呈方丈至年月日師資之各印等則

本師自可打調矣當夜傳法儀軌畢

通復侍者有報恩儀之式囑儀報恩儀

可書須隨豊儉翌日午齋供養本師

（侍者光伴）謂謝齋時到前請上香三拜

供養了又礼三拜也如上事委悉須知焉

嗣法小師（某甲）謹拜写

裁絹口傳 嗣書七尺 血脉三尺二寸

大事二尺三寸 但シ都鯨尺也

研究業績 (2022年1月～12月)

浅原正和

〈論文〉

Correlated evolution of craniodental morphology and feeding ecology in carnivorans: a comparative analysis of jaw lever arms at tooth positions (共) *Journal of Zoology*, 318 (2) 10月 135-145

The anteriorization of tooth position underlies the atavism of tooth morphology: insights into the morphogenesis of mammalian molars (共) *Evolution*, 76 12月 2791-3078

石川雅健

〈論文〉

ユタの成巫過程 (単) 『愛知学院大学教養部紀要』第69巻第3号 3月 1-12

糸井川修

〈論文〉

ベルタ・フォン・ズットナーの文学について—『機械時代』の文学批評を手掛かりに(単) 『愛知学院大学教養部紀要』第69巻第1・2合併号 1月 35-51

内田康弘

〈学会発表〉

全寮制高校に新型コロナウイルスが与えた影響 (単) 日本子ども社会学会第28回大会 (オンライン開催) 6月 口頭発表

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈出張授業〉大学での学びと教育問題へのまなざし—データから描き出す子どもたちの学校生活— (単) 学校法人聖カタリナ学園光が丘女子高等学校 (オンライン開催) 1月

〈講演〉広域通信制高校の展開と定時制高校—多様化する後期中等教育の一断面— (単) 長野県立長野商業高等学校 (オンライン開催) 1月

〈講演〉多様な生徒が安心して大学進学できる社会を実現するために—通信制高校・サポート校から得られるヒント— (単) 株式会社朝日新聞社主催「朝日中退予防ネットワーク (高大接続領域)」 (オンライン開催) 2月

〈書評〉佐川宏迪 [著] 『定時制高校の教育社会学：教育システムの境界と包摂』 (単) 図書新聞3547号 6月 5面

〈報告書〉朝日中退予防ネットワーク『2021年度活動報告書』(共) 株式会社朝日新聞社 7月 33-35, 38-41

〈解説論文〉柔軟性の向上と教育の質保証との両立に向けて (特集：変わる、定時制・通信制高校) (単) 『月刊高校教育』(2022年9月号) 学事出版 8月 30-33

梅田 豊

〈論文〉

訴因変更制度についての一考察 (単)	『刑事司法と社会的援助の交錯 (土井政和先生・福島至先生古稀祝賀論文集)』現代人文社、2022年	11月	379-396
--------------------	--	-----	---------

大松久規

〈論文〉

『六妙門』における禅観の特徴 (単)	『印度學佛教學研究』第70巻第2号	3月	768-773
--------------------	-------------------	----	---------

『釈禅波羅蜜次第法門』「修証」の註釈的研究 (二) (単)	『愛知学院大学禅研究所紀要』第50号	3月	223-251
-------------------------------	--------------------	----	---------

『観心論』について (単)	『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』第23号	6月	25-30
---------------	-------------------------	----	-------

不定止観について (単)	『印度學佛教學研究』第71巻第1号	12月	26-31
--------------	-------------------	-----	-------

〈学会発表〉

不定止観について (単)	日本印度学仏教学会第73回学術大会 (東京外国語大学) (オンライン開催)	9月	
--------------	---------------------------------------	----	--

『方等三昧行法』の位置付け (単)	第2回国際天台学大会 (中国・天台山国清寺) (オンライン開催)	10月	
-------------------	----------------------------------	-----	--

『釈禅波羅蜜次第法門』における観境と観法 (単)	曹洞宗総合研究センター第24回学術大会 (曹洞宗宗務庁)	11月	
--------------------------	------------------------------	-----	--

岡島秀隆

〈論文〉

禅・佛教研究の方法論について—『禅研究所紀要』第五十号記念特輯刊行に寄せて (単)	『愛知学院大学禅研究所紀要』第50号	3月	1-18
---	--------------------	----	------

禅仏教の知恵 コロナ禍を生きる (上) (単)	中日新聞社・中日新聞 (東京新聞)	9月6日	11面 (文化)
-------------------------	-------------------	------	----------

禅仏教の知恵 コロナ禍を生きる (下) (単)	中日新聞社・中日新聞 (東京新聞)	9月13日	11面 (文化)
-------------------------	-------------------	-------	----------

〈学会発表〉

道元思想の特徴—言葉の基底としての体験— (単)	比較思想学会第49回学術大会シンポジウム：道元と分析アジア哲学 (パネリスト) (信州大学)	6月18日	
--------------------------	--	-------	--

河合泰弘

〈論文〉

翻刻 面山本『瑩山和尚洞谷記』 (単)	『愛知学院大学禅研究所紀要』第50号	3月	197-221
---------------------	--------------------	----	---------

〈学会発表〉

瑩山の衆生済度の原点	日本佛教学会2022年度学術大会 (第91回大会) (佛教大学)	10月	口頭発表
------------	----------------------------------	-----	------

〈その他〉(翻訳・資料・その他) 〈講話〉 かわらを磨いて鏡となす (磨博作鏡)	禪と法話の会 放光 (名城公園キャンパス)	6月	口頭発表
--	--------------------------	----	------

川口勇作

〈論文〉 英語授業における Microsoft Teams を活用したジグソー活動 (単)	『愛知学院大学語研紀要』第47巻第1号	1月	21-38
--	---------------------	----	-------

北田豊治

〈論文〉 大学体育授業におけるバレーボールのラリーに関する研究 (共)	『愛知学院大学教養部紀要』第69巻第3号	3月	13-19
--	----------------------	----	-------

河野敏宏

〈その他〉(翻訳・資料・その他) 〈短文〉本邦仏教典籍における本草書の引用	『禅研だより』第26号 (愛知学院大学禅研究所参禅会)	3月	1面
--	-----------------------------	----	----

香ノ木隆臣

〈論文〉 ロバート・ベン・ウォーレンの想像力の展開とその現在における意義について (単)	第37回愛知学院大学語学研究所研究発表会	11月	口頭発表
---	----------------------	-----	------

小柳竜太

〈論文〉 Profiling the tackle and subsequent injury risk in premier New Zealand club rugby players over a complete season (共)	<i>British Journal of Sports Medicine</i> , 56 (14)	1月	778-784
--	---	----	---------

〈学会発表〉 ラグビー競技におけるパントキックの数量的な活用様相の比較—国内トップの社会人と高校カテゴリーに着目して—	日本コーチング学会第33回学会大会 (オンライン開催)	3月	ポスター発表
--	-----------------------------	----	--------

境田雅章

〈論文〉 大学体育授業におけるバレーボールのラリーに関する研究 (共)	『愛知学院大学教養部紀要』第69巻第3号	3月	13-20
--	----------------------	----	-------

復興五輪の一考察 (共)	『愛知学院大学教養部紀要』第69巻第3号	3月	21-33
--------------	----------------------	----	-------

佐々木真

〈その他〉(翻訳・資料・その他) 〈意見投稿〉AI時代に英語を学ぶ価値	日本経済新聞朝刊「私見・卓見」	11月25日	31面
--	-----------------	--------	-----

柴田哲雄

〈学会発表〉

新疆ウイグル自治区の昨今の情勢をめぐる一
考察 (単) 中国現代史研究会東海例会
(愛知大学車道校舎) 10月

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈評論〉習近平の「頭の中」を分析して見え
た、プーチンとの「決定的な違い」：3つの
「思考の原型」を読み解く (単) 講談社・現代ビジネス
(オンライン) 4月

〈評論〉日本のウクライナ支援に妙案あり～
領土問題で中国・ロシアにくさびを：ロシア
を東部から脅かし得る唯一の存在である中国
をどう動かすか…… (単) 朝日新聞社・論座
(オンライン) 5月

〈評論〉中国当局の現場スタッフの視線で描
くウイグル族への「ジェノサイド」：カラカ
シュ県やその周辺で中国当局のスタッフは人
権侵害にどのように関与してきたのか (単) 朝日新聞社・論座
(オンライン) 7月

〈コラム〉ウクライナ侵攻と台湾 (単) 中部経済新聞 3月 8面

〈取材協力〉「警察国家」の色強める中国 情
報機関トップが党首脳部入り 中日新聞 (夕刊) 11月 2面

〈書評〉楊曦光著、劉燕子監訳『中国牛鬼蛇
神録』(単) 週刊読書人 2月 3面

〈討論〉コメント：各報告者に対する若干の
コメント (特集「対日協力」をめぐる人物研
究) (単) 中国現代史研究会『現代中国研究』第48
号 3月 46-49

白木優馬

〈論文〉

企業と消費者の関係における感謝 (単) 『繊維製品消費科学』第63巻第4号 4月 224-229

〈学会発表〉

感謝特性が物質主義傾向に与える影響 日本社会心理学会第63回大会
(京都橋大学) 9月 ポスター
発表

菅井大地

〈著書〉

『非日常のアメリカ文学—ポスト・コロナの
地平を探る』辻和彦、浜本隆三編著 (共)
「山火事とともに生きる—ビッグ・サー文学
における逗留の感覚」 明石書店 10月 85-108

〈学会発表〉

Emotions Floating in the Air: Affective
Transmission across Mortal/Immortal Breaks Association for Asian Studies 2022 Annual
Conference
(Honolulu & Online) 3月 口頭発表

ハードボイルドを夢見て—ブローティガンが
描く「ダメ男」のサバイバル 日本英文学会中部支部第74回大会シンポ
ジウム
(オンライン開催) 10月 口頭発表

〈その他〉(翻訳・資料・その他)			
〈評論〉社会とつながりすぎないためのコミュニケーション・タスク	『中央評論』第318号	1月	15-23
〈発表要旨〉民主主義的個人の位相—群衆・周縁・エコロジー	『中部アメリカ文学』第25号	3月	21-22
〈発表要旨〉 <i>The Octopus</i> における超自然的“FORCE” 一人新世の文学としてのアメリカ自然主義文学	『中・四国アメリカ文学研究』第58号	6月	57-60
〈研究会報告〉環境人文学における共同一日米若手研究者の交流について	ASLE-Japan Newsletter, No. 52	6月	9-10
〈発表要旨〉ワークショップ: Blue Humanities — <i>Wild Blue Media</i> (2020) を読む	『エコクリティシズム・レビュー』第15号	8月	66-68

菅原研州

〈論文〉			
乙堂喚丑に係る『戒壇指南』の研究—附録『戒壇指南』翻刻資料—(単)	『愛知学院大学教養部紀要』第69巻第1・2合併号	1月	53-70
西有穆山の禅戒論—附録『傳戒會裏閑話』翻刻資料—(単)	『愛知学院大学教養部紀要』第69巻第3号	3月	43-64
雪心白痴『禅戒伝耳録』の研究(単)	『愛知学院大学禅研究所紀要』第50号	3月	119-134
「三界無安」と「三界有安」(単)	『日本仏教教育学研究』第30号	3月	87-108
梅峰竺信『洞門劇譚』の研究(単)	花園大学『禪學研究』第100号	3月	387-411
〈学会発表〉			
金子白夢牧師におけるキリスト教と禅(単)	日本宗教学会第81回学術大会(オンライン開催)	9月	
〈その他〉(翻訳・資料・その他)			
〈投稿〉面山瑞方禅師とその周辺(二)	永福面山和尚鑽仰会『永福会報』令和4年度号	3月	
〈講演〉明治時代の伝染病と宗教界について	愛知県知上市生涯学習推進講座	5月	
〈講演〉曹洞宗における信心に関する諸問題	令和4年度曹洞宗宮城県宗務所寺族研修会	5月	
〈講演〉『行持軌範』の成立と展開(1)	令和4年度曹洞宗滋賀県宗務所現職研修会	8月	
〈講演〉今の時代に生きる仏教説話(1~3)(計3回)	令和4年度愛知県春日井市大学連携講座	12月	

富田啓介

〈著書〉			
その日常、地理学で説明したら意外と深かった。一街と地域を知るための5つの物語(単)	ベレ出版	3月	
『論文から学ぶ地域調査 地域について卒論・レポートを書く人のためのガイドブック』阿部康久ほか編著(共)「地理学の視点で動植物を調べる」	ナカニシヤ出版	3月	11-18

『身近な水の世界科学第2版』日本陸水学会 東海支部会編（共）「水の湧き出る場所」	朝倉書店	4月	83-86
『東海地方の湧水湿地を楽しむ』湧水湿地研 究会・富田啓介編著（共）	風媒社	12月	
〈論文〉 「東海丘陵要素」の広範な学術分野および社 会への受容と普及（単）	湿地研究12	11月	105-112
〈学会発表〉 湧水湿地内およびその周辺における野生哺乳 動物の季節的・時刻的出現特性	第14回日本湿地学会 （釧路）	9月	口頭発表
東海地方の大学生が持つため池のイメージ	第32回ため池の自然研究会 （名古屋）	12月	口頭発表
〈その他〉（翻訳・資料・その他） 〈勉強会講師〉 童話の森：谷戸と雑木林の原 風景の復元	主催：NPO 法人ごんのふるさとネット ワーク	2月	
〈勉強会講師〉 童話の森周辺の整備について	主催：NPO 法人ごんのふるさとネット ワーク	7月	
〈勉強会講師〉 大森奥山湿地群の中・高生向 け観察会	主催：大森奥山湿地群を守る会	7月	
〈講演〉 東山の森 湿地の環境	東山の森湿地再生プラン策定プロジェクト 東山の湿地を知る・考える講座 第1回 （主催：（公財）名古屋市みどりの協会）	2月	
〈講演〉 自然を感じ、知ることの大切さ：東 海地方の里地・里山を例に	2022年度東海シニア自然大学入学式講演 会 （主催：東海自然学園）	4月	
〈講演〉 東海地方における湧水湿地インベン トリの作成	第29回愛知県湿地サミット基調講演 （主催：長久手市家）	6月	
〈講演〉 板山高根湿地 湿地植物たちの物語	阿久比町湿地講演会（主催：阿久比町建設 環境部）	6月	
〈講演〉 地域を知って里山を守る！	ガチ！生物多様性塾プログラム （主催：昆虫食倶楽部）	7月	
〈講演〉 湧水湿地の生態系サービス	湧水湿地の魅力をめぐって：交流とシンポ ジウム記念講演 （主催：大森奥山湿地群を守る会）	8月	
〈講演〉 なぜ湿地を保全するのか？地域の湿 地が社会にもたらす恵み	東海丘陵湧水湿地群ラムサール条約登録 10周年シンポジウム記念講演 （主催：豊田市）	11月	
〈講演・パネラー〉 里山の湿地としての湧水 湿地	国指定記念シンポジウム・国指定天然記念 物と葦毛湿原 （主催：豊橋市）	7月	
〈小学校授業〉 大森奥山湿地群を探検しよ う！	私立帝京大学可見小学校3年生理科	9月	
〈小学校授業〉 大森奥山湿地群を探検しよ う！	可見市立桜ヶ丘小学校4年生総合	9月	

〈講座〉 東海地区の湿地の成り立ちと植生	東海シニア自然大学専修科	10月
〈講座〉 東山の水辺・湿地の実態	なごや水辺・湿地サポーター養成講座基礎編第1回 (主催：なごや環境大学実行委員会)	12月
〈講座講師〉 名古屋市東部丘陵地域の自然環境	千種区・名東区の自然：公園や緑地をめぐる第1回 (主催・会場：名古屋市千種区生涯学習センター・名古屋市名東区生涯学習センター)	10月
〈講座講師〉 湿地の保全	あいち生物多様性担い手育成講座 (主催：愛知県) (於 武豊町中央公民館)	10月

中村 綾

〈学会発表〉 『雨月物語』「菊花の約」と『古今小説』「范巨卿鶏黍死生交」—重陽節をめぐる—(単)	東海近世文学会	5月
『雨月物語』「菊花の約」に描かれる「茱萸」について (単)	京都近世小説研究会	5月

野田大志

〈著書〉 『認知言語学の未来に向けて—辻幸夫教授退職記念論文集—』(共)	開拓社	3月	133-144
〈論文〉 シンポジウム「比喩の身体性と知性」をめぐる (単)	『表現研究』第116号	10月	13-19
〈学会発表〉 シンポジウム「比喩の身体性と知性」司会及び趣旨説明 (単)	表現学会第59回全国大会 (京都橘大学及びオンライン)	6月	口頭発表
〈その他〉(翻訳・資料・その他) 〈辞書〉「とどまる」(単)	『基本動詞ハンドブック』国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp	2月	web版

藤田淳志

〈学会発表〉 “America has AIDS” and Fight “the same fucking fights” —世代を越えるエイズ演劇、パンデミックを経て受け継がれるもの	日本アメリカ演劇学会第11回大会シンポジウム：感染・変容・復元—アメリカ演劇とパンデミックの諸相 (オンライン開催)	9月
---	---	----

松井真一

〈学会発表〉 親から成人子への非経済的支援におけるきょうだい効果	NFRJ18研究会第3回全体研究会 (オンライン開催)	2月	口頭発表
-------------------------------------	--------------------------------	----	------

溝口 明

〈論文〉

Circadian clock genes regulate temperature-dependent diapause induction in silkworms *Bombyx mori* (共) *Frontiers in Physiology*, 13 4月 863380 (電子版)

Expression analysis of peptidergic enteroendocrine cells in the silkworm *Bombyx mori* (共) *Cell and Tissue Research*, 389 (3) 7月 385-407

文 嬉眞

〈著書〉

알면 다르게 보이는 일본 문화 2 (隣の国から見た日本文化再発見 2) (共) 『지식의날개』한국 방송통신 대학교 출판문화원 (『知識の翼』韓国放送通信大学校出版文化院) 5月 216-227

山口拓史

〈著書〉

ハンディ教育六法2022年版 (共) 北樹出版 4月 275-386

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈研究ノート〉教職課程自己点検・評価のための課題整理 (単) 『愛知学院大学教職支援センター年報』第4号 8月 19-48

山口 均

〈著書〉

『四月はいちばん残酷な月』(佐藤亨・平野順雄・松本真治編) (共) 「『死者の埋葬』冒頭18行再読」 水声社 11月 119-135

〈論文〉

コロナ禍の中の囲碁授業 (単) 『愛知学院大学教養部紀要』第69巻第1・2合併号 1月 1-17

「落下枝にかへると見れば胡蝶哉」考 (単) *Ezra Pound Review*, 第24号 (日本エズラ・パウンド協会) 2月 57-73

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈研究ノート〉二人の巨人 (単) 『風日』第66巻第3号 5月 22-29

吉村正宏

〈論文〉

Stereodivergent dehydrative allylation of β -keto esters using a Ru/Pd synergistic catalyst (共) *Nature Communications*, 13 (5876) 10月 1-10

鷺嶽正道

〈論文〉

Reading Materials for Learning to Read Scientific Papers: A Suggestion from A Systemic Functional Perspective (単) 『愛知学院大学教養部紀要』第69巻第1・2合併号 1月 19-34

Reading Popular Science Magazines: A Systemic Functional Perspective on Choosing Teaching Materials toward Academic Reading (単) 『愛知学院大学語研紀要』第47巻第1号 1月 3-19

『教養部紀要』第70巻総目次

第70巻 第1・2合併号（通巻第201号）令和5年2月発行

論文

- 松井真一：成人子のきょうだい構成と親からの育児支援……………（1）
Shinichi MATSUI : The Effect of Sibling Structure on Childcare Support:
Which Children are Supported by Their Parents?
- 菅原研州：近世洞門の伝法作法の一考察——附録『附法道場儀規並所辨用具』翻刻資料……………（46）
Kenshū SUGAWARA : A Study on the Ceremonies to Inherit Buddhism in Soto Zen Buddhism in Early Modern Japan
—Attached is a Reprint of the Document “Fuhoudojogiki-narabini-syobenryogu”—
- 中村綾：西田維則の訳解について——日本近世期における中国白話小説翻訳の様相……………（26）
Aya NAKAMURA : About the Translation of Nishida Isoku:
A Phase of Chinese Novel’s Translation in Japanese Early Modern Times

第70巻 第3号（通巻第202号）令和5年3月発行

論文

- 松井真一：質的データを利用した授業改善の有効性——計量テキスト分析を用いた探索的分析……………（1）
Shinichi MATSUI : Effectiveness of Using Qualitative Data for Classroom Improvement:
An Exploratory Data Analysis by using KH Coder
- 石川雅健：シャーマンのロールシャッハ反応——思考・言語カテゴリーの観点より……………（17）
Masayoshi ISHIKAWA : Rorschach Reaction of the Shaman
—From the Viewpoint of Thinking Process and Communicating Style—
- 上原宏行：等価選択肢数を用いた教養共通テスト分析の一例……………（29）
Hiroyuki UEHARA : An Analysis of Aichi Gakuin University Test of Liberal Arts and Natural Sciences
Using Equivalent Number of Choices
- 香ノ木隆臣：ロバート・ペン・ウォーレンの想像力の展開とその現代における意義……………（39）
Takaomi KONOKI : The Significance of Robert Penn Warren’s Versatile Imagination in the Present Time
- 菅原研州：天桂派『伝法儀規』について——附録・天桂派『伝法儀規』翻刻資料……………（80）
Kenshū SUGAWARA : Research on Manners of Inheriting Buddhism in Tenkei-Denson’s Lineage
—Attached is a Reprint of the Document “Manners for inheriting Buddhism Used
in Tenkei-Denson’s Lineage”—

研究ノート

- 中村綾：古典教育の題材としての日本近世文学の可能性
—— ICT 活用教育プログラム開発の研究報告より……………（55）
- Aya NAKAMURA : Possibilities of Early Modern Japanese Literature as Materials for Classical Education:
From a Research Report on the Development of Educational Programs Using ICT

執筆者紹介

松井真一 (本学講師……………社会学)
MATSUI Shinichi

石川雅健 (本学教授……………心理学)
ISHIKAWA Masayoshi

上原宏行 (本学教授……………情報科学)
UEHARA Hiroyuki

香ノ木隆臣 (本学教授……………英語)
KONOKI Takaomi

菅原研州 (本学准教授……………宗教学)
SUGAWARA Kenshū

中村綾 (本学講師……………中国語)
NAKAMURA Aya

教 養 教 育 研 究 会 委 員

会長：佐々木 真 副会長：糸井川 修*

会計：浅原正和*

青山健太 石川雅健 河合泰弘

北村伊都子 香ノ木隆臣 柴田哲雄

城 貞晴 菅井大地* 堀田敏幸

松井真一*

*本号編集委員

編 集 後 記

『教養部紀要』第70巻第3号をお届けします。今号には論文5本、研究ノート1本が掲載されました。投稿者の先生方には、貴重な論考を寄稿して下さったことについて、心より御礼を申し上げます。おかげさまで教養部らしい多彩な分野の論文を掲載することができました。また、本号巻末には教養部所属の先生方の研究業績も掲載させて頂きました。

本号で2022年度教養教育研究会委員の編集も最後になります。編集作業に携われた先生方にも厚く感謝申し上げます。今後も『教養部紀要』が研究成果発表の場としてますます充実したものになることを祈念いたします。 (松井記)

令和5年3月18日 印刷
令和5年3月25日 発行

(非売品)

愛知学院大学論叢
教養部紀要第70巻
第3号 (通巻第202号)

編集責任者
佐々木 真

発行者 愛知学院大学
教養教育研究会
〒470-0195

愛知県日進市岩崎町阿良池12
電話 〈0561〉 (73) 1111 (代表)

印刷所 株式会社 あるむ
電話 〈052〉 (332) 0861

THE JOURNAL OF AICHI GAKUIN UNIVERSITY

Humanities & Sciences

Vol. 70 No. 3
(Whole Number 202)

CONTENTS

Articles

- Shinichi MATSUI : Effectiveness of Using Qualitative Data for Classroom Improvement:
An Exploratory Data Analysis by using KH Coder..... (1)
- Masayoshi ISHIKAWA : Rorschach Reaction of the Shaman
—From the Viewpoint of Thinking Process and Communicating Style—..... (17)
- Hiroyuki UEHARA : An Analysis of Aichi Gakuin University Test of Liberal Arts and Natural Sciences
Using Equivalent Number of Choices..... (29)
- Takaomi KONOKI : The Significance of Robert Penn Warren’s Versatile Imagination in the Present Time
..... (39)
- Kenshū SUGAWARA : Research on Manners of Inheriting Buddhism in Tenkei-Denson’s Lineage
—Attached is a Reprint of the Document “Manners for inheriting Buddhism Used
in Tenkei-Denson’s Lineage”—..... (80)

Research Note

- Aya NAKAMURA : Possibilities of Early Modern Japanese Literature as Materials for Classical Education:
From a Research Report on the Development of Educational Programs Using ICT..... (55)

Achievements (2022)..... (81)

Vol. 70 The Total Contents..... (91)

Published
by

Aichi Gakuin University
Nagoya, Japan
2023